り、河南にもあり、福建にもあり、秦の住廬は福建省の泉州南安なり、寒潮毎日回泉州は臺灣海峽に臨んで、我が邦横濱の如き地なり、寒潮の滿減は知り易きなり、回と云ふは素隱は「潮ノ引クナリ」と注したるが、然らず、日日回るも又來る、其の往返を云ふ、家空歸海燕秦系なる主人は不在ゆゑ、家空しきなり、然れども海燕は去年の巢くひし家なるを知るが故に又歸り來る、人去發江梅主人の秦系は不在なるも、其の庭梅は自ら花ひらく、最憶門前柳前に種種の事を叙して置く、其の中で最もなり、閒居手自栽今や春風に遇うて、手栽の門前の柳さぞや青青たるならんと憶はるる、柳の字あらば淵明に比すなぞと云ふが普通の注なり、此の詩は何等淵明に關係なし、

送朱放賊退後往山陰

越中初罷戰　江上送歸橈　南渡無來客　西陵自落潮
空城垂故柳　舊業廢春苗　閭里稀相見　鶯花共寂寥

越中初めて戰を罷む、江上歸橈を送る、南渡來客なし、西陵自ら潮を落す、空城故柳垂れ、舊業春苗廢せん、閭里相見ること稀に、鶯花共に寂寥

たらん、

【句釋】●●朱放は襄陽の人、越の山中に隱居す、●●賊退後の賊は永王璘を指す、永王璘は玄宗三十子の中の尤も末子にて、其の母早く死し、肅宗玄宗の長子之を養育せり、長ずるに及んで叛を謀り、至德年中、祿山が亂後、間も無く、漢中再び擾亂す、淮江浙右吳越の間、盜賊之に乘じて起る、永王璘は矢に中つて竟に死す、其の戰後を言ふなり、山陰は越の會稽郡、越中初罷戰、江上送歸橈越の山陰、賊軍の爲め亂れしが、今や戰罷む、其の亂を避けて長安に在りし朱放が今舟に乘じて舊居に還る、其の歸橈を此に送る、橈音「ダウ」小楫「サヲ」を云ふ、南渡無來客長安より吳越を指して南渡と云ふ、來游の客が無きを想像して云ふ、亂後なればなり、西陵自落潮自然界の狀は變ぜず、其の寂寞を表はす、空城垂故柳山陰の空城は賊亂の後なれば、唯故柳のみ垂垂たらん、舊業廢春苗朱放が曾て栽培せし藥草野菜の類なぞも定んで鋤を容れしものなからん、人事と自然とは反對なるを云ふ、閭里稀相見閭里の人、東逃西竄して、相見る者果して幾人か存する、鶯花共寂寥折角時節は鶯花の佳期に遇ふも、同賞する友も稀なれば寂寥のものならんと云ふ、

尋南溪常道人隱居

一路經行處　莓苔見履痕　白雲依靜渚　春草閉門

過雨看松色　隨山到水源　溪花與禪意　相對亦忘言

一路經行の處、莓苔履痕を見る、白雲靜渚に依り、春草閉門を閉づ、雨を過ぎて松色を看、山に隨つて水源に到る、溪花と禪意と、相對して亦言を忘る、

【句釋】南溪は未詳、常道人常は名、道人は詩人にも、方外の法侶にも用ふ、此の道人は僧ならん、一路經行處キンヒは佛家の修行の一、路を周廻して咒念するなり、此の二字あるを以て余は常道人を釋氏と判じたるなり、莓苔見履痕日本の如く齒のある下駄は浙江江蘇の間に於て、余は見聞せしことなきが、天台の寒山が木履を穿ちし事より見れば、漢土の南方にも有るなり、道人以外に莓苔卽ち「コケ」を破るもの無く、道人が經行するに依て苔が破れ、履痕が見はる、寂寞の境知るべし、白雲依靜渚往訪者が漸漸行くに隨がつて、白雲が幽靜なる渚邊に片片依るを見る、春草閉開門白雲は天上より落るもの、春草は地上に生ずるもの、高低の對を

爲すこと知るべし、閉門の前に到れば、門閉づは人無きなり、春草萋萋たるは、人の踏破るもの無ければなり、過雨看松色サツと通過する雨を過雨と云ふ、非常に人意を快にするもの、此の雨後に門前に立て松を看る、塵念消せざるを得んや、隨山到水源山路の屈曲して行くに隨がつて漸漸水源に到る、心の萬境に隨がつて轉ずと云ふ素隱の注は何等の曲解ぞ、溪花與禪意、相對亦忘言是れ色是れ空、是れ空是れ色、花を看て相言ふ所如何、眞理を體得すれば言の發すべきなし、畢竟色も忘れ、空も忘れ、亦言も忘る、忘れずんば眞の禪を得たりと言ふべからず、

題元錄事所居

幽居蘿薜情　高臥紀綱行　鳥散秋鷹下　人閒春草生

冒嵐歸野寺　收印出山城　今日新安郡　因君水更清

幽居蘿薜の情、高臥紀綱行はる、鳥散じて秋鷹下り、人閒にして春草生ず、嵐を冒して野寺より歸り、印を收めて山城を出づ、今日新安郡、君に因つて水更に清し、

【句釋】元は姓、錄事は官名、日本今日の書記官に類する役、所居は元が官を罷めて後にはあ

らず、在官中其の別墅に幽居するなり、幽居蘿薜情蘿薜情とは世外情と言ふが如し、人間名利の情と異なるを云ふ、「ツル」のあるが蘿、「ツル」の無きが薜、高臥紀綱行高臥するも紀綱は行はるるなり、吏正しければ言はずも法令行はるるなり、古注に錄事を送る詩、多く紀綱と稱する者は、喬琳初唐の人四州の刺史を歷、嘗て錄事任沼に謂つて曰く、子は一州に紀綱たり、能く刺史に効るや、此の故事が廣く用ひらるるに至りしなり、鳥散秋鷹下鳥の四散するは、秋鷹が下ればなり、秋鷹下れば、鳥は四方に散ずるなり、秋鷹は錄事其の人に譬へ、鳥は郡の小賊輩に譬ふ、人閒春草生役所の門前春草生ず、人が訴訟なぞ起す者少なきなり、紀綱行の意味明明たり、冒嵐歸野寺晴嵐を冒して野寺に游ぶを得る所以は、訟庭が閒なるに由る、游逸して官紀を破るにあらず、收印出山城是れ官を解て隱居せし事を言ひしにはあらず、錄事の印を庫に收めて、以て山城を出て游ぶを云ふ、軍人が帶劍のまま游步するは嚴に過ぐ、是れと同じく役人の威嚴なぞを人に示さざるの謂なり、或說は誤る、今日新安郡新安は今日河南省河南府なり、此の郡の錄事にて現官なり、或說に今日新安郡の錄事は、他人に任ずれども、元氏が一度ココに來りて紀綱となるべき政を施したれば、郡中の者自ら化して志しも淸らかに、貪鄙の者もなく云云」と、幽居と云ふ文字より此の如き說を爲す、然れども其の說誤まりなること知り易し、

因君水更淸水の淸きは、人の淸きなり、人の淸きは政治まればなり、溪水が淸きなりと見たる素隱は凡見なり、

寄靈一上人

高僧本姓竺　開士舊名林　一去春山裏　千峯不可尋
新年芳草遍　終日白雲深　欲徇微官去　懸知訝此心

高僧本姓は竺、開士舊名は林、一たび去る春山の裏、千峯尋ぬべからず、新年芳草遍く、終日白雲深し、微官に徇ひ去らんと欲す、懸かに知る此の心を訝らんことを、

【句釋】靈一上人の略傳は前に出せり、高僧本姓竺本は「ホン」と訓む、「モト」と訓せざるを可とす、晉の高僧に竺道生あり、頑石に佛性ありて唱道して、石に向つて說法す、石乃ち點頭したる事あり、僧は俗姓を晉の道安以來用ひず、一般に釋又は竺と稱す、天竺の竺と、釋迦の釋を取りしなり、今靈一を道生に例す、開士舊名林晉の支遁字は道林、此の人は「支」の姓を有するを以て支道林と稱せらる、多金の法師にて山を買ひしことあり、開士は梵語の「菩薩」を譯し

たる語、自他の覺道を開く力ある士の義なり、是れ以て靈一を例す、一去春山裏一去千里と云ふ語が佛典にある、卽ち開士の德名が餘りに高くなりて、多勢の者が聚まり來りたるときは、乃ち一夜の中に、千里も走り去るべしとなり、律文の制戒の一とす、今春山の裏に一去し、千峯不可尋此の多くの峯の中、何處に向つて之を尋ねんや、新年芳草遍定んで山中の新年、芳草が處處に遍ねからん、終日白雲深白雲は終日盡る時なし、終日盡る無きは終年盡きざるなり、欲徇微官去徇は天子の命に應じて官吏と爲つて京城に赴く事、長卿自身を云ふ、懸知は上人が長卿が心を遙かに知り玉はん、訝此心何故に山中に入つて道を修ずる念を起さず、官吏なぞと云ふ俗物に成るやと訝かり玉はんと、謙遜して言ふなり、已前共に八首、

除夜宿石頭驛

戴叔倫

旅館誰相問　寒燈獨可親　一年將盡夜　萬里未歸人
寥落悲前事　支離笑此身　愁顏與衰鬢　明日又逢春

旅館誰か相問はん、寒燈獨親しむべし、一年將に盡きんとする夜、萬里未歸の人、寥落前事を悲み、支離此の身を笑ふ、愁顏と衰鬢と、明日又春に

逢はん、

【句釋】除夜十二月三十日を除夜と云ふ、一年を送るを以て、是の夜は眠を廢するが式なり。石頭驛は洪州に在り、旅館誰相問、寒燈獨可親除夜の客中、人の問ふ者無く、唯寒燈と親しむ、寂寞の狀を極む、一年將盡夜、萬里未歸人一年は今夜盡き、我は萬里未歸の人、感慨の情を極む、寥落悲前事、支離笑此身「オチブレ」は寥落、「ハナレバナレ」は支離、前年の寥落を悲しんで、今日の支離を笑ふなり、親戚や知己と支離するなり、愁顏與衰鬢愉快なる顏を爲さんと欲するも能はず、新年は總て面目を改めざるべからず、然るに此の如き憫然なる狀を以て、明日又逢春春風に逢ふを愧づ、男兒たる能はざるの意を寓するものと見るべし、

汝南別董校書

擾擾倦行役　相逢陳蔡間　如何百年內　不見一人閒
對酒惜餘景　問程愁亂山　秋風萬里路　又出穆陵關

擾擾として行役に倦む、相逢ふ陳蔡の間、如何ぞ百年の內、一人の閒なるを見ず、酒に對して餘景を惜み、程を問うて亂山を愁ふ、秋風萬里の路、

又穆陵關を出づ、

【句釋】汝南は地名、今日の河南省汝寧府汝陽縣東南六十里の地とす、別に南汝南と西汝南と東汝南とあり、董は姓、校書は官名、漢代初めて置く、藏書の室、文學の士をして、其の中に讎校せしむ、文字を刊正する職、秘書省に屬して、極めて小官なり、擾擾倦行役德宗の建中中に戴は撫州の刺史と爲り、後還らんと欲して道に卒す、是等の事よりして行役の語あり、擾擾は悠悠の反對、「ミダレル」なり、相逢陳蔡間董は陳より京師へ赴き、我は陳へ行かんとす、其の中途の汝南にて相逢ふなり、如何百年內百年は一生の代名詞、一生涯此の如く、擾擾として行役に惱むは如何ぞと嘆ず、不見一人閒君も行役、我も行役、一人として閒なる者を見ず、同病相憐の意なり、對酒惜餘景此の如き行途に相逢ふ、一杯を共にして、光陰の過ぐる速きを惜む、餘景は殘歲と言ふが如し、自分の殘年を惜しむなり、戴は五十八にして卒せしゆゑ、此の詩は五十六の時なり、問程愁亂山問ふ者は戴なり問はるる者は董なり、蔡州より京師への程、山又山、地理益す高し、亂山高下商州に入る、亂山を高下せざるべからず、秋風萬里道、又出穆陵關此の二句は戴の赴く方を云ふ、汝南より南の方、卽ち今日の河南と河北の界なる穆陵關を出でて、以て古の陳、今の江蘇省淮安府の地へ赴くなり、董が汝南より遙かの穆陵關を出

て遠方へ行くを想ひやる、とある注釋は大に誤る、汝南より京師への路は開封、河南、蒲州の三府を經て赴く、穆陵を出でては迂回するも甚だし、

江上別張勸

年年五湖上　厭見五湖春　長醉非關酒　多愁不爲貧
山川迷道路　伊洛暗風塵　今日扁舟別　俱爲滄海人

年年五湖の上、厭ひ見る五湖の春、長醉酒に關するに非ず、多愁貧の爲にあらず、山川道路に迷ひ、伊洛風塵暗し、今日扁舟の別、俱に滄海の人と爲る、

【句釋】江上は詩中にある五湖上の事なり、本義は江と湖と別なれども、一義に用ふる場合も多し、張勸は傳未詳、此の江上に相逢ひ、互に亂を避けて他方へ赴かんとして相別るるなり、年年五湖上五湖は江蘇省の鎭江府にあり、安祿山や史思明の爲め羣盜往來して、此の處安からず、而かも年年此の事繼ぐ、厭見五湖春厭ふも見ざる能はず、見るも樂しまず、煙花相好きも、生命に關する危險あり、春何の賞する所かあらん、此の五湖の上は、唐代縣江南道潤州にて、

戴の故郷なり、長醉非關酒酒を飲んで長醉するは尋常なり、我が長醉は決して飲酒の爲めにあらず、世亂の爲め、心身定まらず、宛かも醉人の態の如し、多愁不爲貧人の苦痛心配、貧より甚はだしきは莫し、然れども我の愁は衣食缺乏の爲めにはあらず、山川迷道路迷は未知の道を通過する故に迷ふと、已知の道と雖も、愁の爲めに迷ふとの二意を含むと知れ、互に道途に就くを云ふ、伊洛暗風塵伊水と洛水は河南省の河南府を流るる水なり、風塵の字義種種の解釋あるが、今は兵馬の塵が暗しと見るべし、今日扁舟別互に水路を取つて、旅途に就くの別なり、俱爲滄海人水上の人と爲るとの意にはあらず、定まらざる人と爲るとの意なり、

送丘爲落第歸江東

王維

憐君不得意　況復柳條春　爲客黃金盡　還家白髮新
五湖三畝宅　萬里一歸人　知爾不能薦　羞稱獻納臣

憐む君が意を得ず、況や復柳條の春、客と爲つて黃金盡き、家に歸らば白髮新ならん、五湖三畝の宅、萬里一歸人、爾を知つて薦むること能はず、獻納の臣と稱せらるるを羞づ、

【句釋】丘爲は未詳、落第は進士及第せざるなり、江東は今日の江蘇蘇州を云ふ、丘爲は繼母に事へて至孝の人と稱せらる、右丞の交はる人物、其の人品知るべし、憐君不得意及第者は得意なり、落第者は失意なり、憐まざるを得んや、況復柳條春別るる人には柳條を折りて餞す、其の餞する物の柳條は青青と得意なるが如きも、餞せらるる人は棲棲として不得意なり、爲客黃金盡故郷を出でし時は及第を想像して、金を多く用意して來れるも、落第して長安を去る時は、囊底已に一物無し、還家白髮新白髮は愁に緣つて生ずるもの、愁に緣らざれば衰老に赴く故なり、此の句此の兩意を含む、五湖三畝宅畝は畝と同じ、極めて微微たる宅が五湖の上に在る、還るも亦可、萬里一歸人長安より蘇州へ還る、實際の里程二千里もあらん、萬里は遠方の極を云ふ、知爾不能薦爾の人物を能く知りつつ、而かも推薦する事を得ず、羞稱獻納臣古注に則天武后、銅匭を置き、四方事を告ぐるの書を置く、而して理匭使の役を置く、玄宗改めて獻使と爲す、王維が職嘗て尚書右丞たり、實は納言官なり、此の納言官に居り乍ら爾を推薦せざりしは、良とに我が不明を羞づとなり、

岳州逢司空曙

李端

共有髫年故　相逢萬里餘　新春兩行淚　故國一封書

夏口帆初落　涔陽雁正疎　唯應執盃酒　暫食漢江魚

共に髫年の故あり、相逢ふ萬里の餘、新春兩行の淚、故國一封の書、夏口帆初めて落ち、涔陽雁正に疎なり、唯應に盃酒を執つて、暫く漢江の魚を食ふべし、

【略傳】李端は字なし、趙州の人、嘉祐の姪なり、少時廬山に居し、高僧浩然に依て書を讀む、意況清虛にして、酷だ禪侶を慕ふ、大曆五年李搏、進士及第に榜す、祕書省校書郎を授けらる、多病を以て官を辭し、終南草堂寺に居す、未だ幾ならず起て杭州の司馬と爲る、牒訴蔵朴、心甚だ之を厭ふ、田園を買うて、虎丘の下に在り、耽深の癖を爲せり、泉石幽を少く、家を衡山に移す、自ら衡嶽幽人と號す、琴を彈じ易を讀み、高に登り遠きを望み、神意泊然たり、初めより官情無く、箕潁（人の名、清淨に身を修めし人）の志しあり、大曆十才子の一人とす、

附　詩藪の說左の如し、

計氏紀事に云ふ大曆十才子、唐書に人數を見ず、誤なり『唐書』、盧綸、吉中孚、夏侯審、錢起、李端、苗發、司空曙、韓翃、耿湋、崔峒、唯、中孚と審、制作聞くこと無し、疑ふべし、

而して綸、中孚、峒、發、曙、端、湋を懷ひ、兼て夏侯審に寄する詩あり、則ち中孚と審と實に才子の列に在り、韓翃、錢起は與からず、恐くは此の間、章句脫落す、否らずんば別に故あらん、或は中孚と審と翃と峒の四人を去て、皇甫曾、李嘉祐、郎士元、李益を益す、其の人才前に視べて勝ると雖も、而かも實錄にあらず、余曾て古今一時並稱する者を歷考するに多く游從習熟、倡和頻仍を以て、好事之に因つて、以て標目を成す、中間或は品格差肩する、蹤跡離るるを以て、而かも合すること能はず、或は才情迥絕する、聲氣合を以て、而して離るることを得ず、槩論し難きなり、（詩藪外篇三上）

【句釋】岳州逢司空曙岳州は湖南なり、司空の傳は前に出せり、司空曙が長沙に流貶せらるる途次、此の岳州にて逢ひしなり、李端は官を去て、岳州の衡岳へ歸る、共有髫年故は我と君とは竹馬以來の故友なり、髫は童子の垂れ髮を云ふ、結髮せざる時の稱、故は「フルキ」なり、「ユヱ」にあらず、相逢萬里餘非常に故き友に、非常の遠地にて相逢ふ、新春兩行淚新春は相逢ふ今日の期節、覺えず悲喜交も至り、淚を流す、故國一封書李の家人が司空曙に托して、李に一封書を渡されしなり、夏口は岳州の西端、帆初落卽ち洞庭湖に帆が卸したるなり、司空曙の帆とのみ見るは誤まる、一般の帆舟を云ふ、涔陽は浦の名、楚郡に屬す、是れも湖に沿ふ、雁正

疎雁は疎なる筈なるに我は故郷の雁信を得たり、唯應執盃酒、暫食漢江魚相逢ふも又別る、人生無常なり、請ふ漢江の魚を食ひ以て共に旨酒を飲んで情を遣らん、漢江には鰡魚を産す、味甚だ美、鰡は鯁と同じ、魴魚是れなり、江東に鰡と呼ぶ、漢江は或時期を定めて捕ふるを禁ず、和語に「ナヨシ」と稱す、

洛陽早春　顧況

何地避春愁　終年憶舊游　一家千里外　百舌五更頭
客路偏逢雨　鄉山不入樓　故園桃李月　伊水向東流

何れの地にか春愁を避けん、終年舊游を憶ふ、一家千里の外、百舌五更の頭、客路偏に雨に逢ふ、鄉山樓に入らず、故園桃李の月、伊水東に向つて流る、

【句釋】洛陽は今日の河南省河南府なり、何地避春愁春に對する見聞皆愁ならざるは無し、何れの地にか之を避けん、表面の解此の如し、裏面の解は滿朝の小人共、我を忌むこと甚だし、何處に之を避けんやなり、顧況は宰相李泌が爲め高官と爲る、泌が卒するに及んで、權貴を嘲

誚する詩を作り、官を去て、茅山に隱る、終年憶舊游終年は一年中と言ふこと、李泌との舊游を憶ふのみにて、他には知游を憶はず、一家千里外蘇州に在る我が家は此の洛陽と千里を隔つ、百舌五更頭百舌は「モズ」と云ふ鳥、其の囀づること他鳥に比するに忙がはしき鳥なり、五更の頭に鳴かれては、愁人眠らざる上、更に眠る能はざるなり、此の鳥も朝廷の小人に比す、客路偏逢雨、鄉山不入樓鄉山の樓に入らざるは、雨偏に多ければなり、春愁多き所以見るべし、故園桃李月此の洛陽の客中雨の多きに苦しむが、蘇州の故園は桃李開き、且月も美からん、伊水向東流我は東を望むのみなるが、水は東に向つて流るるを得、東は蘇州の方面なり、伊水は洛陽を流るる川、我は遂に水たるを得ざるを恨む、

送陸羽　皇甫曾

千峯待浦客　香茗復叢生　採摘知深處　煙霞羨獨行
幽期山寺遠　野飯石泉清　寂寂然燈夜　相思磬一聲

千峯浦客を待つ、香茗復叢生す、採摘深處を知り、煙霞獨行を羨む、幽期山寺遠く、野飯石泉清し、寂寂たる然燈の夜、相思ふ磬一聲ならんことを

【句釋】　陸羽が吳興の妙喜寺に歸るを送る詩なり、妙喜寺は高僧皎然の住坊、羽が草亭は寺畔に在るなり、三癸亭と名く、住する者は陸羽、詩を賦する者は皎然、字を書する者は顏眞卿時に三絶と稱す、千峯待逋客是れ陸羽の居る所を云ふ、逋は亡なり、逃なり、「ニグル」なり、官を罷めし客の義なり、羽は大常寺大祝の官に任せらるるも就かずして、吳興に隱遁せり、香茗復叢生吳興の顧渚山は日本山城の宇治の如く、香茗を產する天下第一と稱せらる、二番茶が出來るを叢生と云ふ素隱の解は滑稽極まる、唯茶が善產すと見て可なり、採摘知深處顧渚の山溪深處に羽が自ら新芽を採摘する、煙霞羨獨行春風煙霞の中を、自由に獨行す、羨まざるを得んや、幽期山寺遠再會の時を約するを幽期と云ふ、然れども今山寺卽ち妙喜寺の三癸亭へ歸り玉はば、何れの時に會ふやは定めがたし、山寺は遠ければなり、野飯石泉淸羽が道中、山間の旅舍にて野飯を喫す、石泉の淸きを以て炊ぎたるもの肉食者流の解する所にあらず、陸羽人と期するときは、虎狼を阻すと雖も避けざるなり、扁舟にして山寺に往く、唯紗巾、藤鞋、短褐犢鼻のみ、林木を擊ち、流水を弄し、或は曠野の中を行き、古詩を誦し、裴回月黑きに至つて慟哭して返る、當時以て接輿に比す、『才子傳』に出づ寂寂然燈夜是れは妙喜寺へ返りて後、然は「モヤス」なり、然燈佛と稱する佛があるがそれには關係せず、相思磬一聲相思ふ者は皇甫曾なり、思はる

る者は陸羽なり、妙喜寺の夜課靜坐の狀を思ふなり、靜夜に磬を聞く、其の幽趣は到底俗人の解する所にあらず、唯耳根のみ淸淨なるにあらず、六根悉く淸淨となるなり、

贈喬尊師

張鴻

長忌時人識　有家雲澗深　性唯耽嗜酒　貧不破除琴
靜鼓三通齒　頻湯一味參　知師最知我　相引坐檉陰

長く忌む時人の識らんことを、家あり雲澗深し、性は唯酒を耽嗜す、貧なるも琴を破除せず、靜に三通の齒を鼓し、頻に一味の參を湯にす、知んぬ師の最も我を知ることを、相引いて檉陰に坐せしむ、

【句釋】　喬尊師喬は姓、尊師は道士の敬稱語、道敎と稱する敎は、佛敎より出でて別に色を施せしもの、六朝時代は佛道混合せり、黃庭經を根本經典となし、以て天の星に事ふるものなり、長忌時人識俗人に多く識らるるは却て我が道の貴きを滅却するもの、故に時人の識を忌む、有家雲澗深雲の深き處は俗人尋ぬる能はず、性唯耽嗜酒天に酒星あり、道士は天を祭る者、豈酒を耽嗜せざるを得ん、貧不破除琴琴は身を修め性を理し、其の天眞に反るなり、豈琴を破除す

るを得ん、靜鼓三涌齒『酉陽雜俎』に學道は須らく天鼓を鳴し以て衆神を召すべし、左齒相叩ノを天鐘と爲し、右齒相叩くを天磬と爲し、中央の上下相叩くを天鼓と爲す、是れ殆んど佛敎の「彈指」と云ふものと同じ、天鼓や天磬は共に佛敎より出でし語なり、頻湯一味參人參上品之を食すれば長年と、長年なるのみにあらず、修行者に益の無き、其の性を增大にするものなり、知師最知我喬尊師は最も能く我を知れり、我を知るは我が俗人にあらざればなり、相引坐檉陰我に坐を檉柳の陰に賜ふなり、檉は柳の屬、小楊なりと注したる本あるが、年を經れば長大と爲る質なり、

客中

楚人歌竹枝　游子淚沾衣　異國久爲客　寒宵頻夢歸
一封書未返　千樹葉皆飛　南過洞庭水　更應消息稀

于武陵

楚人竹枝を歌ふ、游子淚衣を沾す、異國久しく客と爲る、寒宵頻りに歸るを夢む、一封書未だ返らず、千樹葉皆飛ぶ、南洞庭の水を過ぎば、更に消息稀なるべし、

【略傳】于武陵名は鄴、字を以て行はる、杜曲の人、大中の時、嘗て進士に擧らる、意に稱はず、書と琴とを攜て商洛巴蜀の間に往來す、或は卜中に隱れて、獨醒の意を存せり、地を避け嘿嘿として、語榮貴に及ばず、嵩陽の別墅に歸老せり、

【句釋】客中旅寓中の作、楚人歌竹枝俗に流行歌、其の土地の風俗に就てのハヤリ歌を竹枝と云ふ、楚國に於て之を聞く、游子淚沾衣竹枝を歌ふ聲惻惻、他鄉の游子眞に淚を流すなり、異國久爲客久の中に多年を意味す、寒宵頻夢歸鄉を思うて止まず、其の歸鄉夢に入る頻りなり、一封書未返我より通信す、而かも未だ返信なし、千樹葉皆飛返信未だ來らざるに、樹樹葉皆飛散し去る、南過洞庭水今楚を去つて、巴蜀の間に游ばんとす、乃ち南の方洞庭湖を渡る、更應消息稀愈よ遠方となる、消息益す遠くなる、

長安春日

曹松

浩浩看華晨　六街揚遠塵　塵中一丈日　誰是晏眠人
御柳垂著水　野鶯啼破春　徒云多失意　猶自惜離秦

浩浩たり華を看る晨、六街遠塵を揚ぐ、塵中一丈の日、誰か是れ晏眠の人、

御柳垂れて水に著き、野鶯啼いて春を破る、徒に云ふ多く意を失すと、猶ほ自ら秦を離ることを惜む、

【句釋】長安は唐の都、春日の風景を咏出す、浩浩は廣大なる形容詞、看花晨看花の晨に、看花の客なし、黄巣の兵亂に遭うて、都城も荒涼たるなり、六街とは車を六輛雙べて通過に支障なき路を云ふ、長安の大道卽ち是れなり、揚遠塵兵馬の塵の飛揚するなり、塵中一丈日一丈の日とは日の一丈程高きを云ふ、太平の時は一丈の日なるも、人皆晏眠するが、今日は決して此の如き晏眠を許さず、誰是晏眠人晏は「オソオキ」なり、早の反對、此の兵塵中に恐くは晏眠する者は一人もあらざるべし、御柳垂著水宮溝の柳は、其の枝垂垂として水に著く、野鶯啼破春長安の野外には啼鶯が唯春を破るのみ、春も已に暮れんとする、徒云は「ムダ」に云ふ、云ふも功無きなり、多失意長安に居りしとて、別に得意なるにあらず、得意にあらざるも、猶自惜離秦人情の自然、ドウも秦卽ち長安を離るるは如何にも惜しき念が生ず、惜念の生ずるは畢竟久住したるが故なり、已前に共十首、

題破山寺後禪院

常建

清晨入古寺　初日照高林　曲徑通幽處　禪房花木深
山光悅鳥性　潭影空人心　萬籟此俱寂　唯聞鐘磬音

清晨古寺に入れば、初日高林を照す、曲徑幽處に通じ、禪房花木深し、山光鳥性を悅ばしめ、潭影人心を空しうす、萬籟此に俱に寂なり、唯聞く鐘磬の音、

【句釋】破山寺後禪院破山寺後にある禪院、破山寺の支院ならん、今日の江蘇省蘇州府常熟縣の地に在り、古注に靳州黄梅に破頭山あり、五祖六祖に傳衣の處と、破山寺と全く關係なき注除くべし、清晨入古寺天氣朗晴の晨、禪院に入る、初日照高林日上りて先づ大山を照すと云ふ佛語あり、此の語に依つて此の句を作す、曲徑通幽處徑は無きが如くにして而かも有るを云ふ、禪房花木深自然の境界、人の造作にあらざるを云ふ、山光悅鳥性鳥の性は鳥の性として、萬劫變せず、是も亦自愛を悅ぶを云ふ、潭影空人心潭水の清澄なるは、人心をして濁念を消せしむるを云ふ、萬籟此俱寂風の爲め種種の物が音を發するを萬籟と云ふ、唯今其の音無し、寂は「ジヤク」と訓むべし、「セキ」と訓むべからず、唯聞鐘磬音禪房花木深き處より出る鐘磬の音を聞く

のみにて、他に一微塵の音も無し、

暮過山村　賈島

數里聞寒水　山家少四鄰　怪禽啼曠野　落日恐行人
初月未終夕　邊烽不過秦　蕭條桑柘外　煙火漸相親

【句釋】暮過山村夕暮に山村を通過して其の寂寞の狀を咏ず、數里聞寒水支那の一里は日本の六丁、卽ち日本の一里は、支那の六里なり、何里なるやを知らず、行過する地、唯寒水の音を聞く、山家少四鄰甲地に一戸、乙地に一軒なり、怪禽啼曠野目に慣れざる鳥が、曠野卽ち人の無き野に啼く、落日恐行人日は西山に入らんとして行人の膽を恐れしむ、初月未終夕弓張月は早く出でて、早く沒す、十四夜十五夜の如く、一夜中を照すとは殊なる、邊烽不過秦秦卽ち都城を過ぎ去つて後は、烽火も見る能はず、烽火を見ば人の所在の知れるなり、烽火を見ず、何

ぞ人家あらん、蕭條桑柘外桑柘は人の栽培する植物、此の桑柘を認むるからは稍や人意を強うする、蕭條とさびしき中、自ら强味あり、煙火漸相親夜中に人火を認む、此の間の客味言語の外に在り、

山中道士　頭髮梳千下　休粮帶瘦容　養雛成大鶴　種子作高松
白石通宵煑　寒泉盡日春　不曾離隱處　那得世人逢

頭髮梳ること千下、粮を休めて瘦容を帶ぶ、雛を養うて大鶴となし、子を種ゑて高松となす、白石通宵煑、寒泉盡日春つく、曾て隱處を離れず、那ぞ世人に逢ふことを得ん、

【句釋】山中道士古注に『道經』に云ふ人大道を行ふものを道士と號す、身心理に順ひ、道に從ふことを事と爲す故に道士と稱す、仙道と稱する者も此の道士の事なり、藥を賣り以て活を爲す、陽勢を增大にする藥を賣る如きは沙汰の限りなり、頭髮梳千下道士の祖の清虛眞人なる者頭を梳り髮を理むること過多を得んと欲すと、千下は梳ること多きを云ふ、佛敎に僧と尼

とある如く、道士にも、男と女とあり、玉姜や靈香や麻姑の如き皆女道士なり、髪を梳るは男女共同じ、休粮帶瘦容人間煙火の食を爲さず、果を喫し、霞を餐し、沆瀣を飲み、身容の瘦んことを願ふ、養雛成大鶴周の靈王の太子晉好んで笙を吹く、鳳凰鳴を作す、道士浮丘公、接して以て嵩山に上る、後、緱山に見る、白鶴に乘り、手を擧げ時人に謝して去る、鶴の道士と關係深きこと知る可し、種子作高松松を生長させるは、其の長生の道と關係すればなり、鶴骨松貌は道士の本領なり、白石通宵煮道士の經典たる『眞誥』に谷を斷ち山に入つて、當に白石を煮るべし、昔し白石子、石を以て粮と爲す、寒泉盡日舂一種の水車ありて、白石を細末にする爲め舂かすものならん、日本では實驗する能はず、不曾離隱處、那得世人逢己が居を清淨とし世人の居は塵濁とす、故に己が隱處を守りて、曾て世人と伍せず、得の字を欲に作らば猶ほ佳ならんと思ふ、

贈山中日南僧

張籍

獨向雙峯老　松門閉兩涯　翻經上蕉葉　掛衲落藤花
甃石新開井　穿林自種茶　時逢海南客　蠻語問誰家

獨雙峯に向つて老ゆ、松門兩涯を閉づ、經を翻して蕉葉を上せ、衲を挂けて藤花を落す、石を甃んで新に井を開き、林を穿つて日に茶を種う、時に海南の客に逢ふ、蠻語誰が家ぞと問ふ、

【句釋】 山中に修行して居る、日南僧に贈るなり、日南は舊注に『漢書』を引いて唐の驩州とす、今謂く唐の嶺南道愛州、今日の安南國交州府の地なり、此の安南の僧が、獨在雙峯老雙峯は寺名、五祖山中に在る、此の五祖山の雙峯寺に挂錫したる僧なり、松門閉兩涯松が道の兩涯にありて以て門の如くなるを云ふ、翻經上蕉葉芭蕉の葉は字を書くによし、懷素の如きは蕉葉にて字を稽古せしものなり、此の師も亦、梵經を翻譯して、蕉葉に書するなり、挂衲落藤花衲衣を藤樹に挂くれば、花自ら落つ、共に山中に住する久しきを言ふ、甃石新開井、穿林日種茶甃は音「シウ」訓「イシタタミ」又「ヲサムル」なり、井を修めるなり、穿は林中を鋤くことと知るべし、時逢海南客、蠻語問誰家此の句を解するに二說あり、一は曰く張籍が山中へ行きて、彼の日南國の客僧に逢ひたれば、「エビス」の田舍音にて、「ワドノ」は何なる家種の人ぞ、何と云ふ人ぞやと尋ねしぞ、一は曰く此の地は交州郡に屬し、言語も都とは大に異なる、時に土人が來りて、

張籍を見て、何者なりやと訝りて、此の家に入る者は誰なりやと問ふなり、余は此の後説を取る、誰家の家は人と同意味なり、

田家　章孝標

田家無五行　水旱卜蛙聲
池塘煙未歇　桑柘雨初晴
牛犢乘春放　兒孫候暖畊
歲晩香醪熟　村村自送迎

田家五行無し、水旱蛙聲を卜し、牛犢春に乘じて放ち、兒孫暖を候つて畊す、池塘煙未だ歇まず、桑柘雨初めて晴る、歲晩香醪熟す、村村自ら送迎す、

【句釋】田家は田舍の春日を詠ずるものなり、無五行水火木金土を五行とす、田家は此の卜法を問はず、水旱卜蛙聲今年は水が出る、今年は旱なりと悉く蛙聲にて知る、多年熟練もあり、實驗する所なり、牛犢乘春放牛や犢は野に放ちて、自然に牧養する、兒孫候暖畊兒や孫は春暖を待つて畊作する、自然を賴む、五行など賴まざるなり、池塘煙未歇、桑柘雨初晴柘は音「シヤ」訓「ツミツグ」なり樵と同じ、五月雨も漸く晴る、歲晩香醪熟十二月には稻は庫に藏む、香

醪即ち良酒は熟す、村村自送迎人の集まる所、酒無かるべからず、食なかるべからず、食あり、酒あり、送迎忙はしき所以なり、

秦原早望

一忝鄉書薦　長安未得回　年光逐渭水　春色上秦臺
燕掠平蕪去　人衝細雨來　東風生故里　又過幾華開

一たび鄉書の薦を忝うせられて、長安未だ回るを得ず、年光渭水を逐ひ、春色秦臺に上る、燕は平蕪を掠めて去り、人は細雨を衝て來る、東風故里に生ずるならん、又幾華の開くを過ぎん、

【句釋】秦原は長安の郊外を云ふ、早望は早晨に望むなり、一忝鄉書薦章は浙江錢唐の人、鄉貢生に推薦せられて、秦城に來れども未だ及第せず、長安未得回長安を未だ去るを得ざるの意味なり、空しく滯留するを媿づるなり、年光逐渭水長安城中を流るる水を渭水と云ふ、光陰は流水と同じく逝て回らざるを云ふ、春色上秦臺春色は秦臺に上るも、我は榮冠を得ざるを嗟く意を含む、燕掠平蕪去平蕪は草の茂るを形容す、飛燕が迅速に飛び去るを云ふ、人衝細雨

●來何人なるを知らず、細雨を衝いて來る、●●●●東風生故里●●東風は天下の公道、我が故里の蘇州も定んで吹かん、●●●●又過幾華開花の開く一番より二十四番に至る、其の番番の花開いて幾番に至るやと想像するなり、已前共に六首、輕重斤量大抵同じきものなり、

前虛後實

周弼曰く、前聯は情にして虛、後聯は景にして實、實なれば氣勢雄健に、虛なれば態度諧婉なり、前を輕うし、後を重うす、劑量適均にして、窒塞輕俗の患無し、太中より以後は此の體多し、今に至りて唐詩を宗とする者は之を尙ぶ、然れども終に未だ前の兩體の渾厚なるに及ばず、故に其の法を以て三に居く、善なる者は拘せざるなり、

今謂く、是れ宋之問の陸渾山莊より、章孝標の秦原早望に至る二十四首の、三四五六の四句、悉く是れ虛なるに反し、三四は虛にて、五六は實なる體を云ふ、作者が必ず周弼云ふ如きの意を以て作りしにはあらず、周弼が其の作品に就て其の名を設けしこと、今更言ふの要なし、而して此の體の詩は太中卽ち宣宗時代特に多しと爲す、太中は詩家の所謂晩唐にて、詩運の傾むくに近き時なり、大勢の上より言へば、日將に西山に入らんとする如く、態度諧婉は或は之れ有らん、氣勢雄健は求むるも多からざるが正當の論なり、然りと雖も程度問題にて、一概には斷じがたし、周弼は認めて以て、實卽ち景を叙する語は、氣勢雄健にして、虛卽ち情を叙する語は、態度諧婉なりと爲すなり、姑らく其の言を恕して、仔細は評論下に於て之

を斷ず可し、

雲陽館與韓少卿宿別　　司空曙

故人江海別　幾度隔山川　乍見翻疑夢　相悲各問年
孤燈寒照雨　深竹暗浮煙　更有明朝恨　離盃惜共傳

故人江海の別、幾度か山川を隔つ、乍ち見て翻つて夢かと疑ふ、相悲んで各年を問ふ、孤燈寒うして雨を照らし、深竹暗うして煙を浮ぶ、更に明朝の恨あり、離盃共に傳へんことを惜む、

【句釋】雲陽館は長安城中の一酒樓なり、韓少卿は一に韓外卿に作る、宿別は一宿して東西に分離する、故人江海別、幾度隔山川故人は韓を云ふ、友人なり、今日に至るまで、交游の久しき、江海に別れ山川を隔て、相見て晤笑するを希ひ、其の離別を惜みしと幾度なるを知らず、乍見翻疑夢此の雲陽館にて偶然に見る、故に乍と云ふ、眞なるに夢かと疑ふゆゑ翻と云ふ、相悲各問年悲の中に喜あり、此の間の心事言ふべからず、第一互に年を問ふ、孤燈寒照雨館裏の孤燈、以て館外の雨を照す、深竹暗浮煙館庭の深竹、煙の爲めに暗し、更有明朝恨更は俗

語の「其ノ上ニ」に當る、偶ま相遇ふも明朝は又東西分離するの恨みあり、離盃惜其傳一盃一盃毎に別れの時刻は逼るなり、二人共に之を傳ふるを惜しむ、

酬暢當　　耿湋

同游漆沮後　已是十年餘　幾度曾相夢　何時定得書
月高城影盡　霜重柳條疎　且對樽前酒　千般想未如

同じく漆沮に游んで後、已に是れ十年餘、幾度か曾て相夢む、何の時か定めて書を得ん、月高くして城影盡き、霜重くして柳條疎なり、且樽前の酒に對し、千般想へども未だ如くならず、

【句釋】暢當は河東の人、暢の詩に和して酬ゆ、同游漆沮後『詩經』に漆沮之從と出づ、嚴粲曰く二水の名、禹貢に東會ニ漆沮一と、孔氏云ふ涇水の東に在り、一に洛と名く、乃ち今日の陝西省汾州の治、西漢、縣右扶風郡、東漢、縣司隸右扶風郡、是れ漆水なり、西漢、縣武都郡、東漢、縣涼州武都郡、今日の陝西省漢中府略陽縣東一百十里是れ沮水なり、此の漆水沮水の間に同游してより、已是十年餘屈指すれば十年の一昔と爲る、幾度曾相夢之を想うて息まず、幾度

も夢を見る所以、何時定得書夢は幾度見るも眞にあらず、其の眞なる信書は何れの時か得るや、月高城影盡城影の有るは月の低ければなり、月高ければ城影無し、半夜を云ふ、霜重柳條疎柳條の密なるは春夏なり、其の疎なるは秋冬なり、春夏より秋冬に至る、君を思はざる日無しとの意を含む、且對樽前酒酒は掃憂帚、又忘憂物の異名あり、之を飲んで君を思ふ情を忘れんと欲するも、千般想未如酒力を借るも要するに憂は增すのみにて、曾て君を思ふ千般の思は忘れず、嗚乎酒も意の如くならざるなり、

寄友人

張蠙

世道復何如　東西遠索居　長疑卽見面　翻致久無書
甸麥深藏雉　淮苔淺露魚　相思不我會　明月幾盈虛

世道復何如、東西遠く索居す、長く疑ふ卽し面を見ると、翻つて久しく書無きことを致す、甸麥深うして雉を藏し、淮苔淺くして魚を露す、相思へども我と會せず、明月幾たびか盈虛す、

【略傳】張蠙字は象文、清河の人、乾寧二年進士と爲る、亂を避て蜀に入る、蜀王、時に金

堂令と爲す、王衍、徐后と大慈寺に游び、壁間の詩を見る、「墻頭の細雨は纖草を垂れ、水面の回風は落花を聚む」愛誦すること久し、謂ふ誰が作ぞ、左右、蠙を以て答ふ、因て禮を給して詩を以て進めしむ、蠙二篇を上る、衍尤も待重す、將に召して制誥を掌らしめんとす、宋光嗣、其の輕傲なるを以て、駙馬宜しく之を疎んずべしと、止白金千兩を賜ふ、

【句釋】寄友人蜀に東川と西川とあり、張は西川に在り、友人は東川に在り、世道復何如乾寧は昭宗の年號、僖宗の光啓、文德、昭宗の大順、景福、乾寧の年間、黃巢の亂、朱全忠等の橫暴ありて、天下治まらず、世道復何如と嘆を發するなり、東西遠索居東川西川と地理遠し、索居卽ち寂寞として居す、長疑卽見面卽は「モシ」と訓す、卽しや面を見ることを得るやと長く疑ふに、何ぞ料らん、翻致久無書彼も得ず、此も得ず、甸麥深藏雉『夏書』に五百里は甸服とあり、『禮記』王制に千里の內を甸服と曰ふ、甸は治なり、田を治るの象なり、卽ち王田に麥を種ゑたるを云ふ、麥が生長繁茂して、其の中に雉子を藏くすを云ふ、淮苔淺露魚淮は淮水、揚州の北界を繞る、有名なる秦淮是れなり、淮水の頭苔の生じたる處、游魚が見える、水淺ければなり、相思不我會相思は片思の反對、兩兩思ふを云ふ成語なり、兩方にて思ふも相會する能はざるを云ふ、明月幾盈虛月は三五にして盈ち、三五にして缺く、此の明月の字を以て長年月會せざ

るを云ふ。

送喩坦之歸睦州　李頻

歸心常共知　歸路不相隨　彼此無依倚　東西又別離
山雲含雨潤　江樹逆潮欹　莫戀漁樵興　人生各有爲

歸心常に共に知る、歸路相隨はず、彼此依り倚るなし、東西又別離す、山雲雨を含んで潤ひ、江樹潮に逆つて欹つ、漁樵の興を戀ふ莫れ、人生各の爲すことあり、

【句釋】喩坦之は李頻が同鄕、卽ち睦州の人、其の落第して歸るを送るなり、歸心常共知我が歸心の有るは君知る、君が歸心の有るは我知る、而かも我は在官の身、歸路不相隨喩は身心共に歸る、李は心歸るも、身歸る能はず、彼此無依倚彼は喩の歸る睦州、此は李の留まる長安、依は李、倚は喩、東西又別離睦州は東、長安は西、山雲含雨潤喩が睦州へ歸る途中の景、睦州は今の浙江省嚴州府建德縣に當る、雲も晴天の雲と雨を含む雲とは異なる、江樹逆潮欹樹も潮に順なるものは欹たず、逆なるが故に欹つ、樹の奇形此に在り、順なる凡樹何ぞ見るに耐へん、

是も途中の景、莫戀漁樵興折角歸國し玉ふも、漁父や樵夫の興を戀ふこと莫かれ、人生各有爲生計の異なる各の人生の分なり、君は道を修め經を治して生計と爲し玉へ、是れ天分の道なり、已前四首、前半と後半略作法同じきなり、

送李給事歸徐州覲省　遜逖

列位登青瑣　還鄕服綵衣　共言晨省日　便是晝游歸
春水經梁宋　晴山入海沂　莫愁東路遠　四牡正騑騑

位を列して青瑣に登る、鄕に還つて綵衣を服す、共に言ふ晨省の日、便ち是れ晝游して歸る、春水梁宋を經、晴山海沂に入る、東路の遠きを愁ふる莫れ、四牡正に騑騑、

【句釋】李は姓、給事は官名、徐州は今日の江蘇省、覲省は二親の安否を問うて還る、列位登青瑣位に列すは給事の位に在る、朝廷に在りては宮禁の青瑣門に登る、還鄕脫綵衣周の老萊子は父母を喜ばさん爲めに五色斑闌の衣を著け、小兒の風を爲して父母に事ふ、其の事を借り以て李に譬ふ、共言晨省日、便是晝游歸李と孫とは共に常に言ふ、本是れ同鄕なれば親を省する

日には晝游の錦衣を着けて游ばんと約したるに、孫は歸る能はず、李は此の歸るを得、春水經梁宋唐の宋州は、本の梁郡なり、晴山入海沂海州の東海郡と沂州の琅邪郡なり、今日の湖北安徽の二省を經る途中の景、莫愁東路遠徐州は長安より東南に當る、然れども東が主なれば東路と用ひたるなり、四牡正騑騑四馬にて走れば亦何ぞ路の遠きを愁へん、騑騑は行不正也と注して其の疾を形容するなり、

送溧水唐明府　韋應物

三爲百里宰　已過十餘年　祇嘆宦如舊　旋聞邑屢遷
魚鹽濱海利　桑柘傍湖田　到此安民俗　琴堂又晏然

【句釋】溧水、漂水に作る本あり、漂水も栗水も共に地名、溧水は丹陽の溧陽縣に出で、漂水は『山海經』に隗山の南に漂水出づとあり、或說に漂水は建康に屬すと、未詳、今は丹陽を取る、

唐は姓、明府は一縣の令を云ふ、二千石なり、三爲百里宰宰の義たる主なり、一縣の主と爲る三度、已過十餘年大數を言ふ、一官十餘年移らざるは暗に其の不遇に同情す、祇歎宦如舊宦等の進級せざるを嘆ず、旋聞邑屢遷今年は溧水、去年は漂水と云ふ風に任地が遷るのみ、宦等は移らざるなり、魚鹽濱海利楊子江に沿ふ故に、縣民多くは魚鹽を賣買して以て生活する土地、桑柘傍湖田水には魚鹽の利あり、陸には桑柘の茂んなるあり、土地の富有なるを示す、到此安民俗此の土地に到りて良政良治を敷き、以て民俗を安んずるなり、琴堂又晏然『呂氏春秋』に宓子賤、單父を治む、琴を彈じ、身堂を下らずして治む、唐明府も亦此の如くならんのみ、晏は安と同じ、民治まれば、宰官は晏然たり、

送王錄事赴虢州　岑參

早歲卽相知　嗟君最後時　青雲仍未達　黑髮欲成絲
小店關門樹　長河華嶽祠　弘農民吏待　莫遣馬行遲

早歲より卽ち相知る、嗟す君が最も時に後るることを、青雲仍未だ達せず、黑髮絲を成さんと欲す、小店關門の樹、長河華嶽の祠、弘農民吏待たん、

馬行をして遲からしむる莫れ、

【句釋】王は姓、錄事は官名、虢州は唐の河南道、今日の河南省陝州靈寶縣の南四十里、錄事の官は日本今日の奏任七等に當る、早歲卽相知李も岑も共に南陽の人、同鄕なるを以て少時より知友なり、嗟君最後時立身出世が他人に比較すれば、其の後れたるを云ふ、智識が時代に後れたりと云ふにあらず、青雲仍未達立身せんと欲する志、何ぞ奏任七等の小吏に留まらん、蓋し大志未だ達せざるなり、黑髮欲成絲青雲達せざる中に已に白髮ならんとす、小店關門樹函谷關門外の樹には小店あり以て憩ふ可し、長河華嶽祠長河は黃河なり、華嶽祠は華山の嶽帝を祀る祠なり、以て前途を祈る可し、弘農民吏待弘農縣は虢州に在り、人民と官吏と皆君が到るを待つ、莫遣馬行遲待つ者あり、君も早速進み玉へと云ふ、其の行を祝するなり、

別鄭蟻

暮蟬不可聽　落葉豈堪聞　共是悲秋客　那知此路分
荒城背流水　遠雁入寒雲　陶令門前菊　餘華可贈君

暮蟬聽くべからず、落葉豈聞くに堪へんや、共に是れ悲秋の客、那ぞ知らん此の路より分れんとは、荒城流水に背き、遠雁寒雲に入る、陶令門前の菊、餘華君に贈るべし、

【略傳】郎士元字は君胄、中山の人、天寶十五年の進士、寶應の初、京畿の縣官に選ばれて、詔して政事中書に試し、渭南の尉と爲る、左拾遺を歷、出て鄧州の刺史と爲る、員外郎錢起と名を齊うす、時に朝廷、丞相より以下、出て牧し使を奉ずるとき、兩君の詩文、祖餞する無ければ、人以て愧と爲す、其の珍重せらるること此の如し、

【句釋】別は共に別る、鄭蟻郎士元と同時に移されて、長安より相伴うて九江郡に至る、鄭蟻は此れより蜀國に赴く、士元は此れより鄧州に赴く、暮蟬不可聽、落葉豈堪聞有情の蟬も非情の落葉も其の音の凄切は同樣なり、何ぞ聽聞を喜まんや、共是悲秋客、那知此路分字を知り、情を解する人は共に悲秋の客なり、今鄭と郎と二人を共と云ふ、此の九江郡の路に於て一は蜀、一は鄧州と分るることとなる、荒城背流水江水を背にして九江郡城あり、而かも亂後、荒涼たる狀を爲す、遠雁入寒雲雁は遠く朔北より飛來するが、而かも此に留まらず遙かに寒色を爲す雲中に入る、陶令門前菊晉の陶淵明の故里は栗里と云ふ、此の九江郡中に在り、彭澤の令と爲

りしより、世之を陶令と云ふ、其の陶令門前の菊を採つて、餘花可贈君餘花は殘花と同じ、柳を贈らずして花を贈る、味此に存す、

送韓司直　皇甫冉

遊吳還適越　來往任風波　復送王孫去　其如芳草何

山明殘雪在　潮滿夕陽多　季子留遺廟　停舟試一過

吳に游んで還越に適かん、來往風波に任す、復王孫を送り去る、其れ芳草を如何、山明かにして殘雪在り、潮滿ちて夕陽多し、季子遺廟を留む、舟を停めて試に一たび過ぎれ、

【句釋】　韓は姓、司直は官名、裁判官なり、大理寺卿從三の下に屬し、從六品上とす、素隱の注に、「韓氏は舊は大理司直の官たりしが、官を嫌ひて朝には仕へずして、乙地甲地へ旅游して名山秀水を見物して、一生涯の樂とするぞ」と、何等の依據も無き妄說なり、詩に依て此の案を下すものならんが、此の如き臆斷は信ずべからず、游吳還適越吳越の山水は論なし、其の懷古の遺物も亦多きなり、來往任風波吳越は今日の浙江江蘇の間ゆゑ、旅行は舟を用ふるもの

多し、風波に任す所以、復送王孫去王孫は草の名、一名不歸草、其如芳草何不歸と云ふ名がある位であるから之を奈何とする、此の事は前にも辨じて置きたり、王孫は韓を云ふ、山明殘雪在山の上に吳字を加へて見よ、吳山は明かに殘雪猶ほ在り、潮滿夕陽多杭州錢唐江の海潮は余も曾て見たり、實に天下に甲たり、潮の上に越字を加へて見よ、越の江潮は正に夕陽多きなり、季子留遺廟季子は吳の季札なり、天下の賢人なり、古の吳王餘昧の子、兄弟四人中第一の賢人なり、吳の人民季札を立てんとす、季札逃れ去つて、國を以て王僚に讓る、其の廟は江蘇の蘇州に在り、今に至り吏民祀事怠らず、停舟試一過廟の在る所、楊子江口に臨む、此の如き賢人豈弔せざるを得んや、

途中送權曙　皇甫曾

淮海風濤起　江關幽思長　同悲鵲遶樹　獨作雁隨陽

山晚雲和雪　天寒月照霜　由來濯纓處　漁父愛滄浪

淮海風濤起る、江關幽思長し、同じく悲しむ鵲の樹を遶るを、獨作す雁の陽に隨ふを、山晚れて雲雪に和し、天寒くして月霜を照らす、由來纓を濯

ふ處、漁父滄浪を愛す、

【句釋】途中送權曙皇甫曾、安祿山の亂を避けて揚州に客居したれば、揚州までに亂入したるほどに、揚州を去つて、權曙と同道して、淮南道を行き盡くし、江陵に至り、其の地より、權曙は漢陽へ行く、之を送るなり、一本に權曙二兄とあり、權と曙と二姓なるか、姓は權、名は曙なるや共に未詳、淮海風濤起單に淮州は今日の河南汝寧府正陽縣東南、西淮は河南南陽府唐縣東南、今謂ふ淮海は江蘇と安徽の間なり、風濤は海の風濤と、祿山の兵亂との兩意を含む、江關幽思長江淮の關門を通過する時は幽思頗る長からん、同悲鵲遶樹權と皇と二人同じく悲しむなり、魏の曹操の詩に月明星稀、烏鵲南飛、遶樹三匝、無枝可依、とあるに依つて其の依るべき人なきを悲しむ、獨作雁隨陽一人は鴻雁の陽に隨ふが如く、漢陽の方へ知る者ありて往かるるを羨むなり、『尚書』に云ふ鴻雁の屬は陽に隨ふと、山晚雲和雪漢陽道中の景色、山正に暮色ならんとして雲色も雪色も見分け難し、天寒月照霜夜に入りて天は寒し、月は皓皓として霜を照らす、由來濯纓處『楚詞』漁父の歌に滄浪の水清ば、我が纓を濯ふ可し、漢陽郡の沔口は古以て滄浪水と爲す、屈原が漁父に遇うて歌を作る處と是れなり、漁父愛滄浪愛する所以は濯纓清ければなり、

酬普選二上人

嚴維

本意宿東林　因聽子賤琴　遙知大小朗　已斷去來心
夜靜溪聲近　庭寒月色深　寧知塵外意　定後更成吟

本意ふ東林に宿せんことを、因つて子賤が琴を聽く、遙に知る大小の朗、已に斷つ去來の心、夜靜にして溪聲近く、庭寒うして月色深し、寧んぞ知らんや塵外の意、定後更に吟を成さんとは、

【句釋】酬普選二上人酬は詩に對する酬なり、普と選との二上人は廬山東林寺の上首ならんか、本意宿東林本は「モトカラ」意は「オモフ」なり、東林寺に宿泊を平生の志願とせり、晉の惠遠法師の開基にして、廬山三百六十寺の中の第一の勝境なり、因聽子賤琴『呂氏春秋』に宓子賤、鳴琴を彈じて、單父治まる、巫馬期、星を戴て出入して單父亦治まる、巫馬期、其の故を問ふ、宓が曰く、我の謂は人に任す、子の謂は力に任す、子賤は宰たりし時、人に一任して、自らは只琴を彈じてのみ居る、然して單父は自然に治る、嚴維は九江郡の太守崔渙が部下に屬し、常に崔渙は琴を彈じて悠悠たるも、下民能く治る、自身は東林に宿泊して上人の玄話を聞かんと

欲するが故に、此の子賤の琴を聽くなり、遙知大小朗晉の惠朗禪師を大朗と稱し、振朗禪師を小朗と稱す、普選二上人を此の二師に比するなり、遙知とは未だ身は東林に到らざるなり、已斷去來心過去の心も斷絶し、未來の心も斷絶し、始めて大悟の境界に達す、地水火風の四大合して緣相あるに似たるを假に名けて心と爲す、假りに名けたるものなれば、實體は本より無し、實體の無きものに執著するが凡夫の常とす、聖者は此の執著を離る、其の執著を離るる所を今の句は云ふなり、現在心は此の中に入れざるなり、若し現在心を入るれば、上の大小と對せず「大小ノ朗」二物「去來ノ心」二物の對なり、現在を入るれば三物となる、古人豈此の作法あらんや、斷ずる者は二上人なれば益す以て知り易し、夜靜溪聲近、庭寒月色深二上人の東林に在して耳に聞き、目に見るもの淸淨ならざるはなし、幽趣ならざるはなし、寧知塵外意寧は「願ふ辭」なり、肯定と否定とを並べて一方へ歸する辭なり、上人は佛理を研磨するのみの人と思ひしに那ぞ知らんや、コレコレの事を爲すとの意なり、人間日常の活計に關せざるものを塵外の念と云ふ、定後更成吟禪定三昧にして詩賦の如きは頓著せざる人と思ひしは寧ろ誤謬にして、所謂課餘の業亦見るべしとなり、

送鄭宥入蜀

寧親西陟險　君去異王陽　在世誰非客　還家卽是鄉
劍門千轉盡　巴水一支長　請語愁猿道　無煩促淚行

親を寧んじて西險を陟る、君去つて王陽に異なり、世に在つて誰か客にあらざる、家に還れば卽ち是れ鄉、劍門千轉盡き、巴水一支長し、請ふ愁猿に語りて道へ、煩しく淚行を促さしむるなかれ、

【句釋】鄭宥は未詳、入蜀鄭は蜀人にて今其の歸省を送る、寧親西陟險「詩經」に歸ニ寧父母一の語あり、親を安心させることを寧と云ふ、長安より地理上蜀は西方に當る、山又山、險路ならざるは無し、君去異王陽前漢の王陽は益州蜀の刺史と爲り、車を驅つて九折阪に至り、阪の險阻なるを見て車を返し、益州へは行かず、父母猶ほ在せり、我が身體に誤のあるときは父母を養ふに人なし、返りて以て身の無事を圖る、君は是れと反對なり、在世誰非客人生は誰か客ならざらん、乍ち生れ、乍ち死し、光陰は百代の過客、天地は萬物の逆旅、去も住も、本來は客にあらざるはなし、還家卽是鄉險を陟りて返るも畢竟は故鄉なればなり、客と爲つて行く王陽とは異なるなり、生きて鄉あり、死して鄉あり、永久に落著する所を鄉と云ふ、劍門千轉盡劍

門山の下に劍門關あり、千轉とは山路を遶り曲りて、其の極處まで行く、巴水一支長巴江の水、一支卽ち一「スヂ」流る、山の高と、水の卑と對すること常法例の如し、請語愁猿道、無煩促淚行此の二句古來の注に曰く、國に歸り著き、父母の前にて、巴蜀の道の險難なるを語つて、いたいたしく父母を泣かしむることなかれと、余が意は然らず、父母に語るにあらず、愁猿に語るなり、請は嚴維が鄭宥に請ふなり、劍門山中には愁猿殊に多し、蓋し君は其の愁猿に語つて道へ、尋常に猿の聲を聞く者は、大抵此の地にて斷腸に勝へざるなり、然るに我は父母を歸寧するにあれば、君猿も愁聲を出して我に淚を流さしむる無かれとなり、余が歸寧して此を通過する情を知つて、決して叫び玉ふなとなり、

杭州郡齋南亭　姚合

符印懸腰下　東山不得歸　獨行南北近　漸老往還稀
迸笋侵窗長　驚蟬出樹飛　田田池上葉　長是使君衣

符印腰下に懸く、東山歸るを得ず、獨行けば南北近し、漸く老いて往還稀なり、迸笋窗を侵して長じ、驚蟬樹を出でて飛ぶ、田田池上の葉、長く是

れ使君の衣、

【句釋】杭州は浙江省第一の都會、郡齋南亭寶應中姚合此の杭州の刺史たり、郡中に小齋を構へて、以て燕息所と爲したるなり、符印懸腰下符は俗に「ワリフ」と云ふ、一箇の物を二箇に割れば、二箇は卽ち一箇、一箇は卽ち二箇、漢の文帝、初めて郡守に與ふるに銅虎符、竹使符を爲り、符を同じうして以て兵を發す、竹符は竹箭五枚を以て鐫刻して篆書す、今の句、唯在官の身なりと云ふ、東山不得歸昔し謝安石、妓を攜へて東山に游ぶ、其の悠悠たる狀態は我は在官の身なれば學ぶ能はずと云ふ、獨行南北近郡齋と南亭と南北と方角は異なるも甚だ近接する、漸老往還稀南北を往還頻りなりしが、今や老て疎慵となり、南北往還稀なり、迸笋侵窗長迸は「ホトバシル」勢氣强く出るを云ふ、笋は竹の子、侵は侵略、他の許さざるに來るを侵と云ふ、長は生長なり、短に對する長にあらず、生長の長は仄聲にて、短長の長は平聲なり、驚蟬出樹飛何の爲めに驚きしや蟬は突然樹を出で飛びたるなり、共に是れ南亭の實景、田田池上葉古訓に「田田タル池上ノ葉」とあり、「タル」は無用なり、俗語の「田ノ池」と見れば可なり、古注に「田田ハ葉ノ圓カナル貌」と、圓なる葉が衣と爲るは理に於て解すべからず、南亭より見る所、田田は蓮を作るなり、長是使君衣『楚詞』に芰荷を製して以て衣と爲すとあり、隱者の服裝にて、

官吏の服裝にはあらず、官を辭したる後、長く此の地に留まらんとの意、使君は知事のことなり、

日東病僧　　項斯

雲水絶歸路　來時風送船　不言身後事　猶坐病中禪
深壁藏燈影　空窗出艾煙　已無鄕土夢　起塔寺門前

雲水歸路を絶つ、來時風船を送る、身後の事を言はず、猶ほ病中の禪に坐す、深壁燈影を藏し、空窗艾煙を出す、已に鄕土の夢なく、塔を起つ寺門の前、

【句釋】●日東は日本なり、●病僧日本の留學僧が唐に在つて臥病せる者を見て作る、名も無き羊僧にはあらざるべきも、今は名を知る由なし、●雲水絶歸路禪宗にて行脚僧を雲水と稱す、今の雲水は千雲萬水、路の遠きを意味す、此の時代の入唐は今日の洋行の如し、船を以て論ずれば洋行以上の辛苦とす、●絶歸路日本と支那との海路を雲水が斷絶する、●來時風送船順風の時を待つて發船する、逆風は航海者の尤も忌む所なり、風の船を送る、其の留學せんとする時を云ふ、

●不言身後事、●猶坐病中禪若し此の漢土で死んだら、ドウシロ、カウシロなどの事は言はず、猶ほ平生修する所の坐禪する、蓋し肉身なり、病は苦ならずと觀ずるにはあらず、病は苦なるも本幻より生ず、幻より生ずる所のもの、本來は空なりと觀じて病苦の爲め心を動せざるなり、●深壁藏燈影、●空窗出艾煙夜間病床の景色なり、燈影は深壁の外に露はれず、●艾煙卽ち灸を種うる煙のみ空窗を出づ、治療する狀、●已無鄕土夢鄕土卽ち日本へ還らんと欲する念は起さざる也、夢字念の意味で見よ、平等を說く者、何ぞ內外の國を區別せん、●起塔寺門前入寂の地は此の處であるに依て、我が墓を寺門卽ち病を養うて居る寺の門前に起てしなり、古注に阿育王の事を引く、此の詩意にはあらず、法師は墓と稱せず、皆塔と稱するなり、或人云ふ、「自ら發起して塔を建てられたり」是れも誤謬なり、

送友人下第歸覲　　劉得仁

君此ト行日　高堂應夢歸　莫將和氏淚　滴著老萊衣
嶽雨連河細　田禽出麥飛　到家調膳後　吟好送斜暉

君は此に行日を卜す、高堂應に歸るを夢むべし、和氏が淚を將て、老萊が

衣に滴著すること莫れ、嶽雨河に連つて細く、田禽麥を出でて飛ぶ、家に到つて調膳の後、吟じて好し斜暉を送るに、

【句釋】友人下第歸覲進士試驗に落第したる友人が故郷に還り、父母を省するを送る、覲音は「キン」訓は「ミル」省と同じ、君此ト行日歸省出發の日を此卽ち長安に在つて定む、高堂は北堂、母を云ふ、應夢歸慈母豈兒を忘れんや、兒や歸り來ると夢みるならん、莫將和氏淚、滴著老萊衣此の十字は一讀法なり、卞和は昔し玉を獻じて厲王と武王は石なり玉にあらずとし左右の兩足を刖る、王を欺くと爲してなり、和氏尙死せず璞を抱きて荆山の下に泣く、共王人をして之を磨せしむるに果して玉なり、依て和氏玉と名く、『烈女傳』に老萊子親に奉じて身に五色斑闌の衣を著す、要するに此の詩意は才を抱くも不幸にして落第したるなり、其の落第したるを悲しんで、父母の前で泣くこと莫れと忠言するなり、落第者が己れは和氏の玉の如きものなれど試驗官の奴等が己れを見る眼が無きに依て落第したるなりと云ふにはあらず、嶽雨連河細嶽は五嶽以外多く用ひざる字ゆゑ、泰山か或は華山の下を過ぎて歸るならん、嶽より落つる雨は細流と爲つて江河に連なる、田禽出麥飛田中に居りし鳥が人の足音に驚き麥隴を出でて飛ぶなり、

到家調膳後、家に歸りて後は母氏の爲め奉養する、吟好送斜暉奉養の餘課我が好める吟詠を爲し、以て日月を消せば可なりと云ふ、

南游有感　于武陵

杜陵無厚業　不得駐車輪　重到曾游處　多非舊主人
東風千里樹　西日一洲蘋　又渡湘江去　湘江水復春

杜陵厚業無し、車輪を駐むることを得ず、重ねて曾游の處に到れば、多くは舊主人にあらず、東風千里の樹、西日一洲の蘋、又湘江を渡つて去れば、湘江水復春なり、

【略傳】于武陵、名は鄴、字を以て行はる、杜曲の人、太中の進士、意に稱はざるあり、琴書を攜へて商洛巴蜀の間に往來せり、湘が古の騷人の舊國なるを以て卜居せんとして果さず、嵩陽の別墅に歸老す、

【句釋】南游有感南地の風光を愛して屢ば游ぶ、此の瀟湘に於て賦す、杜陵無厚業杜陵は自身の鄕里卽ち長安なり、其の鄕里に居らずんば能はざる底の大事業は無し、不得駐車輪鄕里の乙地

甲地へ往て事業を爲さんと欲するも、此の處永住すべきと云ふ程のもの無し、重到曾游處再游重游字義同じ、南に去つて曾游の地、即ち此の瀟湘の地に到れば、多非舊主人倏忽に古今と爲る、新人故人に代る、東風千里樹瀟湘に於て見し即景、其の時節を云ふ、西日一洲蘋同じく所見、其の日を云ふ、西日は落日が一洲の蘋末を照すなり、又渡湘江去暫時湘江に卜居して、又湘江を去つて、他土へ往かんとす、湘江水復春別れんと欲して躊躇の色あり、別るるに忍びざるなり、而かも去つて、遂に嵩陽の別墅へ歸隱する、

早春寄華下同志

正是花時節　思君寢復興
嶽面懸晴雨　河心走濁氷
東門一條路　離恨正相仍

裴說

市沽終不醉　春夢亦無憑

正に是れ花の時節、君を思うて寢ねて復興く、市沽終に醉はず、春夢も亦憑るなし、嶽面晴雨を懸け、河心濁氷を走らす、東門一條の路、離恨正に相仍る、

【略傳】裴說は天祐三年の進士、仕て桂嶺の假官宰に終ふ、詳傳は知るに由しなし、

【句釋】早春は正月、華下は洛下、都下と同じ、京師の同志を云ふ、正是花時節詩中時節を言ふもの、悉く古曆即ち陰曆と知るべし、思君寢復興身は他鄉に在つて、京師の春は定んで好からんと思ふ、花を思へば必ず同志を思ふ、思うて息まざること夜も晝も無しとの意、市沽終不醉沽は買「カフ」と賣「ウル」と反對の義を帶ぶる字なり、反對の義を帶ぶる字は他にもあるが、『論語』に沽酒市脯とあり、市店に於て酒を沽ひ來りて飲むも、心に思ふ所あると、酒の味も薄きと二の原因ありて終に醉はざるなり、春夢亦無憑眞とも幻とも付かず同志の事を夢みたが是れも憑るべき力のものは無し、嶽面懸淸雨高處即ち仰いで華嶽を見れば、淸雨を懸けて其の秀色佳なり、河心走濁氷低處即ち黃河を見れば、濁氷を走らして其の奔流急なり、東門一條路京師の東門、即ち長安より去つて他鄉へ往く人を送り出る門なり、其の門前一條の路は良とに憶ひ出で多き路なり、何故なれば、離恨正相仍曾て離別せし恨は、此の東門の路に思ひ仍る、

途中別孫璐　方干

道路本無限　又應何處逢　流年莫虛擲　華髮不相容
野渡波搖月　寒城雨翳鐘　此心隨去馬　迢遞過重峯

道路本限りなし、又何れの處にか逢ふべき、流年虛しく擲つ莫れ、華髮相容さず、野渡波月を搖かし、寒城雨鐘を翳す、此の心去馬に隨つて、迢遞重峯を過ぎん、

【句釋】 途中江蘇浙江の間を往來の途中相遇うたるもの、孫璐は剡溪の人方干の門人なるも、家を成すに及ばずして去る、道路本無限、又應何處逢今日相遇ふも偶然なり、後日相遇ふも亦偶然なり、何れの路、何れの處と定めざるが人生の常なり、流年莫虛擲訓示の言なり、庸人は流年の惜しむべきを知らず、寸心千古を知らず、虛しく年光を擲ち去つて、顧みず、之を爲す莫かれと云ふ、華髮不相容容は容認にて「ユルサズ」と訓す、白髮は用捨なく、日に月に頭上に來る、野渡波搖月、寒城雨翳鐘途中の景色、水邊の方は波が金の如く月影を搖かす、山邊の方は雨が翳くして鐘聲を響かさず、月があるのに雨が翳しとは理に於て信じ難きも南方支那を旅行する者は此の實況を知らん、此心隨去馬我が心は子が馬に隨がつて往かんと思慕の情を叙す、迢遞は遙遠「ハルカ」なり、過重峯千萬里の峯を過ぎんとまで慕ふなり、

送友及第歸淛東

南行無俗侶　秋雁與寒雲　野趣自多愜　名香人共聞
吳山中路斷　淛水半江分　此地登臨慣　攄情一送君

南行俗侶無し、秋雁と寒雲とのみあり、野趣自ら多くは愜ふ、名香人共に聞く、吳山中路より斷え、淛水半江より分る、此の地登臨して慣る、情を攄べて一に君を送る、

【句釋】 友人が進士及第して歸るを送るなり、淛東は浙東なり、淛と浙とは同じ、浙江省の杭州に歸る、南行無俗侶浙江から言へば杭州は東なり、長安より言へば南方なり、此の南行するに當つて旅の友は俗物ならず、甚だ雅友あり、其れは秋雁與寒雲寒雲も南行し、秋雁も南行し、君に伴なふ者は此の二雅友なり、野趣自多愜野趣は官趣の反對を云ふ形容なり、田臭味と心得る者は誤る、人生の俗事以外の物を皆野趣と云ふ、愜は愜適なり、名香人共聞名香は『本集』に鄉名に作る、鄉名が可なり、一鄉に其の人格の高きを稱揚せらるるなり、吳山中路斷、淛水半江分江に到りて吳地盡き、岸を隔てて越山多しと殆んど同意味の句なり、杭州は實に吳越の境とす、此地登臨慣方干が曾て屢しば此の杭州に游び、其の山水に慣れる、攄情一送君我が眞情

を據べて他意なく一に君を送らんとなり、

春宮　杜荀鶴

早被ニ嬋娟誤一　欲レ粧臨レ鏡慵　承レ恩不レ在レ貌　教妾若爲容
風暖鳥聲碎　日高花影重　年年越溪女　相憶採ニ芙蓉一

早く嬋娟に誤まられて、粧はんと欲して鏡に臨めば慵し、恩を承くるは貌にあらず、妾をして若爲か容つくらしむる、風暖にして鳥聲碎け、日高くして花影重る、年年越溪の女、相憶ふ芙蓉を採りしことを、

【句釋】春宮は宮中の事を詠ず、古注に曰く、周禮の注に皇后正寢一、燕寢五、是れを六宮と爲す、夫人已下を分けて居く、帝王は適后、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御を立つ、職林に載す漢の武元二帝の後より、世淫費を增し、乃ち掖庭三千に至る、級十四を增す、昭儀、婕妤、嬈娥、容華、美人、八子、充依、七子、良人、長使、少使、玉宮、順常、無娟、共和、娛靈、保林、良使、夜者是れなり、魏に貴嬪、淑華、修媛、修儀を置く、宋に貴妃、貴嬪、貴人、昭儀、昭容、昭華、中才、齊貴、淑妃を置く、唐に惠妃、麗妃、華妃、淑儀、德儀、順儀、

賢儀、婉儀、美人、才人を置く、之を要するに此の如き名目を設けて、以て宮庭の懽樂を恣ままにせしものなり、早被嬋娟誤宮女が自ら嗟する語なり、妾は普通に勝れて容顏の好き處より此の宮庭に入りしも、是れ却つて身を誤まりしなり、嬋娟なりしを以て宮に入りしも、宮に入るに過ぎずして君王の愛は決して蒙むらず、嬋娟を徒らに自護するのみ、欲粧臨鏡慵粧を凝らすは己を愛する者の爲めなり、別に愛する者なし、鏡に臨んで粉黛を凝らす意遂に慵きなり、承恩不在貌君王の恩寵を承くるは畢竟貌に在らず、其の人の運命なるべし、强て自ら遣るの語なり、教妾若爲容承恩は貌に因るに在らざることを悟つて見れば、徒らに粧を凝らすの要なし、妾をして鏡に臨ましめたるは何と爲たることぞ、風暖鳥聲碎宮庭春日の景、鳥聲が宮樹に響き、多くに聞ゆるを云ふと、素隱は解したるが、響くにはあらず、細なるを云ふなり、日高花影重日の高きに隨がつて漸漸と花影が重なる、年年越溪女越溪は昔し西施が吳王に寵せられし前に居りし處、今以て裏面に西施を叙し、表面に越溪の居女を叙す、相憶採芙蓉越溪に在つて、芙蓉を採り、我が意の儘に游ばば却て此の宮中に居て、恩寵を得ざるに勝ると、其の怨を云ふ、昔し越溪に此の芙蓉を採つて游びし事を憶ひ出すと見ても可なり、

辭崔尚書

李　頻

一飯仍難受　淹留已半年　終期身可報　不擬骨空鐫
城晚風高角　江春浪起船　曾同棲止地　獨去塞鴻前

一飯仍受け難し、淹留已に半年、終に身の報ずべきを期す、骨空しく鐫るを擬せず、城晚れて風角を高うし、江春にして浪船を起す、曾て同じく棲止せし地、獨去る塞鴻の前、

【句釋】辭は辭去、崔尚書の家を去る、一飯仍難受、淹留已半年自身は一國を受るも辭せず、他には一飯をも惜むが常人の情なり、崔は然らず、李をして半年も食客たらしめしなり、終期身可報一飯の恩必ず報ずとは韓信が漂母に叙せし語なり、不擬骨空鐫恩を記すを鐫ると云ふ、骨に記したりとて、眞に報ぜずんば、記すも詮なし、我は必ず報ずべしとなり、城晚風高角正しく崔が家を出でんとして城中は日も漸く晚れ、角聲は風に依て其の音高く聞える、江春浪起船已に城中に風起る、江中も浪の船を揚げる固より其の所なり、辭して向はんと欲する方面を云ふ、曾同棲止地、獨去塞鴻前今日まで崔が家に寄食するものと別れて獨北方に向つて去る、

塞は北邊を戍る塞、其の塞上を過ぎる雁と自身と殆んど境遇を同じうすとなり、

下方

司空圖

三十年來往　中間京洛塵　倦行今白首　歸臥已清神
坡暖冬生笋　松涼夏健人　更慚徵詔起　避世迹非眞

三十年來往す、中間京洛の塵、倦行今白首、歸臥已に清神、坡暖にして冬笋を生じ、松涼しうして夏人を健にす、更に慚づ徵詔せられて起つて、世を避くれども迹眞にあらず、

【句釋】下方は題として類の尤も少なきもの、本來佛語にて詩語にあらず、上方世界、下方世界の語諸大乘經に散在してあり、上方は淨土、下方は穢土、今借りて以て中條山の麓を云ふ、中條山の王官谷は司空圖の住居、三十年來往世と競うて奔走せし間を云ふ、素隱の曰く懿宗の咸通十年に及第してより、昭宗の景福年中に至る凡そ二十四五年、及第せざる以前も鄉貢として京に在り、中間京洛塵京洛の風塵中に奔走せしなり、倦行今白髮倦は「イヤ」になること、營營たる人事に倦むころは已に白髮と成る、歸臥已清神人事を罷めて此の中條山下に歸臥す、精神

の清淨たるを覺ゆるなり、坡暖冬生笋坡は「ツツミ」なり、笋は夏日にあらざれば生せず、此の處暖なれば冬も笋を生ず、松涼夏健人夏日は人の身體を倦み易からしむるもの熱氣然らしむるなり、幸に此の處松樹あり、常に風濤を起し、人をして健ならしむ、更慚徵詔起、避世迹非眞此の句に就て二說あり、一は曰く、黃巢の亂に司空圖は河中に還る、王徽表して副使と爲す起たず、召して知制誥と爲す乃ち起つ、此の詩起つて召に赴く時の作か、一は曰く、此の說否なり、僖宗の時召されて、知制誥中書舍人と爲りたる事あり、今世を避けて、中條山の三休亭に引き籠り居れども自ら省るに吾が行迹は、眞實の隱者にはなきぞ、自ら我が身を戒しめたるなり、自ら耐辱居士と號したるは、更慚の字に相對すと、眞の隱者にあらずとすることは二說一致するも、役に付きし年代を異にす、余は前說を以て正と爲す、何ぞ頻はしく昔日の事を言はんや、廬を出でんとして作りたるものなり、

華下送文涓

郊居謝名利　何事最相親　漸與論詩久　皆知得句新
川明虹照雨　樹密鳥衝人　應念從今去　還來嶽下頻

郊居名利を謝す、何事ぞ最も相親しむ、漸く與に詩を論ずること久し、皆知る句を得ること新なるを、川明らかにして虹雨を照らし、樹密にして鳥人を衝く、念ふべし今より去つて、還嶽下に來ること頻ならん、

【句釋】華下は華陰縣を云ふ、今日の陝西省同州府なり、司空圖、河北の亂を避て此に來り寓す、文涓は未詳、涓を浦に作る本あり、郊居謝名利、何事最相親我は人間の名利共に謝絕して居る中に、君と特別に親しきは何等の因緣ぞや、漸與論詩久漸は親しくなるに隨つて、與は共なり、古人の詩に就て二人にて其の佳惡を論ず、皆知得句新古人の詩は皆淸新なるを知ると解しても、又文涓の詩は陳腐ならずして、淸新所謂古人の糟粕を嘗めざる佳詩なりと爲すも、二意共に通ず、川明虹照雨郊外の景色、虹の雨を照らすとは、虹の影が水に移るのみならず、一方雨なるに一方は晴れて居るなり、樹密鳥衝人人が樹の密なる林へ入れば、鳥は逃げ出んと欲して、路に迷ひ、却て人の居る方へ向つて飛來るを衝と云ふ、應念從今去、還來嶽下頻念ふ者は文涓なり、今日此の嶽下を去ると雖も、後還此に來る屢しばせんとなり、

游東林寺

黄滔

平生愛山水　下馬虎溪時　已到終嫌晩　重游預作期
寺寒三伏雨　松偃數朝枝　翻譯如曾見　白蓮開滿池

平生山水を愛す、馬を虎溪に下る時、已に到つて終に晩きことを嫌ひ、重游預め期を作す、寺は寒し三伏の雨、松は偃す數朝の枝、翻譯曾て見るが如し、白蓮開いて池に滿つ、

【句釋】東林寺は前に辨せり、平生愛山水東林の山水を愛するが當面の意にて、側面の意は何處の山水も愛する性質を持つとなり、下馬虎溪時東林寺を訪ふ者は虎溪にて馬を下る、先づ是に於て其の風景を愛賞す、已到終嫌晩今日到りて其の風景は聞きしに勝つて甚だ善なり、終に其の見るの晩きを嫌ふなり、嫌ふは悔ゆる意にて見よ、重游預作期今日去るも再游の期は約せざるべからず、一度にて足れるものならず、寺寒三伏雨夏至より秋初に至る間、初伏、中伏、末伏の三時あり、之を三伏と云ふ、極めて炎暑の酷だしき日なり、其の土用中にも、少し雨が下れば寒を覺ゆ、松偃數朝枝數朝とは晉齊梁陳隋唐の歷朝を云ふ、要するに老松卽ち年を經

し松なりと云ふにあり、偃は偃臥なり、地に横たふなり、翻譯如曾見南宋の慧嚴、慧觀の二高僧が謝靈運と共に『大般涅槃經』三十六卷二十五品を譯す、卽ち此の東林中の翻經臺とす、今日も尙其の狀を見るが如きを云ふ、ナゼ見るが如しと云ふに、白蓮開滿池其の翻經當時の狀を見るは卽ち白蓮が其の當時植ゑしものなればなり、滿池に開く、今昔不變の淸淨世界なりと爲す、以前二十首、

送僧還南嶽

周賀

辭僧下水棚　因聽嶽鐘聲　遠路獨歸寺　幾時重到城
風高寒木落　雨絶夜堂淸　自說深居後　鄰州亦不行

僧に辭して水棚を下る、因つて嶽鐘の聲を聽く、遠路獨寺に歸る、幾時か重ねて城に到らん、風高うして寒木落ち、雨絶えて夜堂淸し、自ら說く深居の後、鄰州にも亦行かじと、

【略傳】周賀初め僧たり、淸塞と曰ふ、周賀曾て二僧を悼む、詩に曰く凍鬚亡夜に剃る、遺偈病中に書す、姚合此の詩を聞て曰く、惜い哉僧中に此の人あらんとは、竟に歸俗せしむ、

【句釋】南嶽卽ち衡山へ還る僧を送るなり、辭僧下水棚、因聽嶽鐘聲周賀が昔し南嶽に在つて佛道修習せしが一旦姚合に勸められ歸俗せんとて、山僧に辭して水棚卽ち橋を下る、其の時嶽鐘も我を送るものの如きなり、遠路獨歸寺周賀を今日尋ねて吳れ而して獨行寺に歸る、幾時重到城今日南嶽へ歸り去らば、幾時か此の長安城中へ再游するや、風高寒木落、雨絶夜堂清衡山は七十二峯あり、三峯極めて秀づるもの芙蓉、紫蓋、石園と曰ふ、風も高き所以知るべし、夜堂清き所以も亦知るべし、自說深居後、鄰州亦不行南嶽へ還る僧が說くなり、南嶽へ還りたる後は、鄰州にも行かず、況んや遠游をや、唯坐禪修習するのみなり、

送人歸蜀　馬戴

別離楊柳陌　迢遞蜀門行　若聽清猿後　應多白髮生
虹蜺侵棧道　雨雪雜江聲　過盡愁人處　煙花是錦城

別離楊柳の陌、迢遞たり蜀門の行、若しくは清猿を聽いて後、應に多くは白髮生ずべし、虹蜺棧道を侵し、雨雪江聲を雜ふ、人を愁へしむる處を過ぎ盡さば、煙花是れ錦城、

【句釋】蜀の事は前に辨ぜり、別離楊柳陌は市の事なり、長安城東門外の陌頭正に此の處まで送る、迢遞は「ハルカ」「トホク」なり、蜀門行蜀門に向つて行く、若聽清猿後清は聲の「サエ」て聞へること、其のサエた聲を發する猿を聞て後、應多白髮生白髮は愁に緣つて生ずること、古今同一なり、虹蜺侵棧道蜀の棧道は天下の險を極む、利州より三泉橋に至る棧閣實に一萬九千三百十八間、護險の偏欄實に四萬七千七百三十四間、此の棧道に於て虹蜺が侵生ずるを見る、雨雪雜江聲「雨雪の時は虹蜺あるべからず」と說く者あり、此の詩意は雨雪の時、虹蜺ありと言ふにあらず、或時は虹蜺、或時は雨雪となり、一時に虹蜺と雨雪と來るにはあらず、天に雨雪の聲あり、脚下に江水の聲あり、以て相雜はるを云ふ、過盡愁人處愁の字は奇險なる處を云ふ、三峽や棧道や蜀江等の人をして其の險に愁へしむる邊を過ぎ盡くせば、煙華是錦城蜀の成都府、江山明媚、錯華して錦の如し、故に錦城と曰ふ、苦境を通過して始めて樂境に達するを云ふ、

經周處士故園　方干

愁吟與獨行　何事不關情　久立釣魚處　唯聞啼鳥聲
山蔬和雨歇　海樹入籬生　吾在茲溪上　懷君恨不平

愁吟と獨行と、何事か情に關らざらん、久しく釣魚の處に立てば、唯啼鳥の聲を聞く、山蔬雨に和して歇み、海樹籬に入つて生ず、吾茲の溪上に在つて、君を懷うて恨平らかならず、

【句釋】經は經過、周は姓、處士は終身官に仕へざる人の自稱、故居とあれば周が死んだ後、此を經しならん、愁吟與獨行愁吟する者も方干なり、獨行する者も方干なり、何事不關情見聞する物、情に關せざるものなし、久立釣魚處水頭に立て見れば是れ故人が釣魚の處でありしなり、唯聞啼鳥聲林中に向つて聞けば啼鳥の聲のみあり、故人が吟聲は聞くなし、山蔬和雨歇雨の爲めに打ち敲かれた山蔬は誰も今日培ふ人なし、海樹入籬生海邊の樹枝が伐截する者なきを以て籬の中まで侵略する、共に是れ荒廢の狀を云ふ、吾在茲溪上茲とは故居を云ふ、此の故居の溪上に在つてなり、懷君恨不平君を懷ふも君在らず、恨平らかならざる所以なり、

送二人歸山　石召

相逢唯道在　誰不二共知貧一　歸路分二殘雨一　停レ舟別二故人一
霜明松嶺曉　花暗竹房春　亦有二棲閒意一　何年可レ寄レ身

相逢うて唯道のみ在り、誰か共に貧しきことを知らざらん、歸路殘雨を分ち、舟を停めて故人に別る、霜は明かなり松嶺の曉、花は暗し竹房の春、亦棲閒の意あり、何れの年か身を寄すべき、

【句釋】石召は傳未詳、人の歸山を送る詩なり、相逢唯道在此の道は人の修習すべき大道を云ふ、歩行の道にはあらず、相逢ふも金錢の友にはあらず、道の爲めの友なり、誰不共知貧我が輩の貧は他人も能く知つて居る、貧など恥づる必要はなし、歸路分殘雨雙方共に同じ殘雨を見るから分と云ふ、『古注』は意を得ず、停舟別故人別れんと欲して舟を停む、離別の際、然るべきものあり、霜明松嶺曉、花暗竹房春冬日は松嶺清く、春日は竹房美なり、人の歸隱する所の景、亦有棲閒意我も亦閒處に棲息せんとする意あり、何年可寄身何れの年にか此の宿志を遂げて山人の處に身を寄するを得ん、

送二友人歸宜春一　張喬

落花兼二柳絮一　無二處不二紛紛一　遠道空歸去　流鶯獨自聞
野橋喧レ碓水　山郭入レ樓雲　故里南陵曲　秋期更送レ君

落花と柳絮と、處として紛紛ならざるは無し、遠道空しく歸り去る、流鶯獨自ら聞かん、野橋碓に喧しき水、山郭樓に入る雲、故里南陵の曲、秋期更に君を送らん、

【句釋】宜春は漢代縣豫章郡、唐代江南道袁州、今日の江西省袁州府なり、落花兼柳絮、無處不紛紛正に是れ晩春、絮も紛紛、花も紛紛、遠道空歸去、流鶯獨自聞及第せしなれば得得として歸らんも、下第の身、戚戚として歸らざるを得ず、流鶯卽ち殘鶯を聞くに就ても、感慨の情に堪へず、空の字意を著けて見よ、野橋喧碓水碓は音「タイ」訓「カラウス」なり水碓の一名、礌車、水を下へ落す機械なり、途中所見の景、山郭入樓雲此の句は友人が家に歸りし後の景と解するも、途中所見と解しても、二義共に通ずるなり、野橋の句は世人の機巧を爲して世を渡るに譬へ、山郭の句は友人の家に歸りて安閒無事なるに譬ふと、此の意も亦通ず、故里南陵曲南陵は張喬の故里と爲す、袁州の鄰國宣州に南陵あり、張今は長安城門外に在るも、後には此の故里に返る、秋期更送君試驗は春と秋と二期にあり、春の今日は下第して君は故里に歸る、我は長安城に在つて之を送る、秋の考期には我故里に在りて、君が更に考試に京へ上るを送ら

んとなり、諸注此の意を得ず云云す、笑ふべし、已前五首、

秋日別王長史　王勃

別路千餘里　深恩重百年　正悲西候日　更動北梁篇
野色籠寒霧　山光斂暮煙　終知難再報　懷德自潛然

別路千餘里、深恩百年に重し、正に西候の日を悲んで、更に北梁の篇を動かす、野色寒霧を籠め、山光暮煙を斂む、終に知る再び奉じ難からんことを、德を懷うて自ら潛然、

【句釋】王長史は王勃の叔父なり、父の王福時を覲省せんとして暇を乞うて、交趾國へ行く時の作なり、別路千餘里長安より交趾へ赴く、今日我邦人が洋行するより以上の辛苦なり、死を以て行くなり、深恩重百年終身其の恩の重きを荷ふとの意なり、百年は終身の語と同一なり、叔父の爲め養はれて其の恩極めて重し、正悲西候日候は期候の候、西候は秋日の意味に當る、秋日は何事無くとも悲し、況や離別に際してをや、更動北梁篇梁の江淹が「別賦」に「喬木ヲ故里ニ視テ、北梁ニ訣レテ永ク辭ス」とあるに依て、其の別れに就て感動することを云ふ、手を

分つの地を北梁と云ふ、野色籠寒霧黄昏近くなりて野田の色、寒霧が籠めて暗く見ゆ、山光斂暮煙暮煙散じ斂まり山光自ら顯はる、前句は平地、後句は高地、對法知るべし、終知難再奉千里の別、生きて再遇は期し難し、懷德自潸然叔父の恩德を懷ふと、雙涙の潸然たらざるを得ず、侍養に奉ずるを得ず、悲しむ所以、交趾へ行く途次、水に溺れて死す、年二十九と傳に見ゆ、此の詩遂に讖を爲すもの、

汝墳別業　祖詠

失路農爲業　移家到汝墳　獨愁常廢卷　多病久離羣
鳥雀垂窗柳　虹蜺出澗雲　山中無外事　樵唱有時聞

路を失して農を業と爲す、家を移して汝墳に到る、獨愁ふ常に卷を廢するを、多病久しく羣を離る、鳥雀窗に垂るるの柳、虹蜺澗を出るの雲、山中外事無し、樵唱時あつて聞く、

【略傳】祖詠は洛陽の人、開元十二年に杜綰、進士と爲る、少より王維と交游し、吟侶と爲る、後、流落不偶、家を汝墳の間に移し、漁樵を以て身を終ふ、

【句釋】汝墳は隋に縣豫州潁川郡、今日の河南省南陽府葉縣治なり、別業は別莊なり、業は人の攻め治める所のもの悉く業なり、別莊は游樂處にあらず、是の故に業の字を以て稱す、失路農爲業失路は卽ち失志なり、進士と爲り、天下に名を揚げん志なりしも、事は志しと違ひ農を以て業と爲すの止むを得ざるに至れり、移家到汝墳移家とは一家を擧げての意、妻子眷屬悉くなり、京都を離れて汝墳の田間に到る、獨愁常廢卷書籍を竹卷と云ふ、古代は竹にて製し一一卷くが爲め、後世も尙是れ書卷と云ふ、愁多きが故に讀書する心無きなり、多病久離羣單に病とあるは大抵貧病なり、富貴なれば他人集まり、貧賤なれば親戚離る、今の離羣も是れ貧病なるが爲めなり、鳥雀垂窗柳鳥雀は我の貧病を知るや知らざるや、窗前に垂るる柳に止まり啾啾たり、虹蜺出澗雲虹蜺は非常の勢力を示して、澗を出でて横はる、是も我の貧病を知るものにあらず、山中無外事山中は市中の如く、種種の見聞あるにあらず、樵唱有時聞樵夫が樵歌を唱へて過ぎる聲を偶ま聞く、是も往來に聞くのみ、時ありて聞くは、偶ま聞くことなり、

宣州使院別韋應物　劉長卿

白雲乖始願　滄海有微波　戀舊爭趍府　臨危欲負才
春歸花殿暗　秋傍竹房多　耐可機心息　其如羽檄何

白雲始願に乖く、滄海微波あり、舊を戀うて爭つて府に趍り、危に臨んで才を負はんと欲す、春は花殿に歸つて暗く、秋は竹房に傍うて多し、機心の息むべきに耐へたり、其れ羽檄を如何、

【句釋】●●宣州は西漢には縣丹陽郡、隋に宣州と改む、宣城郡是れなり、今日の安徽省寧國府南陵縣の東四十里なり、使院は今日の領事館の如きもの、韋應物は劉長卿の友人にて、蘇州の刺史と爲りし人、古注に韋應物が宣州の守護、卽ち刺史たりし時、劉長卿は其の幕賓たり、天寶の亂の時、王命を以て陣に行く、正に途に上らんとする時、韋應物が留別の燕を張る、其の座中に寂上人なる高僧あり、送詩を作りて應物に別る、劉長卿も作るもの卽ち此の詩なり、●●乖始願白雲が始願に乖くにはあらず、白雲の始願に乖くなり、字句構成法此の如く用ふるなり、白雲の中に於て人間と別に悠悠とせんことは我の始願でありしなり、其の始願遂げずして小役人と爲る、乃ち始願に乖くなり、●●滄海有微波我が人間としての煩惱海に微波あるが爲め、蘇州の如く、又寂上人の如く、佛道を淸淨に修すること能はざるなり、而して韋も劉も共に奉佛家なり、●●●●戀舊爭趍府作者卽ち劉長卿が舊友なる韋應物を戀うて、何人よりも先きに宣州の使院に

訪問する、趍は字音「スウ」訓「ハシル」走なり、●●●●臨危欲負戈國家の危急に臨んでは筆を捨て、戈を負うて起つ、卽ち祿山の亂に向つて自ら赴くを云ふ、●●●●春歸花殿暗天下春風なれど、此の使院は特に春の歸收するを覺ゆ、花が殿閣を圍繞して暗し、暗きは花の多きを形容する、●●●●秋傍竹房多秋を淸爽にするものは竹なり、其の房を圍繞して竹あり、秋の氣特に多きを覺ゆ、共に使院の景色、●●●●耐可機心息心を動らかすものを機と云ふ、其の心を何處に向つて動らかすと云ふに、人間の名利榮達等に對してなり、其の機心も息むべき筈なるも、●●●●其如羽檄何人間外に徜徉せんと欲するも、帝王の命軍に赴かざるを得ず、如何は「ドウシヤウモナシ」なり、羽檄は軍中の簡書、卽ち命令書なり、主としては寂上人に對して叙べ、客としては韋應物に對して云ふなり、魏の曹丕の奏事に若し急あらば則ち羽を以て檄に加へよと、檄文に雞の羽を添へ加ふるなり、

送陸潛夫延陵尋友　皇甫冉

登山自補屐　訪友不齎粮　坐歇靑松晚　行吟白日長
人煙隔水見　草氣入林香　誰作招尋侶　淸齋宿紫陽

山に登つて自ら屐を補ふ、友を訪うて粮を齎さず、坐に歇ふ靑松の晚、行

吟すれば白日長し、人煙水を隔てて見え、草氣林に入つて香し、誰か招尋の侶と作つて、清齋して紫陽に宿せん、

【句釋】陸潛夫は傳未詳、延陵は西漢に縣名北平郡、李兆洛云ふ今日の直隷境ならんと、陸が其の友人を尋ねて延陵に赴むくを送る詩なり、登山自補屐晉の謝靈運が木屐を著けて山に登る、其の事を後世、山水の游を爲す者に應用する、屐齒折るれば、他を煩はさず、自ら之を補ふなり、訪友不齋粮無錢旅行を云ふ、粮は食物なれど詩の意は、友を訪ふに金錢を攜帶せずして行くとなり、坐歇青松晚其の途中疲勞を感じたる時は青松に倚りて日暮に休歇する、行吟白日長疲勞を醫すれば直ちに行吟して白日の長きを忘る、人煙隔水見人煙なき處を通過して、人煙ある處に至る、旅行者の喜雀する態、此に在る、水を隔つは近距離なるを云ふ、草氣入林香林に入れば草氣香ばしの意、已に友人の居に近づき、藥草の氣、人衣に逼るを知る、誰作招尋侶侶は複數、二人以上を指す、友を尋ぬる人を招きて以て作者卽ち皇甫冉も共に行かんとなり、清齋宿紫陽清齋は肉食せざること、惡食せざること、野菜の類を食ひ、清泉を飲む之を清齋と云ふ、紫陽觀は延陵に在り、道士の住する處、其の道士名は侯尊師、一時尊崇せられし人

なり、誰の字に依て案ずれば、必ず招尋侶ありと云ふにあらず、誰かがあるやと疑問に屬す、陸潛夫に知己なきを表はす、

夏夜西亭卽事　　耿緯

高亭賓客散　暑夜最相和　細汗凝衣集　微涼待扇過
風還池色定　月晚樹陰多　遙想隨行者　珊珊動曉珂

高亭賓客散ず、暑夜最も相和す、細汗衣に凝つて集まり、微涼扇を待つて過ぐ、風還つて池色定まり、月晚うして樹陰多し、遙に想ふ行に隨ふ者、珊珊として曉珂を動ぜんことを、

【略傳】耿緯は『唐書』に傳なし、『才子傳』に耿湋に作る、寶應中肅宗の時進士に登り、左拾遺と爲り、後、江淮の間に謫せらる、

【句釋】西亭は江淮に謫せられて、其の官衙に亭を立て常に居す、之を西亭と云ふ、卽事は所見と同じ、眼前の景を叙す、高亭賓客散高處に在るを以て西亭と言はず高亭と言ふ、賓客は同時の詩人錢起を云ふ、『全唐詩』には「夏夜江淮西亭會二錢員外一」とあるに依て其の客の誰たるを

知るなり、散は去なり、歸去なり、暑夜最相和此夜客と最も和したと言ふにあらず、夜に入るも涼氣無く、暑氣の酷だしきを云ふ、細汗凝衣集汗が細く流れ衣にシミテ集まる、微涼待扇過涼が微しく扇の爲めに過ぐ、風還は風が何處へか還り去る、此の夜風なきなり、風吹かざるなり、池色定は水面に浪が起らざるを云ふ、浪起れば池色定まらざるなり、月晚は月の出る晚きなり、樹陰多は明明と月が照さざるゆゑ、唯暗くして樹陰が多きを知るのみ、遙想隨行者江淮より長安の事を想ふが故に遙なり、曉來其の宮禁に行く者を隨行者と云ふ、必ずしも大官の行に隨從する者と見るにあらず、珊珊動曉珂官人が佩玉の聲を形容して珊珊と云ふ、邊地に在るも中土を忘れざるなり、

庭春　姚合

塵中主印吏　誰遣有高情
土融凝野色　氷敗滿池聲
趁暖簷前坐　尋芳樹底行
漸覺春相泥　朝來睡不輕

塵中主印の吏、誰か高情あらしむ、暖を趁うて簷前に坐し、芳を尋ねて樹底に行く、土融けて野色を凝らし、氷敗れて池聲滿つ、漸く覺ゆ春の相泥

むことを、朝來睡輕からず、

【句釋】庭春は素隱の說に曰く、本集の題には游春と出し、蓋し詩十五首あり、此の詩其の一なり、余今『全唐詩』の姚合集を檢するに十五首は十二首の誤なるを知る、塵中主印吏は印判を主る吏官、武功縣の主簿たりし時の作とす、「武功縣中作三十首」の中にも主印三年坐、山居百事休の句あり、政治なぞ執る者は塵中の事なればなり、誰遣有高情主簿なぞの役人は大抵俗吏にて、上官とか、下官とかの名を求むるに汲汲として劣情はある、高情は有る無し、高情とは何ぞ、世事を離れて自然を樂しむ底の人なり、暗に自ら任ずるが如し、趁暖簷前坐是れ高情の一端なり、簷前に坐するが何故に高情ぞと尋ぬれば畢竟默坐して詩を推敲するなり、尋芳樹底行是れも高情の一端なり、世に求むる少なきもの、花を尋ねて樹底に行くのみ、土融凝野色冬日は土凍るも、春日は土融す、融は柔融、暖氣の爲め百艸が芽を出し、野の色自ら凝結する、凝は成也と注するゆゑ、俗語の「野ハ野ラシク成ッタ」なり、氷敗滿池聲氷が融解して流るる故に池水に袞袞と聲あるなり、漸覺春相泥春と自然界と我と相泥むを覺ゆ、朝來睡不輕輕の反對は重、不輕は卽ち重となる、春眠曉きを覺えざるの意、

新春

官卑長少事　縣僻又無城　未曉衝寒起　迎春忍病行
樹枝風掉軟　菜甲土浮輕　最好林間鶴　今朝足喜聲

官卑うして長く事少し、縣僻にして又城なし、未だ曉けざるに寒を衝いて起き、春を迎へて病を忍んで行く、樹枝風掉ひて軟に、菜甲土浮んで輕し、最も好し林間の鶴、今朝喜聲足し、

【句釋】新春は立春なり、萬年縣の尉たりし時の作、官卑長少事尉官は日本今日の奏任八等の地位に當る、卑と稱する所以、大事に關與する資格なき故に少事なり、縣僻又無城僻は陋、縣廳は畢竟名のみ、其の建築なぞ見る影も無し、未曉衝寒起新春を祝せん爲め、未明に寒を衝きて起る、迎春忍病行天子春を東郊に迎ふは『月令』に出る所、天子も庶人も春は迎へざるべからず、今春を迎へんと欲して其の縣衙に病を忍んで行くなり、樹枝風掉軟春風は嚴風と異なる、樹枝を吹くも軟なり、菜甲土浮輕野菜の新たに生ずる實の形は、恰かも人の甲を著けたるが如きを以て菜甲と云ふ、土を出ること甚だ輕し、物の時に遇うて、本能を發揮するを羨やむ、最

好林間鶴、今朝足喜聲見る所、總べて好き中、最も好きものは林間に鳴く鶴なり、今朝の鳴聲は昨朝に異なりて非常に喜ぶが如し、足は多なり、滿足なり、已前七首、

晩春答嚴少尹諸公見過　王維

松菊荒三徑　圖書共五車　烹葵邀上客　看竹到貧家
雀乳先春草　鶯啼過落花　自憐黃髮暮　一倍惜年華

松菊三徑に荒る、圖書共に五車、葵を烹て上客を邀へ、竹を看て貧家に到る、雀乳春草に先ち、鶯啼いて落花を過ぐ、自ら憐む黃髮の暮、一倍年華を惜むことを、

【句釋】晩春は三月、嚴少尹諸公見過嚴少尹が家へ諸公が訪問する、其の厚意を謝したる詩を少尹が作り、王維に示したり、王は此の詩を作り以て少尹に答へしなり、松菊荒三徑三徑荒に就き、松菊猶存す、は陶淵明の語、今借用して以て少尹に譬ふ、少尹其の人の清廉なるを示す、松菊の外に物無しとの意、日本の我輩如き詩人は住屋すら無し、況や松菊をや、漢土の人は住屋や松菊位を所有するのみにては富人の中に入らざるなり、圖書共五車學者の本分、金に貧

なるも書籍に富む、一車二千卷を積むと見ても、一萬卷を藏するなり、烹葵邀上客葵は「アフヒ」菜の一種、露葵あり、綠葵あり、共に貧者の食物にて、富人の食物にあらず、而かも少尹は上客を招待するに此の疎物を以てす、物疎にして、志は疎ならず、邀は「ムカヘル」なるが、迎とは異なる、招待する意義を帶ぶ、看竹到貧家少尹が時ありて貧家に到るあり、何の爲めぞやと言へば、竹を看ん爲めなり、王子猷の故事なり雀乳先春草雀の子を乳するの期は春草の未だ生せざる先きなり、鶯啼過落花是れは正しく晩春の景、雀乳を見しは昨日なる如くの感を爲ししが、今日は早や花は落ち、鶯は殘し、時方に初夏に入らんとす、自憐黃髮暮自とは王が自身、白髮が一變すれば黃髮と爲ることもあり、又白髮と爲らず、綠髮が直ちに黃髮と化する人もあり、老人に爲りし意、一倍惜年華少壯の間は未來を長しと觀ず、故に年華を惜むの情に乏し、老境に及んでは、未來が短かし、年華を惜むの情、人に一倍するなり、

送王正字山寺讀書　李嘉祐

欲究先儒教　還過支遁居　篠堦閒聽法　竹寺獨看書
向日荷新卷　迎秋柳半疎　風流有佳句　不似帶經鋤

先儒の教を究めんと欲し、還つて支遁の居を過ぐ、篠堦閒に法を聽き、竹寺獨書を看る、日に向つて荷新たに卷き、秋を迎へて柳半ば疎なり、風流佳句あり、經を帶びて鋤くには似ず、

【句釋】　王正字舊說に王は鄉貢生卽ち今日の留學生として、長安に在りしが、春期考試に下第して、秋の考試を待つ間、山寺に寓して書を讀まんと欲し、李が家に暇を乞ふ爲め來る、李は卽ち此の詩を以て其の行を送る、欲究先儒教儒は學者の代名詞、先儒の意味極めて廣きも、此の句は孔夫子の道を究めんと欲すと見るべし、還は「カヘツテ」と訓む、過支遁居支遁居の三字にて梵寺と解釋す、梵寺は釋迦教を究むる所にて、儒教とは關係なし、其の關係なき寺へ來て却て儒教を讀むなり、晉の支道林名は遁、名高きを以て借用す、篠堦閒聽法篠は「ササ」其の篠の密生したる堦下に於て、山僧の法を說くを聞く、竹寺獨看書或は竹林中の寺に往て己が本領とする先儒の書を看讀する、印度に竹林精舍あるを以て、特に竹字を用ふ、向日荷新卷向日は日を逐うての意、太陽に向つてにはあらず、荷葉の卷くを見る、迎秋柳半疎夏日には荷葉の卷くを見、秋日には柳條の漸く疎ならんとするを見る、風流有佳句山寺に讀書三昧に日を送ら

ば、餘裕はあるまじと思ひしに何ぞ料らん、其の人風流にして佳句あり、不似帶經鋤鋤とて百姓するにはあらず、書を鋤くなり、書を多讀する人の病癖として、偶ま詩を賦するも、頭巾氣紛紛として讀むに堪へず、此の人は然らずと嘆ずるなり、

秋日過徐氏園林　包佶

回塘分越水　古樹積吳煙　掃竹催鋪席　垂蘿待繫船
鳥窺新罅栗　龜上半欹蓮　屢入忘歸地　長嗟俗事牽

【略傳】包佶字は幼正、潤州延陵の人、天寶六年の進士、後、丹陽侯に封ぜらる、

【句釋】徐氏は友人ならん、回塘分越水塘は堤なり、回は「メグル」なり、此の潤州の延陵は古の越地、故に越水を分つと云ふ、東西の塘に越水が分流する、古樹積吳煙樹に挂る煙を見て是れは古時吳の煙なりと想像する、吳と越との間に當る地位なればなり、掃竹催鋪席掃竹は待つ、鳥は窺ふ新罅の栗、龜は上る半欹の蓮、屢ば忘歸の地に入る、長く嗟す俗事に牽かるることを、

名詞にあらず、塵氣を掃ふの竹を云ふ、竹が得意に爽爽として誰か來つて此君の處に席を鋪いて看よと催促するが如くなり、垂蘿蘿藤の條枝が長く垂れて、待繫船誰か來つて此の處に船を繫げよと是れ亦催促する如く、又待つものの如し、鳥窺新罅栗是れ眼前所見の景、鳥は栗を食ふものにあらず、窺ふも用なきなれど、實見するものとすれは止むを得ず、猿の誤ならんと思へども、余の臆斷は許さざる所なり、罅は「サケル」なり「破ル」なり、栗皮サケテ實が見えるなり、龜上半欹蓮鳥は高處、龜は低處、蓮葉の欹つ邊に龜は悠悠と甲を曝らす、屢入忘歸地再再此の如き好園林に入る、歸るを忘れざらんとするも能はず、忘歸地とは好園林なれば云ふ、長嗟俗事牽眞に嗟するにあらず、詩語として言ふのみ、眞に嗟するなれば、俗事を謝して隱居すれば可なり、漢人の常語と見るべきなり、

灞東司馬郊園　許渾

楚翁秦塞住　昔事李輕車　白社貧思橘　青門老種瓜
讀書三徑草　沽酒一籬花　更欲尋芝朮　商山便寄家

楚翁秦塞に住す、昔し事ふ李輕車、白社貧うして橘を思ひ　青門老て瓜を

種う、書を讀む三徑の草、酒を沽ふ一籬の花、更に芝朮を尋ねんと欲す、
商山便ち家を寄せん、

【句釋】灞東は地名、長安に在り、司馬は官名、許渾は武宗の代に行軍司馬の官と爲りしが、今は灞東に歸隱したりと、此の注者は郊園を以て許渾の自家と爲すなり、又一說は何人かは知らず司馬の職に在る人の郊園なりと爲す、詩に由て之を見るに、自家の如くも思へる、又他家の如くにも思へる、余は許渾自身の事を云ふにあらずして、別に司馬なる人あり、此の人の郊園を咏ずるものと爲す、楚翁秦塞住、昔事李輕車楚翁は司馬を云ふ、司馬は楚國の產なるを以て翁の敬稱語を以てす、灞東を指して秦塞と云ふ、李廣の弟に李蔡あり、此の人大將軍衞靑に從がつて左賢王を擊つて功あり、輕車將軍と爲る、其の漢代の故事を借りて、今此の司馬が楚國より來りて、行軍司馬となり、大將軍に從つて、長安の東なる秦塞に住するに譬ふ、白社貧思橘古注に曰く、白社地名は洪州の西に在り、武陽縣の龍陽洲に接す、周廻三十里、其の地白將軍の圃を築くに因て遂に以て社に名く、按ずるに白公勝の族を以て、楚の將と爲す、白公其の國を亂さんと欲して乃ち之を召す、將軍曰く子に從つて其の國を亂すは則ち君に不義なり、

子に背いて其の私を發す、則ち族に不仁なり、遂に其の祿を棄て、圃を築き、園に灌ぎ、以て其の身を終ふ、楚人之を名て白善將軍樂圃と曰ふ、今其の地は濃州の東、藥圃寺に在り、『唐書』に白公勝は魯の哀公の時の人、又『荊州記』に李衡字は叔平、丹陽の太守と爲り、每に家を治んと欲す、妻輙ち聽さず、後、密かに人をして武陵の龍陽洲の沅川上に於て宅を作り、柑橘千樹を種ゑしむ、死に臨み兒に謂つて曰く汝の母、我の家を治むを惡む、故に窮すること是の如し、然れども吾淵里に千頭の木奴あり、汝に衣食を責めず、每歲一疋の絹を上まつて亦用ふべし、靑門は咸陽の第三門なり、今以て司馬に譬ふ、司馬は官を罷め、白社に歸り橘を種ゑんと思ひしが、其の事は止め、邵平卽ち秦の東陵侯が靑門に瓜を種ゑし事を倣ふ、東陵侯は淸士なれば以て比するなり、讀書三徑草晉の隱者蔣詡は竹下に於て三徑を開き、其の徑を往來して讀書す、司馬も此の如し、沽酒一籬花酒を沽うて來り一籬の菊花に對し之を飮む、司馬を以て淵明に比す、更欲尋芝朮讀書、沽酒の興ある上、更に餘藥を求むるなり、芝は靈芝、朮は白朮、一名山連と云ふ、久しく服すれば、身を輕くし、年を延べ飢ゑずと、卽ち藥物なり、商山便寄家漢初に隱者四人あり、四皓と稱す、世人は帝王以上に尊崇して居りしなり、其の四皓は身を此の商山に置く、是を以て司馬も此の四皓の如く芝朮を采つて、此の商山に家を寄すとなり、

下第寓居崇聖寺

懷玉泣京華　舊山歸路賒　靜依禪客院　幽學野人家
林晩烏爭樹　園春蝶護花　東門有閒地　誰種邵平瓜

玉を懷いて京華に泣く、舊山歸路賒なり、靜に禪客の院に依つて、幽に野人の家を學ぶ、林晩れて烏樹を爭ひ、園春にして蝶花を護す、東門に閒地あり、誰か邵平の瓜を種ゑん、

【句釋】下第は落第なり、寓居は假住を云ふ、崇聖寺は長安の崇德坊に在り、『長安志』に云ふ進士櫻桃の宴、此の寺の佛閣上に在り、懷玉泣京華己が才を玉に比す、玉の如き貴き才を有するも下第とは何事ぞと、憤慨して以て泣く、京華は都城即ち長安なり、昔し卞和が玉を抱きて荆山の下に泣いて居たるが如し、舊山歸路賒潤州の舊山は我が故鄕なるも路賒にして歸るを得ず、京華の崇聖寺に寓して秋期を待つなり、靜依禪客院崇聖寺を指して禪客院と云ふ、寺の外に禪客院と指したるにはあらず、幽學野人家幽は靜と殆んど意義同じ、禪客院は坐禪する人、又香火を供する人の依る處なり、然るに我は香火も供せず坐禪もせず、自由に起居す、野人の

家を學ぶ所以、野人は禮に嫻はざる意なり、林晩烏爭樹夕陽に歸宿を爭ふ烏が林樹に集まる、烏を一本烏に作る、烏の爪、蝶の爪に對する法は下劣なり、烏の平聲を以て蝶の仄聲と對するが當然、本集も亦烏なり、園春蝶護花春風は公道、禪院も亦春なり、花開く蝶は此の花を護る、人は烏の如く聲名を爭ふ、我は蝶の如く自身の業とする所を護る、東門有閒地崇聖寺は長安城の東門に當る、其の寺の東門外に閒地卽ち畊作せざる荒地がある、誰種邵平瓜邵平は召平が正しきなり、史記五十三蕭相國世家に附す、秦の東陵侯、秦破れし後、布衣平民と爲り、瓜を作りて東門外に種ゑ之を賣りて以て活す、我も召平の如く隱逃して瓜を種ゑんと欲するも能はず、寺に寓して讀書する所以は、秋期の試驗を待つて及第せんが爲めなり、

寄山中高逸人　孟貫

煙霞多放曠　吟嘯是尋常　猿共摘山果　僧鄰住石房
躡雲雙屐冷　採藥一身香　我憶相逢夜　松潭月色涼

煙霞多くは放曠、吟嘯是れ尋常、猿と共に山果を摘み、僧に鄰りて石房に住す、雲を躡んで雙屐冷に、藥を採つて一身香し、我は憶ふ相逢ふ夜、松

潭月色の涼しかりしことを、

【略傳】孟貫は閩中の人、人と爲り疎野、榮官を以て意と爲さず、篇章を喜ぶ、周の世宗、廣陵に幸す、貫大に詩價あり、世宗亦之を聞く、因て一卷を繕錄して獻ず、曰く、巢あるの樹を伐らず、多くは無主の花を移す、世宗悅ばずして曰く、朕、叛を伐て民を弔す、何ぞ有巢無主の說を得んや、朕に獻せば則ち可、他人ならば則ち卿必ず免さず、復卷を終へずして、釋褐進士することを賜ふ、其の終りを知らず、

【句釋】山中は字の如く山の中、高は姓、逸人は自稱する語、又他人より稱する語、隱逸の人なり、煙霞多放曠山水を稱して煙霞と云ふ、自由氣儘に獨往獨還することを放曠と云ふ、山水の游を自由にする、吟嘯是尋常逸人の逸人たる所以見るべし、凡人俗人は吟嘯是れ尋常ならざるなり、猿共摘山菓人間と游ばず猿と游ぶ、逸人の本領此に在り、僧鄰住石房我が住居の石房卽ち洞穴は僧寺に鄰る、又凡俗と異なるなり、躡雲雙屐冷、採藥一身香雲を躡むは山の深きに入るなり、藥を採るは身を修するなり、雲の爲め雙屐は冷と爲る、藥の爲め一身は香氣を發す、我憶相逢夜憶は記憶なり、過去に屬す、想と異なる、今此の詩を賦し寄呈するに因つて憶ひ起すことは曾て相逢ひし夜の事なり、松潭月色涼松潭は潭の名ならん、其の潭中に月色の涼かり

しを見て非常に道味を感せしが、今日も其の事を憶ひ起すとなり、

廬嶽隱者　杜荀鶴

見說來居此　未嘗離洞門　結茅遮雨露　採藥給晨昏
古樹藤纏殺　春泉鹿過渾　悠悠無一事　不似屬乾坤

見るならく來つて此に居り、未だ嘗て洞門を離れず、茅を結んで雨露を遮り、藥を採つて晨昏に給す、古樹藤纏うて殺し、春泉鹿過ぎて渾る、悠悠として一事無し、乾坤に屬するに似ず、

【句釋】廬嶽は廬山なり、周の威王の時、匡裕、生れながらにして神靈なり、此の山に廬りす、世に廬君と稱す、故に名く、佛敎徒は晉の惠遠法師を以て此の山を崇拜するものなり、隱者此の山中に隱れて道を修習する者、見說來居此說は語助なり、見說の二字で「ミル」なり、「ミルナラク」と訓むも、「ミル」の意味なり、未嘗離洞門洞門は隱者の住居、其の住居を離れて人間に出しことなし、諸注に此の十字を解して「隱者が杜荀鶴ニ語ル意ナリ」と云ふ、誤謬なり、隱者が語るにあらず、杜荀鶴が隱者の實事を知つて、自ら敍べるなり、結茅遮雨露隱者と雖も、石

にあらず、木にあらず、此の一身は血あり肉あり、雨露の害を蒙むる能はず、茅を結んで僅かに之を防ぐ、採藥給晨昏晨昏に給すと云ふは昕夕の食と爲すとの意なり、隱者も食無くんば生きず、然りと雖も肉食するの俗人を學ばず、靈藥を採つて以て食と爲すなり、古樹藤纏殺山中の實景、藤が樹皮の精分を食ひ盡すゆゑ、樹は遂に殺さる、春泉鹿過渾鹿が泉を超ゆるゆゑ水が偶ま渾る、殺と渾とは隱者の方から言へば可ならざるもの、然れども自然は如何ともすべからず、悠悠は物に動ぜずと見て可なり、無一事自然に一任して、强て累を求むるなし、一事無き所以、不似屬乾坤隱者も亦人なり、人は人としての事なかるべからず、然るに隱者には人は人としての事なし、此の天地間に住するに似ず、讚しての言なるか、諷しての言なるか分明ならざるが、余は多少の諷意あるかと思はるるなり、抑も詩を人に寄す、字を擇ぶを以て第一と爲し、次ぎに句、次ぎに章と爲るなり、其の第一の字を擇ぶに例せば此の詩の中にある、殺や渾等の字は避けざるべからず、避けざる字を避けざるは、作者の意の存する所なり、是を以て知る作者の意諷諭にあることを、隱者は畢竟仙人の類なり、仙人は長生不死の藥を服し、自他共に長壽を欲するも、千年も萬年も死せざることに至らず、亦淸白なりと云ふと雖も、外物の爲め其の淸白を汚さるること無しとせず、渾らざること無しとせず、千年の古樹も藤の爲め殺

され、晨昏淸潔なる泉水も時ありて亦渾る、是の故に隱者と雖も、高く自ら賴むべからず、是の故に乾坤の間に住する者は、乾坤の間に住する人間として可なりとの諷諭を寓したるものなり、杜荀鶴は道士や山僧や隱者と交游多き人なること、其の詩にて知るべし、記し畢りて本集を閱す、見說の二字自見に作り、露の字雪に作る、余の見の誤まらず、隱者が語るにあらずして、杜が見る所なることを、

寄司空圖　僧虛中

逍遙短褐成　一劍動精靈　白晝夢仙島　淸晨禮道經
黍苗侵野徑　桑椹汚閒庭　肯要爲鄰者　西南太華靑

逍遙短褐成る、一劍精靈を動かす、白晝仙島を夢み、淸晨道經を禮す、黍苗野徑を侵し、桑椹閒庭を汚す、肯て鄰を爲す者を要せんや、西南太華靑し、

【略傳】虛中は宜春の人、馬氏に客爲り、湘西の粟城寺に住す、齊己、尙顏、棲蟾と詩友たり、碧雲集一卷あり、

【句釋】　寄司空圖虛中は『全唐詩』に詩十四首あり、其の中司空圖に寄する詩二首あり、是れ其の一首、又鄭谷とも交游して贈答の詩あり、『全唐詩』寄の下に「華山」の二字あり、逍遙短褐成短褐を著けて逍遙するの業なるとなり、褐は毛布、裘と同じ、賤者の服する所、道士の服する所、要するに平民服の代名詞、司空圖が輕裝成るとなり、一劍動精靈司空圖が傳に初め風雨の夜を以て、古の寶劍を得、慘澹として精靈なり、虛中在時に司空圖の傳は未だあらざるも、司空圖が直接に談話せしことを詩中に叙べしなり、劍は士の魂、獨日本のみならず、漢人も亦然り、之を著けて一刻も離さず、短褐と一劍とにて出游するなり、中條山は司空圖の住處、此の山中を逍遙する、白晝夢仙島白晝に眠る如きは世事に營營たる人の爲さざる所、然るに司空圖は白晝に眠り、眠りて以て夢みるものは仙島卽ち海中の神山のみなり、清晨禮道經經は誦すべきものなるに禮と云ふ、禮拜するは誦と其の信を同じうするものなり、道經は道士の經、猶ほ佛經と云ふが如し、道德經とすれば『老子』五千言なり、黍苗侵野徑黍は字音「ショ」字訓「キビ」大暑を以て之を種う、故に「ショ」の音を出す、稻の屬、人の食物とす、其のキビの苗が生長して野徑を侵略するなり、桑椹汚閒庭椹は音「シン」桑の子なり、其の桑の子が落ちて閒庭を汚す、侵と謂ひ、汚と謂ひ、前首と同じく諷諭の意を寓すること知るべし、眞に道を修するの

士ならば、桑椹なぞ庭に栽ゑざるなり、黍苗も無用に屬す、然るに司空圖は眞に道を修する人にあらずとは言はざるも、世外の道を修する人にあらざること分明なり、虛中は方外の觀察良とに能く當る、肯要爲鄰者爲鄰の二字では兒童には解し難し、善鄰を爲すものなり、肯は可なり、善鄰を爲す者は無要なりとの意なり、ナゼ善鄰を爲す者は無要なりやと云ふに、西南太華青西南の方角に當つて、太華山色の青くして秀づるを見るが故に、此の外にクダラヌ鄰を爲す者はイラヌことなり、中條山より太華山を日日望むを得る、太華山は五岳の第一なること論ずる要なし、已前共に八首、

送成州程使君

岑參

程侯新出守　好日發行軍
江樓暗寒雨　山郭冷秋雲
程侯新たに出でて守たり、好日行軍を發す、命を拜して時人淡み、官を能くして聖主聞く、江樓寒雨暗く、山郭秋雲冷なり、竹馬の諸童子、朝朝使君を待たん、

【句釋】 成州は同慶府なり、程は姓、使君は日本の知事なり、知事と爲つて行くを送るなり、程侯新出守知事に新任せられ行くなり、侯は侯爵の侯と同じけれど、爵と限らず、卿とか君とか云ふの類なり、好日發行車誤謬無けんことを欲して好日を擇び、都城より成州へ向ふ、拜命時人羨此の使君と爲るは官人の榮譽、人の皆羨む所と爲る、能官聖主聞人に有能卽ち用ふるに足る人と、無能卽ち用ふるに足らざる人とあり、官と爲るの才能を程は有するを以て聖主も其の名を能く聞き知らるるなり、江樓暗寒雨、山郭冷秋雲二句十字其の赴任する途上の所見を叙す、竹馬諸童子程が赴任する成州は卽ち程が故鄉にて其の竹馬の友多きなり、童子と云ふと雖も、昔しの童子にて今の童子にはあらざるなり、朝朝待使君達官名士を出すは、鄉里の詑りと爲す所、今其の鄉里の友が大官と爲つて此に來る、何ぞ待たざるを得ん、古注に曰く後漢の郭伋、嘗て幷州の牧と爲る、素より恩德を結ぶ、復幷州の牧と爲る、始めて至るとき、兒童數百あり、各の竹馬に騎つて、道次に於て拜迎すと、今程使君も亦郭伋の如きなり、

漢陽卽事　　儲光羲

楚國千里遠　孰知方寸違　春游歡有客　夕寢賦無衣

江水帶氷綠　桃花隨雨飛　九歌有深意　捐珮乃言歸

楚國千里遠し、孰か知らん方寸の違ふことを、春游有客を歡び、夕寢無衣を賦す、江水氷を帶びて綠に、桃花雨に隨つて飛ぶ、九歌深意あり、珮を捐てて乃ち言に歸らん、

【句釋】 漢陽は今日の湖北省なり、儲光羲は山東省兗州の人、開元の進士、中書より監察御史と爲り、祿山が亂に捕へられ其の僞官を授けらる、肅宗の祿山を平らぐるに及んで、其の僞官を受けたる罪に依つて漢陽に流さる、此の詩卽ち漢陽謫居中の作とす、卽事の二字漢陽の題目の大に適せずと思はるるも、今日改めがたし、楚國千里遠長安と漢陽とは遠きこと千有餘里、孰知方寸違方寸卽ち胸中の思ひ違ふ、思ひの違ふは我が本志にあらざるを云ふ、祿山の膝下に拜して、其の僞官を受くる如きは固より我が本志にはあらず、勢の止むを得ず此に至る、然るに今謫居して此に住す、方寸悉く違ふ、其の本志は孰か之を知らん、春游歡有客俗語に「世ノ中ハ客ノ來ル程ウルサキハ無シ」などの語あるも、一方に又「客遠方ヨリ來ル亦樂シカラズヤ」の語もあり、孤獨の寂莫を慰むる者、客に如かず、春日客來る豈歡ばざるを得ん、夕寢賦無衣

『毛詩』に無レ衣無レ褐の語あり、春は春の衣、秋は秋の衣ありて、人生は始めて安し、然るに春に春衣なく、秋に秋衣なく、冬に冬衣無きときは、我の悲しみ畢竟如何ぞや、夕寢の文字に依て知る、滿足の臥具なきなり、無衣の哀詩を賦せざるを得ず、江水帶氷綠曉來の景色、昨夜は悲哀の中に寢たるも今朝起きて見れば、漢陽の水、已に春、氷を融解して流す、其の色綠なり、桃花隨雨飛岸上の桃花は已に盛時を過ぎ、雨に隨がつて紛紛飛ぶ、九歌有深意楚の屈原、國の爲め悲愁し九歌を作る、九歌の數に就て異論ある、東皇太一、雲中君、湘君、湘夫人、大司命、少司命、東君、河伯、山鬼、國殤、禮魂、天問、此の十二章ありて以て九歌と稱するは、湘君、湘夫人は一、大司命、少司命は一、天問は別として、九の數となる、又篇數を論ぜず、九は陽數の極なればなりと論ずる者あり、要するに悉く諷諫を寓し、徒らに文字を潤飾するものにあらざれば深意ありと爲す所以、捐珮乃言歸官を罷めて鄉に歸るが可との意を云ふ、九歌に「余ガ珮ヲ遺ク澧浦」「余が玦ヲ捐ク江中」の語あり、珮は官服、平民の服にあらず、屈原が昔し瀟湘に謫せられしと、我が漢陽に謫せられしと同一なりと爲すの意、素隱は解して曰く此の詩を肅宗が讀まば憫れに思うて召さるるとあらん、然らば吾は乃ち京へ歸ることを得んと、大に誤る、乃言歸の文字は『毛詩』より出でて其の鄉里に歸るの意なり、京は客中にて其の鄉里の兗州と

は異なる、

酬劉員外見寄　嚴維

蘇耽佐郡時　近出白雲司
柳塘春水漫　花塢夕陽遲
藥補清羸疾　窗吟絕妙詞
欲識懷君意　朝朝訪檝師

【句釋】劉員外は劉長卿なり、劉長卿が嚴州の司馬と爲り、詩を嚴維に寄す、此の詩を以て和酬せしなり、蘇耽は古の神仙、桂陽の人、郡の判刺卽ち今日日本の裁判官と爲りし事あり、以て今長卿に比す、佐郡時佐は「タスク」郡の政治を佐くるなり、近出白雲司近は今長卿を云ふ、白雲司は刑部の官、卽ち秋官なり、今長卿が裁判官より行政官に移るを云ふ、司馬は秋官にあらず、行政官なり、藥補清羸疾長卿は身體虛弱の人なりしなり、清羸は身の「ヤセツカレタル」なり、疾は病氣と見るにあらず、身體の意味に見よ、衞生上平常に注意して怠たらざるを

云ふ、窗吟絶妙詞窗を以て藥の字に對す、窗に憑つて口吟する詞は皆絶妙なり、長卿の詩は眞に絶妙なり、柳塘春水漫、花塢夕陽遲嚴維が自分の住する桐廬の實景を叙せしなりとの說を爲すものあり、或は長卿が住處の景を云ふものなりとの說を爲す、嚴維が眼前の景を見て、以て長卿の嚴州も亦同じからんと想像するなり、漫は水の多く滿ちたるなり、遲は日の長きなり、欲識懷君意我が君を懷ふの意は自分以外に誰か知るぞと言はば、他にあらず、朝朝訪檝師我は日日水邊に出でて君の住する嚴州の方を望む、そは檝師卽ち船頭の知る所、君が船頭に問ひ玉はば必ず我が君を懷ふの深き心を知らん、訪は問と同じ、

別至弘上人

最稱弘偃少　早歲草茅居　年老從僧律　生知解佛書
衲衣求壞帛　野飯拾春蔬　章句無求斷　時中學有餘

最も稱す弘偃少しと、早歲より草茅に居る、年老いて僧律に從ひ、生まれながらにして佛書を解す、衲衣壞帛を求め、野飯春蔬を拾ふ、章句求斷なし、時中學餘りあり、

【句釋】別は離別、至弘は傳未詳、上人は『維摩經』に出で、僧に對する敬語、猶ほ先生と云ふが如し、最稱弘偃少僧は行と住と坐と臥とを四威儀と稱す、此の四威儀は僧家には非常に大事の法とす、偃は卽ち臥なり、至弘は偃すること少なきを以て、人が弘偃少と異名を付せしなり、早歲草茅居早歲より大伽藍に住する如き俗僧にあらずして、眞の佛法を修習して草茅に居住する、住も亦正しきなり、年老從僧律僧には戒律あり持せざるべからず、比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒、沙彌の八戒、在家の五戒等、老に及ぶも破るを得ず、僧律に從ふとは是れなり、『僧祇律』と云ふ大部の書物もあり、生知は二字にて「生レナガラ」と訓む、解佛書佛書と云うても意義廣大なり、華嚴も天台も法相も皆佛書なり、何と指さず泛く大藏經の理を解釋する才ありと見るべし、衲衣求壞帛布の衣を衲衣と云ふ、絹布と反對、絹布は律の禁ずる所、壞は壞色と熟字して、純なる白や紫や紅と反對、種種の色を壞し盡くして、土の如き色に染るを云ふ純紫、純綵は官僧の事にて、持律の僧の著衣にあらず、又佛陀世尊も著け玉はざりしものなり、產婦が用ひし惡衣の類を雜碎して以て製せし袈裟を僧の最第一の貴重品とす、此の上人、此の袈裟を著用す、野飯拾春蔬食物も美味なるを食へば、食慾が出でて修道者の害と爲る、是を以て野飯卽ち疎末なる食物を取つて僅かに生命を支ふ、百姓などが捨てたる春蔬を拾うて以て食

す、持律の高僧の所業なり、章句無求斷斷は斷案、是は是なり、非は非なりと決するを斷と云ふ、別に他に向つて其の斷を求むる無く、佛經の一章片句の義理を自ら解通する、時中學有餘時中は儒書に出る語、佛書の方から之を言へば、隨時に當る、隨時隨意にして、學問の力餘りあるなり、他人の孜孜兀兀として勉力するもの、到底上人には及ばざるなり、

送王牧往吉州謁史君叔　李嘉祐

細草綠汀洲　王孫耐薄游　年華初冠帶　文彩舊弓裘
野渡花爭發　春塘水亂流　史君憐小阮　應念倚門愁

細草汀洲に綠なり、王孫薄游するに耐へたり、年華初めて冠帶す、文彩舊弓裘、野渡花爭ひ發き、春塘水亂れ流る、史君小阮を憐むとも、應に倚門の愁を念ふべし、

【句釋】吉州は春秋には吳に屬し、戰國には楚に屬す、今日の湖南省長沙府なり、史君叔は王牧が叔父なり、史君は使君と同じ、吉州の牧民なり、細草綠汀州春に逢うて汀州卽ち水國も細草の爲め色綠なり、王孫耐薄游王姓なるを以て王孫艸に譬ふ、素隱は薄游を解して薄官にして

游ぶと叙したるが然らず、薄は「コヽニ」と訓む、此の吉州卽ち古の楚地に游ぶとなり、年華初冠帶冠帶は日本に當れば元服と云ふ事なり、今日は元服の禮廢したるも余が幼童時代は猶ほあり、今王の年正に少年なり、文彩舊弓裘『莊子』に弓人の子は先づ裘を爲ることを學ぶ、文彩は俗語の「立派」と云ふ意味に見よ、王牧は立派に父や叔の業を襲ぐ人なりとなり、野渡花爭發道中所見の景、春塘水亂流道中所見の景、野花を小人の榮華を詑るに譬へ、氷が融けて春水の亂れ流るるを君の恩もかくべしと譬ふと素隱は云ふ、一時流行の解釋法、今用ひざるなり、史君憐小阮晉の阮咸は叔父の阮藉に對して世に小阮と云ふ、史君叔が其の姪の王牧を憐むは猶ほ阮藉が阮咸を憐む如くに思ふなるべし、應念倚門愁『戰國策』に王孫賈の母賈に謂て曰く、汝朝に出で晚に來る、吾は門に倚りて汝を望むと、其の子の還りを待つなり、途中無事なりや否やを愁ふるが親の情なり、今は叔父の情なり、此の叔父の愁を念ふべしとなり、

送章彝下第　綦毋潛

長安渭橋路　行客別時心　獻賦溫泉畢　無媒魏闕深
黃鶯啼就馬　白日暗歸林　三十名未立　君還惜寸陰

長安渭橋の路、行客別時の心、賦を溫泉に獻じ畢つて、魏闕の深きに媒す

るなし、黄鶯啼いて馬に就き、白日暗に林に歸る、三十にして名未だ立たず、君還寸陰を惜め、

【略傳】綦毋潛は荆南の人、字は孝通、開元中に宜壽の尉より集賢院待制に入る、右拾遺に遷さる、著作郎に終ふ、

【句釋】進士試驗に落下して歸る人を送る、長安渭橋路古注に秦、漢、唐共に渭水に架せり、凡そ三橋咸陽縣の西十里を便橋と名け、漢武帝の造る所、咸陽の東南二十里の中渭橋は、始皇の造る所、萬年縣の東四十里を、東渭橋と名く、何れの造る所を知らずと、行客別時心行客が此の渭橋を渡る時の心情は如何となり、今行客は章彝其の人を指す、獻賦溫泉畢『開元傳信記』に玄宗溫泉宮に在りしとき、劉明霞なる者あり、「溫泉賦」を獻ず、帝覽て之を奇とし、命じて五角の文字を六張と改めしむ、對て曰く、臣此の賦を草する時、神助あり改むるを願はず、上顧みて曰く眞の窮薄なりと、遂に及第せず、章彝の及第せざるを以て此の事を引用す、無媒魏闕深鄭可農が曰く象魏闕なり、天門を魏闕と云ふ、此の天門に登る媒介者は章彝に於て人無しとなり、黄鶯啼就馬、白日暗歸林鄉に還る途中の所見、黄鶯の啼き、白日の暗き、下第者の心腸を斷つものならずや、而かも作者は下第者を慰むる意厚きなり、及第者の名を記して標するに黄

色の榜を以てす、一名鶯榜と云ふ、然らば歸に臨み、鶯が馬に就て啼くは、秋期には必ず及第せん前兆なり、膽を落す勿れと勵ますの意を含む、三十名未立三十にして名立、孔子の敎ふる所、章彝は三十而かも名立ず、自他共に悲しむ、君還惜寸陰大禹は寸陰を惜む、又聖人は尺璧を貴ばず、尺寸の陰を重んず、時の得難くして失し易きを以てなり、歸國後は讀書三昧、怠る勿れと戒しむるなり、

空寂寺悼元上人　錢起

悽然雙樹下　垂涙遠公房　燈續生前火　爐添歿後香
陰堦明片雪　寒竹響空廊　寂滅應爲樂　塵心徒自傷

悽然たり雙樹の下、涙を垂る遠公の房、燈は生前の火を續ぎ、爐には歿後の香を添ふ、陰堦片雪明かに、寒竹空廊に響く、寂滅應に爲樂たるべし、塵心徒らに自ら傷む、

【句釋】空寂寺は未詳、元上人も未詳、僧の死を順世と云ふ、蓋し悼むは卽ち順世なり、順世の字を用ふべからず、悽然雙樹下『涅槃經』に如來、拘尸那城雙樹の間に入滅すと、二千八百

年の前、印度に在つて佛陀が入滅し玉へる事を以て上人に比するにはあらず、雙樹の字を借用せしのみ、素隱は曰く、此の句は不都合なりと、肯て不都合にあらざるなり、垂涙遠公房晉の惠遠法師を以て比す、是れは曾て異議なし、燈續生前火素隱曰く上人の常住せる房を見るに、影前に燈火を點す、此の上人存生の時に、不斷燈を點せられた、其の燈火は其の儘に續けらる、然れどもこは表面の解釋にて裏面の解にあらず、裏面の解は上人入寂すると雖も、其の法燈を傳ふる者は猶ほ在りとなり、此の裏面の解を以て上乘とす、爐添沒後香表面の解は沒後弟子輩が香を焚き、影前に供するなるが、裏面の解は寂後に愈よ其の德香の高きを云ふ、陰堦明片雪片雪又雪片、片に意義なし、一箇と云ふが如し、寒竹響空廊風に依て竹響を聞く、寂滅應爲樂『涅槃經』の偈に生滅滅已、寂滅爲樂の語あり、或人曰く、死して樂土へ生るるを樂しと爲すと、大に誤る、涅槃那を證すれば、亦苦無きを云ふ、煩惱の永く滅して、復妄想せざるを云ふ、塵心徒自傷聖者は應に寂滅を以て樂と爲すべきも、一切の凡人は上人の寂滅して再び其の敎を受る能はざるを悲しむ、大悟せざるが故に傷む所以なり、

送曹椅　　司空曙

青春三十餘　衆藝盡無如　中散詩傳畫　將軍扇賣書

楚田晴下雁　江日暖多魚　惆悵空相送　歡游自此疎

青春三十餘、衆藝盡く如くなし、中散詩畫に傳へ、將軍扇書を賣る、楚田晴れて雁を下し、江日暖にして魚多し、惆悵空しく相送る、歡游これより疎ならん、

【句釋】曹椅が吳興に赴くを送る詩なり、青春三十餘少年を青春と云ふ、人を以て期節に比すれば、三十以前は春なり、三十以後五十に至るまでは夏なり、五十以後七十に至るまでは秋なり、七十以後は冬なり、衆藝盡無如多能なること誰も及ぶもの無きなり、中散詩傳畫晉の嵇中散は四言五言詩共に巧なり、顧愷之なる一代の名畫師あり、中散の詩を愛誦して、詩意に因て其の圖を畫く、曹椅も亦顧愷之の如き人に遇はんとなり、將軍扇賣書晉の王羲之卽ち右軍は會稽の山陰に在りし時、老嫗扇を持し來りて書を乞ふ、右軍乃ち筆を執つて淸風來ニ故人一の五字を書す、老嫗此の扇を以て高價に賣る、後乞ふ右軍與へず、將軍は王右軍の事なり、曹椅が詩書雙絕なるを謂ふ、楚田晴下雁、江日暖多魚晴と謂ひ、暖と謂ひ、雁も魚も共に得意なるを云ふ、楚田も江日も共に吳興の地なり、楚と吳と地理相接す、江は吳江なり、惆悵は悲しみ痛むなり、

空相送悲痛するも留まる能はず、悲痛の功無きが故に空しきなり、歡游自此疎君去つて後は吾と歡游する者少なしとの意なるか、或は君と今後歡游することは疎くならんかと、前說を以て可とすべし、

送金華王明府

韓翃

懸舍江雲裏　心閒境自偏　家資陶令菊　月俸沈郎錢
黃蘗香山路　青楓暮雨天　時聞引車騎　竹外有銅泉

【句釋】金華は隋の縣揚州東陽郡、唐江南道婺州、今日の浙江省金華府なり、王は姓、明府は知事なり、懸舍江雲裏金華は浙江省としては海に遠く山に近き地、然れども小江は有り、故に江雲の裏に懸舍在りと云ふ、心閒境自偏金華の地たる、嘉興府や杭州府や台州府と異なる、聊か偏境たるを免れず、然れども此の句は其の偏境なりと指したるにはあらず、心が閒なる故に境も自然と偏境に在る如く閒なるを云ふ、淵明の五字を閒と遠と易へしのみ、家資陶令菊家の

財產を家資と云ふ、其の財產は何であるかと問へば陶令が如く菊を種うるのみ、月俸沈郎錢古注に曰く梁の沈約、嘗て婺州に官たり、故に云ふ月俸は沈郎錢と、按ずるに晉の元帝初めて吳を過ぐ、吳興の沈充、小錢を鑄る、之を沈郎錢と謂ふ、此れ豈誤まつて沈郎を以て沈東陽と爲すか、作者は沈充を以て王に比したるや、又沈約を以て比したるやと云ふに、沈姓同じきを以て二意を含むものならん、誤にはあらざるなり、黃蘗香山路是れ途中の景、黃蘗は樹の名黃色に染め藥に入る、一名を黃柏と云ふ、僧に黃蘗禪師あり、此の句と關係無し、香山は楚地に在り、青楓は字の如く青き楓葉なり、地名にはあらず、或は云ふ暮雨は地名にあらず、香山も地名ならず、地名と暮雨と何ぞ對するを得ん、「香バシキ山路」なりと、此の說是ならん、蓋し香山なる山無きにあらず、是も途中の景、時聞引車騎、竹外有銅泉古注に『異苑』を引て曰く、婺州の五百人湖は吳の時、軍出でて土を破り銅釜を得たり、之を發すれば水便ち瀑出す、王明府が金華にて淸閒の時、車騎に乘りし人の來るやと始め思ひしも、靜かに考ふれば是れ車騎にあらずして、銅泉の流るる聲ならんとは、竹外は字の如く竹林外なり、

和張侍郎酧馬尙書

韓愈

來朝當路日　承詔改轅時　出領須句國　仍兼少昊司

暖風抽宿麥　清雨捲歸旗　賴寄新珠玉　長吟慰我思

來朝當路の日、詔を承けて轅を改むる時、出でて須句の國を領じ、仍つて少昊の司を兼ぬ、暖風宿麥を抽んで、清雨歸旗を捲く、賴に新珠玉を寄す、長吟我が思を慰む、

【略傳】韓愈字は退之、鄧州南陽の人、其の先は蓋し河東の人、年二十五にして進士と爲る、貞元八年壬申なり、張建封、府の推官に辟し監察御史に遷さる、貞元中に山陽の令に貶せらる、元和の初、權りに國子博士を知す、河南の令に拜せらる、職方員外郎に遷さる、再び封溪の尉に貶せらる、復博士と爲る、刑部侍郎に遷さる、潮州の刺史に貶せらる、又袁州の刺史に改めらる、召して國子祭酒に拜す、穆宗、吏部侍郎に轉ず、又京兆尹兼御史大夫と爲る、復吏部侍郎と爲る、長慶四年に卒す、年五十七、禮部尚書と贈す、謚して文と曰ふ、或は云ふ元和十四年卒す、年四十七、

【句釋】張は姓、侍郎は官名、馬は姓、尚書は官名、馬尚書が始め詩を作り以て張に寄す、張は詩を作りて馬に和す、韓は更に張に和せしなり、來朝當路日來朝とは天子の命に應じ參內す

るを云ふ、其の參內の時を指して當路日と云ふ、馬尚書が鄆州の守護たりしが、朝命に依つて尚書に移りたるなり、承詔改轅時詔書を賜うて來朝の當日、改めて復鄆州の守護と無り來轅を回して行くなり、轅は車なり、出領須句國出の字、本集再に作る、須句城は鄆州須城縣の西北に在り、地志に所謂句城は壽昌の西北に在り、國名記に曰く京相璠が云ふ須句一國三城兩名のものは誤なり、蓋し句城は須句の故地と爲す、而して須城は乃ち秦の置く所、須昌は須句城の北に在り、後唐、諱を以て改めて須城と曰ふのみ、句は音郇なり　仍兼少昊司少昊は秋官、今日日本の司法官なり、尚書が本官にして、少昊卽ち刑部尚書が兼官なり、暖風抽宿麥是れ任に赴く期節を云ふ、麥は大小の二あり、冬種る夏收むるを以て宿と云ふ、青青たるを抽と云ふ、清雨捲歸旗暖日の風を以て清明の雨に對す、清明の節雨俄かに降る、歸旗を捲く所以なり、賴寄新珠玉尚書を寄せられたる詩を賞して新珠玉と云ふ、咳唾珠玉を成すの江淹が語に依て云ふ、長吟慰我思尚書の詩を長吟して以て我が所思を慰むるなり、

送董卿赴台州　張蠙

九陌除書出　尋僧問海城　家從中路挈　吏隔數州迎

夜蚌侵燈影　春禽雜櫓聲　開圖知異迹　思想石橋行

九陌除書出づ、僧を尋ねて海城を問ふ、家は中路より挈へ、吏は數州を隔てて迎ふ、夜蚌燈影を侵し、春禽櫓聲を雜ふ、圖を開いて異迹を知る、思想す石橋の行、

【句釋】台州は唐代江南道に屬す、今日浙江省に屬す、九陌除書出九陌は宮禁を云ふ、日本の如く普通の町街と見る者は誤る、現官より新官に移ることを除と云ふ、其の辭令書を以て都を出るなり、尋僧問海城台州府には天台山あり、是れ一州の大本山にして國清寺なる伽藍あり、常に法華經を說て人に敎ふ、董卿が此州の知事と爲るからには、此の寺の大和尙を訪問して以て法を聞くべし、海城は素隱は海國の城と解したるが然らず、梵海城の意、卽ち寺なり、家は細君なり、從中路挈董卿の今出る所は都門なれども妻は都門に在らず、其の鄕里に立ち寄りて以て攜へ行かんと云ふ、董の語に依て句を成す、吏隔數州迎州の屬官等は知事の來任を迎ふる爲め遠方へ出で以て迎ふるなり、夜蚌侵燈影蚌は蛤なり蜃なり「ハマグリ」なり、老て珠を產する者、周禮に之を貍物と謂ふ、海上にて必ず此の蚌が光を放つて、船中の燈影を侵すを見玉

ふべしとなり、侵は雙方共に同じく光なるを以て燈光は蚌光の爲め其の光を失するを云ふ、春禽雜櫓聲櫓聲が軋軋と響く其の聲に雜はる禽聲とすれば、水禽なること勿論なり、開圖知異迹天台山の圖を開きて以て其の靈異の境なるを知るなり、思想石橋行思想は送る者張螾が想像するなり、天台山の石橋は天下の壯觀、今董が此の石橋を渡る態を想ふなり、已前十一首

過香積寺　王維

不知香積寺　數里入雲峯　古木無人徑　深山何處鐘
泉聲咽危石　日色冷青松　薄暮空潭曲　安禪制毒龍

【句釋】過は卽ち訪なり、香積寺は處處に在るが、此の香積寺は長安子午谷の北に在るもの、郭子儀が長安を收めし時此の寺に陣すと云ふ、不知始め寺の所在を知らず、今訪はんと欲して數里入雲峯雲の深き峯に入るも猶未だ寺を認めざる也、古木無人徑一本に古路無人迹に作る、古木は多く有るも人の行くべき徑無し、深山何處鐘香積寺より出づる鐘聲なることは知ると雖

も、寺を見ざるゆゑ、何處の鐘と云ふ、泉聲咽危石泉聲が咽ぶとは何ぞ、泉が滾滾と流るる反對、卽ち危石に當るが故に聲が「フサガル」塞るなり、又呑むなり、聲の外部に發せざるを云ふ、日色冷青松日影が青松に當れば、其の光冷然たるを覺ゆ、薄暮空潭曲、安禪制毒龍寺を認めて寺に入るも僧衆を見ず、是に於て薄暮に至りて空潭卽ち水頭に歩して見れば、此の潭曲に在りて果して僧衆卽ち安禪が毒龍を制伏して居りしなり、安禪は坐禪にあらず、高僧を稱して云ふ老僧を老禪と稱するが如し、

送友人尉蜀中

故友漢中尉　請爲西蜀吟　人家多種橘　風土愛彈琴
水向昆明闊　山通大夏深　理閒無別事　時寄一登臨

徐晶

故友漢中の尉、請ふ西蜀の吟を爲さん、人家多くは橘を種ゑ、風土愛して琴を彈ず、水は昆明に向つて闊く、山は大夏に通じて深し、閒を理して別事なくんば、時に一登臨を寄せよ、

【句釋】徐晶は開元十年の進士、其の傳は詳ならず、尉は武官の稱、蜀中は成都府の役人と

爲りて赴くなり、故友は舊友、漢中尉漢中は卽ち成都なり、請爲西蜀吟蜀へ行く故友を送るなれば蜀中の事を吟じて以て其の行を壯にせんとなり、人家多種橘橘は橙「ダイダイ」柚「ユヅ」の類にして蜜柑も亦同類なり、蜀中多く種う、風土愛彈琴風土は猶ほ風俗と言ふが如し、漢の司馬相如は蜀の人、善く琴を彈ず、之を彈じて卓氏の女を動かしし事あり、今相如を以て友人に比せしにはあらず、唯蜀の風習之れありと云ふなり、水向昆明闊昆明は西南夷に屬す、此の昆明に滇池あり、又『異物志』に滇池は建寧の界に在り、水の周廻二百餘里、漢の武帝は之に倣うて長安に池を鑿り以て舟游す、蜀の水は昆明に通ずと云ふ詩意なり、山通大夏深大夏とは印度を云ふ、雪山山脈は以て此の蜀へ通ずるなり、理閒無別事清閒無事なるを理閒と云ふ、何の用事も無きときは、時寄一登臨昆明にも臨むべし、大夏にも登るべし、以て見聞を廣め玉ふべしとなり、

與諸子登峴山

孟浩然

人事有代謝　往來成古今　江山留勝迹　我輩復登臨
水落魚梁淺　天寒夢澤深　羊公碑尙在　讀罷一沾襟

人事代謝あり、往來古今と成る、江山勝迹を留む、我輩復登臨す、水落ち

て魚梁淺く、天寒うして夢澤深し、羊公碑尚在り、讀み罷んで一たび襟を沾す、

【句釋】 峴山は湖北省襄陽府に在り、作者孟浩然も此の襄陽の產、是を以て諸友と同じく登臨して羊祜を弔せしなり、晉の羊祜は賢者なり、嘗て從事鄒湛と峴山に登つて泣を垂れて曰く、宇宙有つてより便ち此の山あり、由來賢達勝士此に登つて遠望する者多し、皆湮沒して聞ゆる無し、湛が曰く公は德四海に冠たり、道前哲に嗣たり、令聞令望、當に此の山と俱に傳ふべし、湛の輩の若きに至りては乃ち公が言の如き耳と、人事有代謝代謝ありは生死ありと言ふが如し、往來成古今往く者は古と成り、來る者は今と成る、幾千萬年の前も後も此の死生代謝を運轉するのみ、而して其の運轉の瞬息なること電の如し、江山留勝迹此の山江漢の間に在るを以て江山と云ふ、人事は代謝あるも、江山の勝迹は依然として變せず、變せざるを普通なりと云ふにはあらず、羊公の舊迹を保存に志す人多ければなり、我輩復登臨古は羊公登臨す、今日は我輩登臨す故に復なり、水落魚梁淺山上より臨み見るの景、秋水落ちたる處、水淺ければ魚梁卽ち「ヤナ」と云ふ魚を捕ふる道具が見ゆるなりと素隱は解したるが、非常に誤まる、襄陽には魚梁洲あり汚水中に魚梁あり、龐德公の居る所、一名白沙曲、士元は漢の陰、南白沙に在り、

司馬德操が宅は洲の陽に在り、天寒夢澤深雲夢澤は荊州府に屬す、而かも襄陽の峴山より之を望むを得、華容も枝江も江夏も安陸も皆此の地なり、羊公碑尚在襄陽の百姓羊公の德を慕うて碑を建て廟を立つ、讀罷一沾襟其の碑を望む者流涕せざるは莫きを以て杜預、因て墮淚碑と名く、孟も亦此の意を云ふ、一の字、一本に淚に作る　附羊祜詳傳

羊祜字は叔子、泰山南城の人、世吏二千石なり、祜に至る九世、並に清德を以て聞ゆ、祜年五歲の時、乳母をして弄する所の金環を取らしむ、乳母の曰く、汝先より此の物なし、祜卽ち鄰人李氏の東垣桑樹の中に詣り、之を探り得たり、主人驚て曰く、此れ吾が亡兒の失する所の物、云何ぞ持去す、乳母具さに之を言ふ、李氏悲惋す、時人之を異として、李氏の子は、卽ち祜が前身なりと謂ふ、祜博學にして能く文を屬す、魏の高貴鄕公の時、公車に徵され、中書侍郎に拜す、晉の武帝吳を滅さんとする志あり、祜を以て都督とし軍事を掌らしむ、出て南夏を鎭す、征南大將軍南城侯に累進す、卒して大傅を贈る、初め善く墓を相する者あり、言ふ祜が祖の墓所、帝王の氣あり、若し之を鑿たば則ち後無けん、祜遂に之を鑿つ、相する者見て曰く、猶折臂の三公を出さん、祜竟に馬より墮ち臂を折る、仕へて公に至るも子無し、祜山水を樂しみ、風景毎に必ず峴山に造り、置酒言詠して終日倦まず、

寄邢逸人　鄭常

淡君無外事　日與世情違　地僻人難到　溪深鳥自飛
儒衣荷葉老　野飯藥苗肥　若問湖邊意　而今憶共歸

淡む君が外事なくして、日に世情と違ふことを、地僻にして人到り難く、溪深くして鳥自ら飛ぶ、儒衣荷葉老い、野飯藥苗肥たり、若し湖邊の意を問はば、而今共に歸らんことを憶ふ、

【句釋】鄭常は傳未詳、肅宗の時の人なり、邢は氏、逸人は自稱語なり、羨君無外事、日與世情違と云ふ二字の中には、人間の千態萬狀悉く網羅す、何の代何の世も多數は愚民なり、此の愚民と伍し和するは逸人の爲さざる所、是を以て世情とは日に日に疎遠と爲る、背違と爲る、地僻人難到、溪深鳥自飛逸人が住する土地の實況を云ふ、不便の地は人が到らず、幽溪の深きは鳥自ら飛ぶ、鳥は害を避くる故、人は利と爲らざる故、儒衣荷葉老、野飯藥苗肥逸人なりと雖も赤裸にて生を送る能はず、食はずして身を保つ能はず、是を以て衣るには芰荷を以て製したる服あり、食するには藥苗の肥たるものを以てす、尋常世人の衣食には慾あり、逸人の

衣食には慾なきなり、若問湖邊意唐人の詩を集めたる本に『又玄集』一卷あり、其の集に依て見ると此の五字を疇昔江湖意とあり、逸人より鄭常に問ふの語なり、君も僕と同じく世情と違うて、江湖散人たらんと言はれたるが、若し其の事を實行し玉ふならば、而今憶共歸我と同じく故山に歸隱し玉ふべしと憶ふなり、歸隱を欲せざるは其の意世中に在ればなり、

吳明徹故壘　劉長卿

古臺搖落後　秋日望鄉心　古寺人來少　雲峯水隔深
夕陽依舊壘　寒磬滿空林　惆悵南朝事　長江獨至今

古臺搖落の後、秋日望鄉の心、古寺人の來ること少なり、雲峯水深きを隔つ、夕陽舊壘に依り、寒磬空林に滿つ、惆悵す南朝の事、長江獨今に至る、

【句釋】吳明徹故壘の五字、『全唐詩』には秋日登吳公臺上寺遠眺寺卽陳將吳明徹戰地に作る、今の題五字簡を以て勝る、揚州江都縣の西北四里、陳將吳明徹字は通紹、秦郡の人、陳の鎭前將軍と爲る、宣帝五年に衆十萬を統て齊を伐つ、大に齊軍を破る、王琳を擒にし之を斬る、十年に周人齊を滅さんとす、明徹に詔して軍を督せしめ之を伐つ、周の將王軌、兵を引て夏口に

據る、長圍を結び、鐵鎖を以て車を貫ぬきて水に沈む、明徹の舟潰え、周の爲めに執へられ、憂憤して卒す、古臺搖落後明徹が昔し據りし臺なれば古臺と云ふ、秋日なれば木葉搖落す、秋日望鄉心劉長卿は河間の人、今淮西の觀察使と爲つて此に來る、豈懷鄉の心無からんや、古寺人來少本集に古を野に作る、野を以て宜しとす、野は田野の野にあらず、荒寺の意味なり、雲峯水隔深水を隔てて雲峯はあり、人の來る少なる所以、必ず弔古の心ある人のみ來る、俗人の特に來る處にあらず、夕陽依舊壘、寒磬滿空林曉日と雖も舊壘は寂寥たり、況や夕陽に於てをや、磬は寺僧の鳴らす物、其の響きが空林に滿つるなり、寒色に作るを可とする素隱の說は今取らざるなり、磬聲なるを以て一層の寂寥を感ずる、惆悵は「イタム」なり、南朝事揚州の地は宋齊梁陳隋悉く都したる處、此に都したる天子は罪業消滅の爲め大抵寺を造立したるもの、南朝の四百八十寺、何人も知らざるものあらんや、其の寺が南朝亡びて唐の世に移るや、忽ち衰態を呈して今や見るに忍びざるなり、長江獨至今吳公臺下を流るる長江のみ依然として其の變せざるを見る、

送樊兵曹謁潭州韋大夫　李嘉祐

寒鴻歸欲盡　北客始辭秦　零桂雖逢竹　瀟湘少見人

江花鋪淺水　山水暗殘春　脩刺轅門裏　多憐爾爲親

寒鴻歸つて盡きんと欲す、北客始めて秦を辭す、零桂竹に逢ふと雖も、瀟湘人を見ること少なり、江花淺水に鋪き、山水殘春に暗し、刺を脩す轅門の裏、多くは憐む爾が親の爲めにすることを、

【句釋】樊は姓兵曹は官名、謁は上長に會見するに用ふるの語、潭州は河南省に屬す、韋は姓、大夫は官名、樊が韋の部下と爲つて潭州に赴くを送るなり、寒鴻歸欲盡春將に盡んとするの候、鴻も亦歸り盡きんとす、北客始辭秦北客は樊を指す、樊は本北人なるも鄉貢生として長安に在り、然るに今潭州に赴く爲め長安卽ち秦を辭す、雁は北歸し、人は南行す、零桂雖逢竹零は零陵、桂は桂陽、此の二地江南に屬して竹多し、北地には竹少なし、寒地を嫌うて暖地を愛するが竹の性なればなり、瀟湘少見人瀟と湘との間に於ては知己に逢ふことは少れなり、瀟湘は人多く住せず、寂寞の地なりと解する勿れ、江花鋪淺水瀟湘淺水の邊には水に浮ぶ花錦を鋪くが如くならん、山木暗殘春山木の暗きは樹木が鬱蒼たればなり、脩刺轅門裏名刺を呈出するを脩刺と云ふ、古代は紙なく竹木を削りて其れに姓名を書き、以て謁見する、軍門を轅門と云ふ、

名刺を韋大夫の軍門に俯めて以て謁見を求むるなり、多憐爾爲親親を養ふ爲め祿仕するなり、自己の安泰を求むる爲ならず、多くの人は之を憐むも決して卑しめずとなり、後漢の毛義字は少節、廬江の人、家貧うして孝行を以て稱せらる、南陽の張奉其の名を慕うて往て之を候す、坐定まつて府檄適に至る、義を以て守令と爲す、義檄を奉じて入り、喜顔色に動く、奉は志尙の士、心に之を賤しむ、自ら來るを恨み固辭して去る、義が母死するに及んで、官を去て服を行ふ、數ば公府に辟せども至らず、張奉歎じて曰く、賢者固とに測るべからず、往日の喜は乃ち親の爲めに屈するなり、所謂家貧親老ゆれば官を擇ばずして仕るものなり、樊兵曹の心事、亦此の毛義に異ならずとの意を含むなり、

西郊蘭若　　羊士諤

雲天宜北戸　塔廟似西方　林下僧無事　江淸日正長

石泉盈掬冷　山實滿枝香　寂寞傳心印　無言亦已忘

雲天北戸に宜し、塔廟西方に似たり、林下僧無事、江淸うして日正に長し、石泉掬に盈ちて冷に、山實枝に滿ちて香し、寂寞として心印を傳ふ、無言

亦已に忘る、

【句釋】西郊蘭若は四字寺名なるや、又西郊の蘭若なるや分明ならず、西郊に游んで看し蘭若の意ならん、蘭若の事は前に辨せり、雲天宜北戸寺の位置が宜しきを云ふ、日本の比叡山が王城の鎭護に當つて立てたりと云ふ如く、北向きに位置を取つて、長安城に向ふ、其の建築の宜しきを云ふ、塔廟似西方寺中に立てたる佛塔も祖廟も其の建築樣法は西域に法を取りたるもの、西域の建築方法に依ると見るべし、林下僧無事僧は林下に於て坐禪外無事なるを言ふ、僧の無事なるは眞僧にて、僧の有事なるは俗僧なり、江淸日正長無事なるが故に日長きなり、有事なれば日は短かきなり、石泉盈掬冷掬とは掌にて水を汲むことなり、巖石の間より出る水を掬すれば盈即ち「ミツ」掌中に一杯と爲つて冷を覺ゆ、山實滿枝香山樹の實所謂栗や柿の類が熟して枝に滿ち香氣の逼るを覺ゆ、寂寞傳心印寂寞は下の無言に對す、無言なるが故に寂寞なり、寂寞なるが故に無言なり、心印を傳ふと云ふは眞實の法を傳ふと云ふことなり、心を以て心に傳ふ、而して其の誤まらざるを以て印の字を付す、印は認可證明するなり、僧も之を傳へ今我も之を傳ふ、無言亦已忘無言を以て無言に答ふるが最上乘にて、無言を以て有言に答ふるは尙ほ未だ至るものにあらず、而して無言も亦忘れざるべからず、無言の文字に執する者は、

亦有言と同じ、箇中の妙理容易に知り難し、

送普門上人

皇甫冉

華宮難久別　道者憶千燈　殘雪入林路　深山歸寺僧
日光依嫩草　泉響滴春氷　何用求方便　看心是一乘

華宮久しく別れ難し、道者千燈を憶ふ、殘雪林に入るの路、深山寺に歸るの僧、日光嫩草に依り、泉響春氷を滴す、何ぞ方便を求むるを用ひん、心を看る是れ一乘、

【句釋】普門上人が自分の住房に歸るを送るなり、華宮難久別上人の意を云ふ、上人は華宮即ち寺と久しく別れて他國に在るは許さざる所、是の故に寺には歸らざるべからず、道者憶千燈道者とは求道者の事にて即ち上人なり、上人の常に憶ふ所は千燈に在りて他にあらず、一燈も千燈も其の光は蓋し同じ、是を以て千燈を憶ふとは其の道即ち佛法の明らかなるを憶ふ事なり、佛に千燈を供養するにはあらざるなり、殘雪入林路、深山歸寺僧時正に初春にて、其の歸路には殘雪あり、其の行路を愼しめよとの意なり、日光依嫩草依は即ち照すなり、嫩草は萌え出で

たる草、佛敎にては草座を貴む、是を以て之を出す、泉響滴春氷泉の響きは春氷を解きて流るを知る、何用求方便は佛敎で「テダテ」と云ふ、「テダテ」を用ひて以て法に入らしむる者は畢竟鈍根の機類なり、利根の者は何ぞ方便を借らん、始めより一乘の道に入るなり、『法華經』に「正直ニ方便ヲ捨テ」とある、看心是一乘佛敎は總て心外無別法なり、心の外に別に一物もあるなし、是の故に佛道を修學せんと欲する者は、此の無形の心を觀ずるを以て第一とす、達磨の慧可に敎へて心を將ち來れと命じたるも是れ大乘の通法なればなり、是一乘とは俗語の第一番と云ふが如し、一乘の法と見ても亦通ず、

送耿處士

賈島

一瓶離別酒　未盡即言行　萬水千山路　孤舟幾日程
川原秋色盡　蘆葦晚風鳴　迢遞不歸客　人傳虛隱名

一瓶離別の酒、未だ盡さざるに即ち行かんと言ふ、萬水千山の路、孤舟幾日の程、川原秋色盡き、蘆葦晚風鳴る、迢遞として不歸の客、人は虛隱の名を傳へん、

【句釋】耿は姓、處士は朝に仕へざる人の稱、一瓶離別酒、未盡卽言行賈島は今長安に在つて此の處士が行を送る、送別の燕を設けて、一日の懽を盡くさんとす、而かも其の一瓶の酒も懽も十分盡さざるに處士は早出立せんと言ふなり、萬水千山路、孤舟幾日程前路の遠きを云ふのみ、川原秋色盡本集には盡を靜に作る、盡は二字重なるを以て、靜の字遙かに好、蘆葦晚風鳴讀んで字の如し、迢遞不歸客一たび去つて復城中へ來らざる人、不歸は長安城中へ歸らざる客なり、人傳虛隱名凡俗は耿處士が人間に未練なく、今日去て後復來らざることを知らずして、却て言ふ、是れ一時歸る人にて、必ず城中を慕うて來るべしと、所謂虛隱の人、眞隱の人にあらずと思ふもの多し、島は其の眞隱たる事を知るなり、

春喜友人至山舍

鳥鳴春日晚　喜見竹門開　路自高巖出　人騎瘦馬來
折花林影動　移石澗聲回　更欲留深語　重城暮色催

周賀

鳥は鳴く春日の晚、喜び見る竹門の開くを、路は高巖より出で、人は瘦馬に騎つて來る、花を折れば林影動き、石を移せば澗聲回る、更に深語を留

めんと欲すれば、重城暮色催す、

【句釋】周賀初め僧たり、後歸俗す、此の詩僧たりし時の作とす、春日友人が山房を訪ふを喜んで作りしもの、鳥鳴春日晚、喜見竹門開山舍の春日靜かなる晚に、悠然と竹門の開くを見る、開く者は友人なり、竹門ゆゑ客が來りて外より開くなり、路自高巖出人騎瘦馬來客の來る狀態を云ふ、瘦馬なるが故に來る者は道人なり、肥馬の客にはあらず、以て迎ふべきなり、折花林影動、移石澗聲回友人と共に游戲する、山中に住する者は必ず此の實況を知らん、石を移すは必ず溪水を渡らん意味ならず、溪谷に於ては此の游戲を爲す、水が東より西に移り、西より東に移り、興味の盡きざるものあり、更欲留深語折花移石の游畢りし上、更に留めて深語卽ち詩なり法なりの玄話を爲さんと欲するも、重城暮色催山又山の重なりて城の如く固めたるを重城と云ふ、重城は名詞にあらざるなり、暮色の已に催すを如何ともする無し、

龍翔喜胡權訪宿　　喻凫

林棲無異歡　煑茗就花欄　雀啄北窗晚　僧開西閣寒
衝橋二水急　扣月一鐘殘　明發還分手　徒悲行路難

林棲異歡なし、茗を煑て花欄に就く、雀は啄む北窗の晩、僧は開く西閣の寒、橋を衝きて二水急なり、月を扣いて一鐘殘る、明發還手を分つ、徒に悲む行路の難、

【略傳】　喩鳧字は坦之、毘陵の人、開成の進士、烏程の令に卒す、

【句釋】　龍翔は寺號なり、唐河南道虢州、今日の河南省陝州靈寶縣南四十里に在り、建立の年月未詳なるも、大本山にして古今住する者は悉く名僧とす、特に元代蒲室大訢の住せしを以て名を馳す、道園の『學古錄』雁門の『雁門集』等に龍翔寺の名多く見ゆ、喩鳧が此の寺に寓せし時、胡權が來訪を喜んで作るものなり、林棲無異歡折角來訪せられたるも、馳走する物は何にも無しとの意、煑茗就花欄茶を烹て以て花園の欄干に就て座を設くるなり、雀啄北窗晩、僧開西閣寒正に宿せんとする晩日に雀が食を求む、客を遇せんと欲して僧は西閣の窗を開くも寒し、衝橋二水急、扣月一鐘殘素隱の說に依れば、龍翔寺に十境ありて、此の二句は卽ち其の二なりと、二條の水が橋を衝くこと甚だ急、一鐘の響きが月を扣き出して其の聲に餘韻あり以て殘と云ふ、明發還分手此の夜は語り明したるも明發には分手する、分手する以後は、徒悲行路

難此の夜は世事を忘れて愉快に談話したるも、分手後は還人生の行路難を悲しまざるべからず、心中甚だ悲しむ所ありしものの如し、

秋晩郊居　任蕃

遠聲霜後樹　秋色水邊村　野徑無來客　寒風自動門
海山藏日影　江石落潮痕　惆悵高飛晩　年年別故園

遠聲霜後の樹、秋色水邊の村、野徑來客なし、寒風自ら門を動かす、海山日影を藏し、江石潮痕を落す、惆悵高飛晩く、年年故園に別る、

【句釋】　秋晩郊居野外郊居の作、遠聲霜後樹霜を經たる樹は落葉の爲め其の聲を遠く聞く、秋色水邊村耳に入る聲と、眼に入る色と、共に是れ秋聲なり秋色なり、共に是れ寂寞なり、野徑無來客、寒風自動門郊居隱遯の人訪ふ者無き筈なるに、門を動かすものあり、氣が付きて知る是れ寒風なることを、海山藏日影、江石落潮痕住居する處海に近し、而かも前面に山あり、常に日影を藏くす、而して潮の退くときは江石より潮水の落つるあるのみ、惆悵高飛晩此の郊居に棲住するの晩かりし事を惆悵するなり、卓茂曰く「寧ロ能ク高ク飛ビ遠ク擧リ人間ニ在ラザ

ランヤ」と、年年別故園隱棲の好きを平常に說き乍ら、其の實行を爲さずして今日に至るまで故園に別れしを悔ゆるなり、

友人南游不レ還　于武陵

相思春樹綠　千里各依依　鄠杜月頻滿　瀟湘人未レ歸
桂花風半落　煙草蝶雙飛　一別無二消息一　水南蹤跡稀

相思春樹綠なり、千里各依依、鄠杜月頻に滿つ、瀟湘人未だ歸らず、桂花風半ば落ち、煙草蝶雙び飛ぶ、一別消息なし、水南蹤跡稀なり、

【句釋】友人南游不還此の詩は于武陵が妻の作とす、武陵が集に此の詩ありしを以て錯つて武陵の作とす、武陵が商洛巴蜀の間に往來して久しく還らず、妻之を戀うて作る、是の故に友人とあるも良人の意味に見るべし、相思春樹綠相思樹と稱する樹あり、和名を「タウアヅキ」と稱す、傳說に昔し人あり邊地に死す、其の妻之を思うて樹下に哭死す、因て以て名くと、嶺南に多くあり、高さ丈餘白色、其の葉槐に似たり、春に及んで葉正に綠なり、千里各依依千里を隔たり情に耐へざるを依依と云ふ、鄠杜月頻滿鄠縣と杜縣となり、共に今日の陝西省に屬す、

妻の住する方、歲月流水の如く、早や已に中秋と爲る、瀟湘人未歸瀟湘は今日の湖北省に屬す、良人の客と爲る地、桂花風半落相思樹の綠なる時別れて今は早や秋日の桂花正に落つ、而かも良人は猶未だ還らず、煙草蝶雙飛草の上に煙生ず、此の邊を蝶が雌雄雙び飛ぶ、妾の獨棲の感良人は知るや知らずや、一別無消息、水南蹤跡稀水南は瀟湘を云ふ、瀟湘が旅行先きなるに消息も來らず、其の蹤跡も判然として瀟湘に在るや否やを知らざるなり、

夜泊二淮陰一　項斯

夜入二楚家煙一　煙中人未レ眠　望來淮岸盡　坐到酒樓前
燈影半臨レ水　箏聲多在レ船　乘レ流向東去　別レ此易レ經レ年

夜楚家の煙に入れば、煙中人未だ眠らず、望み來れば淮岸盡き、坐ながら到る酒樓の前、燈影半ば水に臨み、箏聲多く船に在り、流に乘じて東に向ひ去らば、此を別れて年を經易からん、

【句釋】淮陰は唐の淮南道楚州、今日の江蘇省淮安府淸河縣東南五里とす、今日黃海の射陽港口に夜泊せしなり、夜入楚家煙、煙中人未眠古の楚國卽ち淮陰なり、楚國の人家の煙を認めて

船を入る、其の時人家は猶未だ眠らず、望來淮岸盡、坐到酒樓前舟を下らず直ちに料亭の前に達するなり、燈影半臨水、箏聲多在船夜泊して船中より見る所の景、海岸の實況知るべし、乘流向東去潤州の丹徒縣は項斯の赴任する所、此の潤州に向ふ途中此に夜泊するなれば、明日は去て此に向はざるべからず、別此易經年此の地と離別して再泊するは復何年なるやを知らず、感慨深きなり、

秋夜宿淮口　景池

露白草猶青　淮舟倚岸停　風帆幾處客　天地兩河星
樹靜禽眠草　沙寒鹿過汀　明朝誰結伴　直去泛滄溟

【句釋】景池は傳未詳、南國の人にして鄉貢生として長安に來るも下第して故鄉へ還る時、此の詩を作るならんと云ふ、淮口は江蘇省の揚州なり、露白草猶青草の青さは露の白きが爲め一

層明かに見える、淮舟倚岸停岸に倚らざれば舟停る所なし、露は君に譬へ、草は小人に譬へ、淮舟は自身の漂泊、僅かに岸に倚つて身を繫ぐに譬ふとの裏面の解も要するに誤まらず、風帆幾處客東西南北より舟にて集まる客、何の用なるや、何人なるやを知らず、天地兩河星天の銀河と、地の河海と、擧目俯目悉く星光なり、樹靜禽眠草、沙寒鹿過汀岸上の樹には禽眠るなり、沙汀の邊には鹿が食を求むる爲め來るなり、明朝誰結伴旅は道連れ古今東西別なし、明日此を去て他に向ふ伴を爲す者は誰ぞや、直去泛滄溟滄溟の廣き、一人の行は甚だ寂し、伴を求めんと欲する所以なり、

村行　姚揆

天淡雨初晴　游人恨不勝　亂山啼蜀魄　孤棹宿巴陵
影暗村橋柳　光寒水寺燈　罷吟思故國　窗外有漁罾

天淡くして雨初めて晴る、游人恨勝へず、亂山蜀魄啼き、孤棹巴陵に宿す、影は暗し村橋の柳、光は寒し水寺の燈、吟を罷めて故國を思ふ、窗外に漁罾あり、

【句釋】　姚揆は傳未詳、村行の題目では單に叙景に過ぎざる如く見ゆれども、詩に依て案ずるに感慨深きものの如し、下第して故國へ歸り、又京へ上るとき、巴陵に旅泊して此の詩を作ると前人の解あり、或は信ならん、天淡雨初晴天の濃かなるは雨の爲め、天の淡なるは晴れたるが故なり、游人恨不勝恨の一字に無限の味あり、恨の恨たる所以は以下の句を生ず、亂山啼蜀魄「ホトトギス」の不如歸去と啼く聲を聞く、其の聲亂山の中より出づ、之を聞く何を以て勝へん、孤棹宿巴陵蜀魄は畢竟自ら啼くのみならんも、我は孤舟一棹の身、今巴陵に宿泊し旅寓の感に勝へざるなり、影暗村橋柳、光寒水寺燈巴陵宿泊中見る所の景、村橋に在る柳は枝繁ければ影暗く、水寺に在る燈は水に映ずる故光寒し、罷吟思故國、窗外有漁罾此の詩を作り自ら吟じ罷めて其の心は故國に移る、而してフト窗外を見れは漁罾が挂けてある、鄕國の狀愈よ目に彷髣たり、

題甘露寺

香門接巨壘　畫角間清鐘　北固一何峭　西僧多此逢
天垂無際海　雲白久晴峯　旦暮然燈外　潮頭振蟄龍

曹松

香門巨壘に接し、畫角清鐘に間はる、北固一に何ぞ峭なる、西僧多くは此に逢ふ、天は垂る無際の海、雲は白し久晴の峯、旦暮然燈の外、潮頭蟄龍を振す、

【句釋】　甘露寺は夏口に在り、香門接巨壘香門は寺門と同じ、寺門と巨壘卽ち石頭城址と接するなり、畫角間清鐘清鐘は寺中より出るもの、畫角は巨壘より出るもの、其の聲が混じて聞えるなり、北固一何峭北固山は他に勝れて一山峭絶なり、寺は此の北固山に在るなり、西僧多此逢西竺の僧は漢土に來り多くは此の寺に寓す、天垂無際海寺門より望む所の景色、今日の黃海卽ち是れ寺門より望む所、雲白久晴峯峯上は雨少なきを以て久しく晴る、雲挂りて常に白し、旦暮然燈外佛敎に然燈佛と稱する佛あり、今此の句は佛名を言ふにはあらず、字の如く寺にて且暮燈を然すなり、蓋し佛陀の事も全く關せずとは言ふべからず、潮頭振蟄龍潮の滿る時は龍神が蟄龍を振して寺門に向つて龍燈を獻ぜんとなり、此の燈を獻ずるは寺に安ずる佛陀に供養せんとするに在り、已前十七首

前實後虛

周弼曰く前聯は景にして實、後聯は情にして虛、前聯重くして後聯輕きは多く弱に流る、唐人此の體最も少なし、必ず妙句の易ふべからざるを得て、乃ち其の格に就けり、蓋し發興盡るときは、則ち繼ぐに難し、後聯稍や間ふるに實を以てせば、其れ庶からん乎、

今周弼の此の言に對し、一一批評せず、實と謂ひ、虛と謂ひ、前論に已に盡くせり、

秋夜獨坐　王維

獨坐悲雙鬢　空堂欲二更一　雨中山菓落　燈下草蟲鳴
白髮終難變　黃金不可成　欲知除老病　唯有覺無生

獨坐雙鬢を悲む、空堂二更ならんと欲す、雨中山菓落ち、燈下草蟲鳴く、
白髮終に變じ難し、黃金成すべからず、老病を除くを知らんと欲せば、唯無生を覺るに在り、

【句釋】秋夜獨坐他人に在つては凡題なり、輞川に在つては好題なりと知れ、獨坐悲雙鬢獨と

雙と字を對す、鬢を左右に分つ故雙なり、其の雙鬢の白くなるを悲しむ、空堂欲二更空と二と字を對す、自身以外に人無し、空堂なる所以、一夜を五更に分てば二更は今日の午後十時なり、雨中山菓落、燈下草蟲鳴此の二句は所謂景にして實なるもの、獨坐寂寥として冥目する、時雨は蕭蕭と灑ぎ其の中に於て山菓の落る聲あり、又青燈の下を見れば何處より來るや知らず草蟲が啾啾と鳴く、白髮終難變、黃金不可成此の二句は所謂情にして虛なるもの、一旦黑髮が白髮と成つた後は遂に復變化すべからず、「白髮ハ終ニ黑髮ト變ジ難ク」の意なり、土は土なり、土を以て黃金と成すべからず、「土石ハ遂ニ黃金ト成ス可ラズ」の意、土を握つて金と化し、白髮を變じて黑髮と成す類の事、印度の外道にも漢土の仙術にも其の法は傳ふ、而かも眞の法にあらずして、俗を欺むく惡法なり、以て天子の仙術を喜ぶものを諷す、欲知除老病、唯有覺無生生と老と病と死とを佛家に四苦と稱す、今其の二苦を出す、此の老病を除くことは人間としても又生物としても、絕對に能はざる所、而かも是を除くの法あり、他にあらず、佛道の精髓を領得するにあり、精髓とは何ぞ、曰く唯無生法忍を覺るにあり、『仁王經』に伏忍、順忍、信忍、無生法忍、寂滅法忍の五忍を出す、其の第四の忍を證得すれば、老も苦にあらず、病も苦にあらず、皆是れ因緣所生の法と知るが故に、病の當相本來空なりと觀ず、本來空なれば卽ち苦もあるべ

き筌なし、是の玄理を證得する者は始めて無生を覺る人と言ふなり、

秋夜汎舟

林塘夜汎舟　蟲響荻颼颼　萬影皆因月　千聲各爲秋
歲華空復晩　鄉思不堪愁　西北浮雲外　伊川何處流

劉方平

林塘夜舟を泛ぶ、蟲響荻颼颼たり、萬影皆月に因り、千聲各秋の爲めなり、歲華空しく復晩る、鄉思愁ふるに堪へず、西北浮雲の外、伊川何れの處に流る、

【句釋】秋夜汎舟汎は泛と同じ、林塘夜汎舟林塘に舟を汎ぶ、大河にあらざるなり、蟲響荻颼颼有情の蟲も鳴き、非情の荻も風の爲め颼颼と音を爲す、共に林塘の景、萬影皆因月、千聲各爲秋目に入る種種の影は皆天の一月に因る、耳に入る種種の聲は皆時の秋なるが爲めなり、歲華空復晩、鄉思不堪愁春夏秋冬四季の中、秋晩は已に歲華の盡きるに近きなり、異鄉に寓泊するもの其の鄉愁に堪へざるなり、西北浮雲外長安城より方角を定むれば鄉里の河南は西北に當る、其の西北も浮雲が重なるなり、伊川何處流河南を流るる川を伊川と稱す、之を望むも見る

べからず益す愁ふる所以なり、

春日臥病書懷

楚客經年病　孤舟人事稀　晩晴江柳變　春夢塞鴻歸
今日方知命　前年自覺非　不能憂歲計　無限故山薇

劉商

楚客年を經て病む、孤舟人事稀なり、晩晴江柳變じ、春夢塞鴻歸る、今日方に命を知る、前年自ら非なるを覺る、歲計を憂ふること能はず、限り無し故山の薇、

【略傳】劉商字は子夏、徐州彭城の人、進士と爲り、貞元中、比部員外郎に累官す、後出で汴州觀察判官と爲る、疾を辭して印を挂けて歸り鄉に老ゆ、

【句釋】楚客經年病楚國の產ゆゑ楚客と云ふ、徐州は古の楚國なり、他鄉に在つて多年病む、孤舟人事稀一身を孤舟に比す、東西南北定處なければなり、尋常人の爲す事は我が如き病者には稀なり、晩晴江柳變此の變は衰ふる變ならず、盛んなる方の變なり、春夢塞鴻歸夢を一本暮に作る、春の暮と見るも、春は一夢と過ぎてと見るも共に支障なし、塞鴻の歸るを見て愈よ我

が臥病の身を悲しむ、今日方知命、前年自覺非年」が今日五十に成つたと言ふにはあらず、五十の今日漸く天命を知りしと言ふなり、蘧伯玉は五十にして四十九年の非を知る、今借用して我が事に用ふ、「方ニ今日ノ命ヲ知リ、自ラ前年ノ非ヲ覺ル」の義なり、不能憂歲計故園へ還るも生活は憂ふるに足らずとの意なり、何故に憂へざるやと云ふに無限故山薇故郷の山には薇が無限に生ず、何ぞ活計の道を憂へん、伯夷叔齊の二人は首陽山に隱れ薇を採つて食ふ、此の二人は周の粟を食ふを嫌ふ爲めなり、我は官祿を食むを嫌ふ爲めなり、

林館避暑

池島清陰裏　無人泛酒船　山蜩金奏響　華露水精圓
靜勝朝還暮　幽觀白已玄　家山正如此　何不賦歸田

池島清陰の裏、人の酒船を泛ぶるなし、山蜩金奏響き、華露水精圓なり、靜勝朝還暮、幽觀白已に玄、家山正に此の如し、何ぞ歸田を賦せざる、

【略傳】羊士諤は貞元元年の進士、順宗の時、宣歙巡官に至る、王叔文に惡まれて汀州寧化縣尉に貶せらる、

【句釋】林館避暑寧化に在つて作る所、池島清陰裏、無人泛酒船風景佳なりと雖も、僻地は人の游ぶなし、自分以外に此の池島に於て酒船を泛べる者一人も無し、山蜩金奏響蜩は「セミ」金の如き聲を發して鳴く、花露水精圓花に湛ふる露は水晶の如く圓かなり、靜勝朝還暮『老子』に以レ靜勝レ熱の語あり、今の句玄理を說くにあらず、字の如く靜かに勝を看て朝還暮を送るなり、幽觀白已玄幽地に居て四方を游觀して樂しむを幽觀と云ふと解したる說は淺し、昔し漢の揚子雲は、玄尙ほ白しと稱したるが、我は反對に白が玄と爲ると解する方深し、幽觀卽ち世事と競爭の念なき故に白髮が却つて黑髮と變ずるを覺ゆと見るべし、家山正如此我が故郷の山の景色も、風情も此の林館の如くなるべし、何不賦歸田張衡は昔し歸田賦を作りて故山へ歸りたり、我も早く歸田賦を作らんとなり、

柏梯寺懷舊僧

雲根禪客居　皆說舊吾廬　松日明金像　苔龕響木魚
依棲應不阻　名利本來疎　縱有人相問　林間懶拆書

雲根禪客の居、皆說く舊吾が廬と、松日金像に明かに、苔龕木魚響く、依

司空圖

棲應に阻てざるべし、名利本來疎なり、縱ひ人の相問ふあるも、林間書を拆くに懶からん、

【句釋】柏梯寺は華州に在り、昔し道士あり華州の山谷間に於て登仙せんと欲す、遂に柏樹を以て輪材と爲し、登り去る、華州に車箱谷あり此の寺此に在り、司空圖は再游して舊時會ふ所の僧を懷うて此の詩を作る、雲根禪客居石の異名を雲根と云ふ、石邊は禪客卽ち僧の居房がある、皆說舊吾廬寺中の僧が皆司空圖の爲め說く是れ君が嘗て寓せし房なりと、松日明金像松間の日光は佛殿中の金像卽ち佛陀の身形を明かに照して見ゆ、而かも舊時の僧は在らざるなり、苔龕響木魚龕は石の竅穴なれば中に於て木魚を叩く、其の音が響くなり、木魚は六朝以後漢土にて始めて製せし佛具の一種、印度傳來にはあらず、依棲應不阻此の句は字の如く當面より解すれば義理分明を缺く、裏面より解すれば玄理を含む、裏面の解とは何ぞ、古來の注太だ善、曰く佛家の上にては不生不滅が眞の法門なれば、今日は影堂に其の身を置くが、昔し法を說きて此の寺に依棲せられしも、生死に於て一如、決して生死に阻せられず、過去も未來も自由の境界ならんとなり、生死解脫の高僧なりと言ふなり、名利本來疎名を求むる欲も、利を欲する念も此の僧はモトヨリ薄疎なりしなり、縱有人相問、林間懶拆書此の二句は容易に解し難し、素

隱曰く、我が舊知の僧は此の苔龕の中に儼然として居る、然らば此を去つて後、文を進上して互に相問ふべけれども本より名利を嫌ひたる人なれば、今は林間の龕塔の中にて、書を拆きて見ることむづかしく思しめさん」書簡の往復が何ぞ名利の事と關せん、愚注に近し、又人の說に結句は起句を結べるもの、起句の舊吾廬と答へし僧は司空圖の尋たる禪師の弟子なるべし、是亦師の僧と同じく悟道に入りしものと見なし、名利本來疎にして世に求むる事のなきものなれば、人と交はる事も、累しと思ふなるべし、縱ひ人より文通などありて相訪問することあるも、昔の如く高堂に棲むわけにはあらず、林間に僅かの小廬を結んで居る者なれば、他より來る書を拆き見るも甚だ懶きことならんと司空圖より察して云へるなり、此の說愈よ拙、一一の文字に拘泥したる結果此の如く錯誤の說を爲すものなり、要するに僧に問ふにあらず、人が司空圖に問ふなり、君が柏梯寺に入つて舊僧を懷ふ情は如何と司空圖は答へてソンナツマラン事は、尋ぬるに及ばず、尋ぬる者の愚なり、我はソンナ愚問を爲すものに答ふるに懶しとなり、結句は作者自身にかかり、他に係るものにあらず、

早春

傷懷仍客處　病眼却華朝　草嫩侵沙短　氷輕著雨消

風光知可愛　客鬢不相饒　早晩丹丘伴　飛書肯見招

懷を傷めて仍ほ客處す、病眼却つて華朝、草嫩くして沙を侵して短く、氷輕くして雨を著けて消ゆ、風光愛すべきを知る、客鬢相饒さず、早晩丹丘の伴、書を飛ばして肯て招かれん、

【句釋】傷懷仍客處懷を傷ましむる所以は自己の爲めならず、古注にある如く黄巢の亂後、昭宗は華州に在り、司空圖を召して兵部侍郎と爲す、足疾を以て自ら乞ひ聽されて還る、還ると雖も一念君を懷ひ國を憂へざるは無し、是を以て客寓中、一念天下の事に及べば、傷懷何ぞ堪へんや、病眼却華朝聽されて還らんと欲する時の作なれば、天子も自身も今華州に在るなり、此の華州に客寓中、病眼と爲る、生憎や此の病眼の時、一年中第一好期の早春に出會したり、惜い哉病眼にて分明に見る能はざるなり、佛敎に病眼空華の語あり、眼が病ある故に華なきに華を認むるの事、今は是と異なる、草嫩侵沙短庭前の實景を叙す、嫩は俗語の「若キ」なり、沙を侵して出でたるも其の芽は猶ほ短なり、氷輕著雨消池中の實景を叙す、氷も已に融解して池中に浮で而かも雨の爲めに消流する、風光知可愛早春の景色は人間に譬ふれば正に少年少女

なり、正に愛すべきを知る、而かも客鬢不相饒は多なり、風光の少女は愛すべしと雖も、我が白髮の多きを如何せんと悲しむなり、早晩丹丘伴早晩は「イツカ」と訓む、仙人の住處を丹丘と云ふ、以て朝廷に譬ふ、朝廷に仕ふる舊友を指して伴と云ふ、飛書肯見招司空圖に書を寄せて君も朝廷へ再仕して天下の爲め盡くし玉へと招くなり、

江行

地闊分吳塞　楓高映楚天
行紀添新夢　羈愁甚往年
何時京洛路　馬上見人煙

地闊分吳塞曲塘春盡雨　楓高映楚天方響夜深船
行紀添新夢夜の深くる船、行紀新夢を添へ、羈愁往年より甚し、何れの時か京洛の路、馬上に人煙を見ん、

【句釋】江行此の詩は素隱禪師の解に曰く、王凝が宣歙觀察使爲りしとき、辟して幕府に置く、召して殿中侍御史に拜せらる、凝の府臺を去るに忍びずして、劾せられ左遷す、主簿盧相攜朝に還るとき、陝虢を過ぎ、司空圖を訪ふ、深く愛重して詩を留めて曰く、氏族司空貴し、官班御

史雄なり、老夫如し且つ在らば、未だ途窮を嘆ずべからず、就て觀察使盧渥に屬して曰く、司空御史は高士なり、渥遂に表して僚佐と爲す、攜執政たり、召して禮部員外に拜して、尋で郎中に遷さる、是に由りて之を觀れば、宣歙の間より陝虢の方へ左遷せらるる時に、吳楚の間を通るとて此の詩を作りたるものならん、地闊分吳塞古吳の土地廣闊にして、其の塞を設けし處多きなり、楓高映楚天楚と吳とは所謂一江を隔つのみ、今見る楓樹の高くして楚天に映ずるを、曲塘春盡雨塘の曲りし處花落ちるを以て春の盡きる雨の爲めなるを知る、方響夜深船方響は樂器の名、鐵を以て之を爲くる、長さ九寸、廣さ三寸、上を圓にして下を方にす、船に在る役人輩が夜警を爲す爲めに之を吹く、行紀添新夢行紀は紀行なり、紀行文なり、我が紀行文には外の事は書かず、唯每夜善夢を見る、今夜は昨夜より尙ほ善夢を見る、卽ち添ふる所以なり、羈愁甚往年羈は旅なり、旅中の愁は往年より今年は一層甚だしとなり、其の故は榮轉にあらずして左遷なればなり、何時京洛路、馬上見人煙今日左遷せられて江行の詩を作るが如きも、是ぞ止むを得ず、然れどもイツカ京洛卽ち長安城中の人と爲つて、馬上に於て京の人家の炊煙の盛んなる狀を見ることができるやらとなり、感慨の深き尤も結句にあり、

春日

李咸用

浩蕩春風裏　徘徊無所親　危城三面水　古木一邊春
衰世難行道　花時不稱貧　滔滔天下者　何處問通津

浩蕩たる春風の裏、徘徊親む所なし、危城三面の水、古木一邊の春、衰世道を行ひ難し、花時貧に稱はず、滔滔たり天下の者、何れの處か通津を問ん、

【句釋】李咸用は隴西の人、傳未詳、浩蕩春風裏春風は私無く、東西南北悉く春風裏に在るを云ふ、浩蕩は廣大を形容するなり、徘徊無所親此の廣き春風の裏を徘徊するも、一人も自分の知己には逢はずとなり、危城三面水是れ隴西の實況とす、危は孤危傍らに物無きを云ふ、而して城外見る所は何ぞ、三面皆水のみ、要害堅固なると知る可し、古木一邊春首を回らして一方を見れば唯古木あるのみ、衰世難行道人慾の私が衰世に降るに隨つて多くなる、上代聖人の盛世とは異なる、道行ひ難き所以、花時不稱貧花時に花を賞するは所謂「花ヨリ團子」にて、花は價を要せざるも、團子は價を要す、其の團子を購ふ遂に貧には及ばざる所、故に花時は高貴の人に稱うて、貧賤の者には稱はず、滔滔は多數の形容、天下者、何處問通津『論語』に曰く、

長沮と桀溺と耦して耕す、孔子之を過ぎ子路をして津を問はしむ、桀溺曰く子は誰と爲す、曰く仲由と爲す、曰く是れ魯の孔丘の徒か、對て曰く然り、曰く滔滔たる者天下皆是なり、而して誰とともに之を易へんや、天下の者皆惡事を謀りて善事を修せず、果して孔子の如く道の通津を問ふ者はあるまじとなり、

雲居長老　王貞白

嶽路躡雲上　來參出世僧　松敲半巖雪　竹覆一溪氷
不說有爲法　非傳無盡燈　了然方寸內　應祇見南能

【略傳】王貞白字は有道、乾寧二年の進士、後校書郎と爲る、

【句釋】雲居は寺名、江州に在り、長老は僧に對する敬語、雲居寺の首座長老なり、嶽路は山路なり、躡雲上、來參出世僧出世僧とは高僧と云ふが如し、山路を躡み來りて以て參謁するもの

のは世間を超出する高僧なり、松敲半巖雪半巖の雪積む處、孤松獨敲つ、竹覆一溪氷一溪氷りて水流れず、而して其の溪上を竹が覆ふ、共に巖冬の景なり、不說有爲法世間の法は何事に依らず、總べて有爲の法なり、有爲の法は夢幻泡影、賴むに足らざるものなり、高僧は其の賴むに足らざる法は說かず、非傳無盡燈無盡燈は元來其の法の永く傳ふるを意味するもの、然るに今其の永く傳ふる法を傳ふるにあらずと云ふは、口を以て口に傳ふる法を傳ふるにはあらず、心を以て心に傳ふる法を傳ふるなり、自悟の法を傳ふる意味裏面にありと知る可し、了然は「ハツキリ」卽ち分明の事なり、方寸內胸を指して方寸と云ふ、長老の方寸何物をか存ずるや、應祇見南能南宗の惠能禪師を指して南能と云ふ、禪の第六祖にて達磨の眞法を傳ふる人、今此の長老は他のものを見ず、唯南能を見るのみ、見るは卽ち其の人を仰ぎ其の人を貴ぶ故なり、

送許棠　張喬

離鄉積歲年　歸路遠依然　夜火山頭市　春江樹杪船
干戈愁鬢改　瘴癘喜身全　何處營甘旨　波濤浸薄田

鄉を離れて歳年を積む、歸路遠くして依然、夜火山頭の市、春江樹杪の船、
干戈鬢の改まるを愁へ、瘴癘身の全きを喜ぶ、何れの處か甘旨を營まん、
波濤薄田を浸す、

【句釋】張喬は池州の人、後、九華山に隱る、許棠は宣州の人、許棠南國に往て、池州を過て張喬を訪ふ、此の詩を作り以て送る、離鄉積歳年故國を離れ他國に在る年月の久しきを云ふ、歸路遠依然今日漸く歸路に就く、而かも遠きこと依然たり、夜火山頭市道中所見の景山頭に當つて夜火を見るは卽ち山城の街市を知る、春江樹杪船山城より望めば船が樹杪に在る如く見ゆと解するは誤る、江水に遡るとき、船は漸漸と高くなり恰も樹杪を行く如く見ゆるを云ふ、蜀へ行きし人は皆其の實況を知るなり、干戈愁鬢改、瘴癘喜身全戰亂に際會して種種心痛するが故に鬢毛は次第に改まりて黑が白と成る、是を愁ふるも、幸に瘴癘卽ち風土病に出會するも自身は此の惡疫に罹らず是を免かる、喜ぶ所は此に在り、一憂一喜相互なるを云ふ、何處營甘旨甘旨は美味を云ふ、單に美味にはあらず父母に供する物を云ふ、歸來父母に獻せんと欲する物も戰亂後なれば是を營むに容易ならざるべしと解するが普通なるも、然るときは結句の意味

が全く消滅する、故に或人は許棠が父母を養ふことにあらずして、張喬が自身の事を叙するなり、折角君が歸りて我が鄉里の家を訪問されても、所謂、波濤浸薄田で少しばかりの我所有の田も波濤の浸す所となつて稻の收穫も有るまじ、然らば何の馳走することも出來ずと、薄田の文字は他人に向つて言ふ語にあらざることは普通なり、人の所有する田を薄田と云ふは例の無きこと、然れども案ずるに許棠が自ら云ふ所を張喬が代つて云うたと見れば、又通せざるにあらず、此の種種の辛苦、卽ち往も歸も許棠が不遇なることに逢ふ運命の人なりと解せば可ならずや、已前共に十首、

穆陵關北逢人歸漁陽　劉長卿

逢君穆陵路　匹馬向桑乾　楚國蒼山古　幽州白日寒
城池百戰後　耆舊幾家殘　處處蓬蒿遍　歸人掩淚看

君に逢ふ穆陵の路、匹馬桑乾に向ふ、楚國蒼山古り、幽州白日寒し、城池百戰の後、耆舊幾家か殘る、處處蓬蒿遍し、歸人淚を掩うて看ん、

【句釋】穆陵關は今日の河南湖北二省の境に屬す、沂州沂水龍山の北、漁陽は今日の直隸省

順天府密雲縣の西南三十里、劉長卿は吳仲孺の誣奏する所と爲つて姑蘇の獄に繫がれ、久うして潯州南中の尉に貶せらる、劉が爲め之を辯ずる者あり、睦州の司馬に移さる、此の詩、人は漁陽に歸り、自身は睦州へ赴く時の作なりと古注に見ゆ、眞に近し、逢君穆陵路、匹馬向桑乾我は睦州に行かんとし、君は漁陽へ歸らんとし、匹馬に鞭つて、桑乾に向ふ、突然として此に相逢ふなり、楚國蒼山古、幽州白日寒今二人相逢ふ處は古の楚國なり、四面皆山にして平處あるなし、人の歸る處の漁陽は是幽州なり、楚山は千年蒼蒼たるも、幽州は白日の氣寒きなり、白日の寒きは亂後の氣凄凄たるの謂なり、城池百戰後、耆舊幾家殘安祿山が戰亂の中心地は此の漁陽に在れば、城池百戰を經たること知るべし、或は戰歿、或は遁逃、漁陽の耆舊存する者果して幾家なる、處處蓬蒿遍此の地荒涼として眼に映ずるものは「ヨモギ」の遍く繁るのみ、歸人掩淚看肥地も瘦地と化す、淚を掩うて看るのみ、袂を面に當てて泣くことを掩と云ふ、

早行寄朱放

戴叔倫

山曉旅人去　天高秋氣悲　明河川上沒　芳草露中衰
此別又千里　少年能幾時　心知剡溪路　聊且寄前期

山曉けて旅人去る、天高うして秋氣悲む、明河川上に沒し、芳草露中に衰ふ、此の別又千里、少年能く幾時ぞ、心知剡溪の路、聊か且つ前期を寄す、

【句釋】早行は曉來早起して旅途に就くなり、此の時、朱放に此の詩を寄す、朱放は傳未詳、早行する者は戴叔倫なり、山曉旅人去旅人は戴自身を云ふ、越山の早曉に出發する、天高秋氣悲秋天は特別に高きものにあらず、秋は晴日特に高きを覺ゆるなり、秋氣は凄凄依て悲しきが如し、明河川上沒明河は銀河なり、銀河の影が川の水面に沒するなり、芳草露中衰芳草の文字多く春に用ふるものの如し、此の詩秋に用ふ以て例と爲すべし、秋の芳草も露の爲め衰るを看る、二句共に曉景なり、此別又千里、少年能幾時此の別離が千里を隔つる事となる、千里を隔つるは再會の期し難きを意味す、縱令ひ再會するも共に少壯の年にあらずして白首の人と爲るならん、心知剡溪路友人の事を心知と云ふ、心を許して知る所の者なればなり、心知卽ち朱放は今剡溪に居るなり、其の朱放が居る所を挨拶せずして通過する能はず、是の故に聊且寄前期前に我が行くことを報知するを寄前期と云ふ、聊且は日本語の先以てと云ふが如し、

陝州河亭陪韋大夫眺望

劉禹錫

雪霽太陽津　城池表裏春　河流添馬頰　原色動龍鱗
萬里思歸客　一盃逢故人　因高向西望　關路正飛塵

雪は霽る太陽津、城池表裏春なり、河流馬頰を添へ、原色龍鱗を動かす、萬里歸を思ふ客、一盃故人に逢ふ、高きに因つて西に向つて望めば、關路正に塵を飛ばす、

【句釋】陝州は今日の河南省河南府に屬す、靈寶、閿鄉、盧氏の三縣之に屬す、河亭は古注の如く河口に在る亭ならん、韋大夫は傳未詳、此の河亭に在つて二人が四方を眺望して此の詩を作る、雪霽太陽津陝州に太陽津あり、太陽關あり陝津とも茅津とも云ふ、此の津に於て雪の霽たる景を見る、城池表裏春見る所の景色、東西南北上下皆春ならざるは無し、河流添馬頰眺望する所の實景なり、馬頰は河の名、九河の一、德州安德縣の西南より出づ、句の意は氷結が融解したるを以て河の流れが增水すと云ふなり、原色動龍鱗而して一方、原野の面を見れば、雪解たる所、解けざる所あるを以て形容すれば龍鱗の如しとなり、萬里思歸客、一盃逢故人心唯歸を思ふのみ他事は思はず、何ぞ料らん故人卽ち舊友に逢うて途中の慰安を得たるや、一盃を

酌み交す中に萬里故鄉の遠きを聊か忘れたるなり、因高向西望、關路正飛塵酒を飲みながら高處に因て西天を望めば、正に是れ賊黨の姚令言や朱世などが長安を犯す爲め馬塵を揚げて亂るなり、就て記す此の篇は本集の題目は下の如く長し、陝州河亭陪韋大夫、雪後眺望、因以留別、與韋有布衣之舊、一別二紀、經遷貶而歸、陝州の河亭韋大夫に陪して雪後眺望す、因て以て留別す、韋と布衣の舊あり、一別二紀、遷貶を經て歸る、本集に色は野　思は獨　因は登に作る、

巴南道中　岑參

渡口欲黃昏　歸人爭渡喧
見雁思鄉信　聞猿積淚痕
渡口黃昏ならんと欲す、歸人渡を爭つて喧し、近鐘野寺に淸く、遠火江村に點ず、雁を見て鄉信を思ひ、猿を聞て淚痕を積む、孤舟萬里の夜、秋月論ずるに堪へず、

【句釋】巴南は四川省卽ち蜀に赴く途中なり、岑參は南陽の人、而して卒する所は蜀中なり、道中は一本舟中に作る、孰れにても可、渡口欲黃昏、歸人爭渡喧正に是れ渡口の實況、意味は

字の如し、歸人の二字を能く味ふべし、近鐘清野寺、遠火點江村渡口の喧爭に似ず野寺より出る鐘聲は良とに淸閑なる如し、江村に見ゆる燈火は亦幽趣あり、見雁思鄕信、聞猿積淚痕天邊を過ぐる雁を見ては故鄕の音信を思はざるを得ず、樹上に啼く猿を聞ては淚痕を積まざるを得ず、火と雁は眼に入るもの、鐘と猿とは耳に入るもの、孤舟萬里夜、秋月不堪論普通の舟游とすれば秋夜舟中月に逢ふ、古を談じ、今を論ぜざるを得ず、然るに今の身は使して蜀に赴くの客、思鄕の心强くして他意なし、何ぞ月を評論するに堪へんや、所謂沒風流の人と爲るなり、記し畢りて本集を閲す、「巴南舟夜市」とあり、本集に從うて改む可し、

宿關西客舍寄嚴許二山人

雲送關西雨　風傳渭北秋　孤燈燃客夢　寒杵搗鄕愁
灘上思嚴子　山中憶許由　蒼生今有望　飛詔下林丘

雲は送る關西の雨、風は傳ふ渭北の秋、孤燈客夢を燃し、寒杵鄕愁を搗つ、灘上嚴子を思ひ、山中許由を憶ふ、蒼生今望あり、詔を飛ばして林丘に下さんことを、

【句釋】宿關西客舍寄嚴許二山人十一字の題なるが、本集には宿關西客舍寄東山嚴許二山人時天寶初七月初三日在內學見有高道擧徵の三十一字なり、今の題却て分明なり、雲送關西雨長安の西は悉く關西と云ふ、黑雲が一片起ると見る間に關西は早雨と爲る、風傳渭北秋長安を流るる川に渭水あり其の渭水の北より吹き來る風は已に秋氣を帶ぶるなり、蜀へ赴かんとして旅舍にて作るものなればなり、孤燈燃客夢夢の字を我邦人は所謂夢と正直に解すと雖も、元來睡や眠と殆んど同義に用ふる字なり、客眠を孤燈が照すことなり、夢となく醒むるとなくなぞと注するは眞に是れ夢中の解釋なり、寒杵搗鄕愁寒杵は元來衣を搗つ響きなれども、我より言はしむれば衣を搗つにあらずして一一我が愁を搗つが如し、鄕を思ふ心切なればなり、灘上思嚴子、山中憶許由嚴山人と許山人とを以て古の嚴子陵と許由との二人に比す、姓を同うし、其の高格を同うすればなり、嚴子陵は漢の光武帝の舊友にして、光武が天下を取り之を召せども至らず、漸くにして官を授くるも遁れ去つて灘上に釣を垂れ、人世の榮華を眼中に置かず、許由は堯帝が天下を讓らんと欲したるも辭して承けず、箕山に隱る、是亦天下の賢人なり、蒼生今有望蒼生とは百姓、卽ち天下の人民を謂ふ、天下の人民が今此の二山人をして良政を執らしめんと希望するなり、飛詔下林丘天下人民の希望する所なれば、天子亦之を用ひざるべからず、

遂に詔書を下して此の二山人をして相位に就かしめんとなり、林丘より下して廟堂の上に坐せしめんとなり、季昌曰く、按ずるに天寶六年、上天子廣く天下の士を求めんと欲す、一藝に通ずる者をして皆京師に至らしむ、李林甫、草野の士の對策論文なり其の姦惡を斥言せんことを恐れて乃ち郡縣に試練せしめ、名實相副ふ者を取て聞奏す、既に至るとき、皆試に詩賦論を以てす遂に一人も及第する者無し、林甫乃ち上表して賀す、野に遺賢無しと、此の結句暗に此の意を含むとの解或は信に近し、

夜宿龍吼灘思峨嵋隱者

官舍臨江口　灘聲已慣聞　水煙晴吐月　山火夜燒雲
且欲求方士　無心戀使君　異鄉何可住　況復久離羣

官舍江口に臨む、灘聲已に聞くに慣ふ、水煙晴れて月を吐き、山火夜雲を燒く、且つ方士を求めんと欲す、使君を戀ふに心なし、異鄉何ぞ住まるべきや、況んや復久しく羣を離るるをや、

【句釋】龍吼灘は今日の四川省嘉定府、卽ち當時の嘉州に在り、今日の地志に龍吟灘と謂ふ、

岑參は此嘉州の刺史たりし事あり、思峨嵋隱者成都府を去る千里にして此の嘉定府に峨嵋山あり、兩山相對して峨眉の如し、高さ日本里にして一里強と云ふ、此の隱るる人を思うて作る、官舍臨江口峨眉縣令の官舍は江口に臨んで起つ、灘聲已慣聞灘聲を始めて聞く者は耳熟せざるが故に夜眠る能はざるも聞くに慣れたる者は何の喧噪も感せざるなり、月日久しく此に來つて住すればなり、水煙晴吐月龍吼灘の實況ならん、水煙も暗ければ月を吐く能はず、晴なるが故に月を吐く、山火夜燒雲峨嵋山の實況ならん、山家の火は高處にあれば雲を燒くかと疑はるるなり、且欲求方士方術卽ち仙術を學ぶ士を方士又道士と云ふ、火も恐れず、水も怖れざる人なり、而かも人世の榮華には希望を抱かず、我も其の方士を學ばんとの意を有す、無心戀使君止むを得ず今刺史卽ち縣令と爲るも、本心にはあらず、故に使君を戀ふの心無しと云ふ、使君は縣令なり、異鄉何可住美游は惡歸に及かざる意、他鄉好しと雖も住まるべからず、況復久離羣故鄉の南陽を去てより已に他鄉此の嘉州の刺史と爲つて三年を經過せり、親戚知己に離れ孤獨の生活を自ら憐むなり、嘉州の本領此に在り、毫髮も虛僞の言にあらざること其の傳にても知るべきなり、

南亭送鄭侍御還東臺

江亭酒甕香　白面繡衣郎　砌冷蟲喧坐　簾疎月到床
鐘催離興急　絃緩醉歌長　關樹應先落　隨君滿路霜

江亭酒甕の香、白面繡衣郎、砌冷にして蟲坐に喧しく、簾疎にして月床に到る、鐘は離興を催して急に、絃は醉歌を緩うして長し、關樹應に先づ落つべし、君に隨ふ滿路の霜

【句釋】南亭送鄭侍御還東臺の九字、本集には南亭の上に趙少尹の三字を加ふ、素隱の解に曰く、岑參が蜀に在りし時、鄭氏が始め侍御の官たりしが、蜀へ貶せられ、今復本官に復し都へ還らんとす、時に趙少尹が此の人の爲め別離の燕を設く、參も此の時、別燕の席、卽ち此の南亭に來り此の詩を作つて送りしものならんと、江亭酒甕香南亭は江水に臨んであり、離別の酒甕非常に美酒なり、故に香氣多きなり、白面繡衣郎白面諸生の語は輕蔑したる語なるが、今此の白面は風貌の美なるを云ふ、繡衣郎俗に言ふ「オシヤレ」なるもの、俗に言ふ貴公子の風采あるを云ふ、砌冷蟲喧坐亭の砌下は冷冷として蟲鳴が坐に喧しく聞えるなり、簾疎月到床窗前の簾は疎なるを以て月影が漏れて床上に到る、別に簾を揭げざるなり、鐘催離興急夜深に至るまで酒を酌み、遂に曉鐘に近づき、最早や燕を撤するの場合に逼る、絃緩醉歌長鐘は無情なるを以て我の惜意を解せず、絃は有情なるを以て一刻も時を長うせんと緩緩と彈じて以て歌を長うす、關樹應先落季昌曰く前漢の侍御史綉衣直指あり、出るときは姦猾を討じ、大獄を理む、武帝の制する所なりと、卽ち御史は刑官なり秋官なり、君が此の秋官の役を以て歸らる、未だ冬ならざるも關門の樹は落葉すべし、樹の落葉は姦猾の沒落するに譬ふるなり、隨君滿路霜君が行くに隨がつて姦猾が衰滅する、是君が霜の如き役、霜の如き淸嚴を以てなればなり、本集に路を鬢に作る、路を以て可とす、

南溪別業

結宇依青嶂　開軒對翠疇　樹交華兩色　溪合水重流
竹塢春來掃　蘭樽夜不收　逍遙自得意　鼓腹醉中游

宇を結んで青嶂に依り、軒を開いて翠疇に對す、樹交つて華兩色、溪合して水重流、竹塢春來つて掃ふ、蘭樽夜收めず、逍遙自得の意、腹を鼓して醉中に游ぶ、

【句釋】南溪別業『三體詩講義』に劉良が別業なりと、『古注』に劉良曰別業別居也とある、誤讀の結果此の滑稽を演せるなり、岑參の別業と見るべし、結宇依青嶂宇は字義に於て非常に大小の意義を異にす、四方上下を指して宇と云ふ場合は大ならずや、屋宇と指す場合は極めて小ならずや、今の句は屋宇にて極めて小庵を指す、嶂は山なり、山に依つて宇を結ぶ、開軒對翠疇軒は長廊の窗あるもの之を開いて見れば、前方は翠色を呈する田疇ある、前句は高處、後句は低處、樹交華兩色紅樹と紫樹と接近してあれば、其の花色も二種ある道理なり、溪合水重流南溪と北溪とが相合して流るれば卽ち是れ重流の道理なり、竹塢春來掃塢を一本徑に作る、孰れなるも妨げず、春に至りて洒掃する慵性の致す所にあらず、春は道路の掃除手を下し易ければなり、實際を知る者にあらざれば知るを得ず、蘭樽夜不收蘭の字は竹に對して用ふ、酒の香氣の烈なるを以て譬ふ、收めざるは深夜に到るも尙酒を飲むと云ふ意味なり、逍遙自得意自ら得意とする所は此の間の逍遙卽ち徘徊にあり、鼓腹醉中游此の句は太平を樂む極度を云ふ、飽くまで食ひ、心中愁全く無きなり、

泊舟盱眙　常建

泊舟淮水次　霜降夕流清　夜久潮侵岸　天寒月近城

平沙依雁宿　旅館聽雞鳴　鄉國雲霄外　誰堪羈旅情

舟を泊す淮水の次、霜降つて夕流清し、夜久しうして潮岸を侵し、天寒うして月城に近し、平沙雁の宿するに依り、旅館雞鳴を聽く、鄉國雲霄の外、誰か羈旅の情に堪へん、

【句釋】泊舟盱眙盱眙は縣名、唐代は淮南道に屬す、今日の安徽省泗州なり、盱眙縣の令と爲つて赴く時、舟中に夜泊したる事を賦す、泊舟淮水次安徽泗州の盱眙縣に屬する淮水は「臨淮」と稱す、單に淮と言へば河南省汝寧府正陽縣の東南、而して西淮は河南の南陽府唐縣の東南、北淮は江蘇省に屬す、淮の區域は頗る廣し、泗州の淮は洪澤湖に近づき、川口の尤も廣き處とす、次は「ヤドル」「ホトリ」の義あり、今「ホトリ」の義を取る、霜降夕流清秋晩初冬の景なり、夕ならざれば宿せず、夕字を眼を著けて見よ、夜久潮侵岸夜坐久しうして潮の滿ち以て岸まで水の茫茫たるに至るを見る、天寒月近城月が皓皓と盱城に近きは卽ち天が寒苦なればなり、俗に「サエル」を寒と見るべし、平沙依雁宿舟は中流に泊せず平沙に依て雁の宿する處に接近して居るを云ふ、旅館聽雞鳴一夜睡る能はずして遂に曉鷄を聽くに至る、本集に旅を候に

作る、候が正しきなり、旅は誤なり、鄉國雲霄外天外卽ち遠方を雲霄外と云ふ、故鄉は遠きなり、誰堪羈旅情羈旅の情を奈何ともする無きなり、

江南旅懷　祖詠

楚山不可極　歸客自蕭條　海色晴看雨　江聲夜聽潮
劍留南斗近　書寄北風遙　爲報空潭橘　無媒寄洛橋

楚山極む可らず、歸客自ら蕭條、海色晴れて雨を看、江聲夜潮を聽く、劍は南斗に留まつて近く、書は北風に寄せて遙かなり、爲に報ず空潭の橘、洛橋に寄するに媒無し、

【句釋】江南は楊子江南なり、旅懷は汝濆に歸隱せんとして江南を道中し、其の愁懷を叙す、詩人不遇の悲み言外に在るを見る、楚山不可極江南は古の楚國、楚國の山は廣大にして極むべからず、亦愁の極むべからざると同じ、歸客自蕭條山の極むべからざるのみを以て歸客の意蕭條なるにあらず、愁の盡きざるが故に蕭條たり、卽ち自然に蕭條たり、海色晴看雨今日の黃海を云ふ、黃海の色晴天なるも雨の降る如くなるを覺ゆ、江聲夜聽潮江は楊子江なり、潮聲を聽

くには夜に在つて晝にあらず、晝は響大なるも感傷を起すこと大ならず、旅客夜半に之を聞く、響き大ならずとも、旅客の感傷を起すこと大なり、劍留南斗近豐城の劍氣斗牛を衝きし故事を用ふ、己が慷慨の志氣ある尙未だ消磨せざるを云ふ、書寄北風遙洛陽は江南より北方に當る、歸隱の汝濆には近づきつつある程に、別るる洛陽には益す遠きなり、爲報空潭橘橘は江南に多く生じて北方には多くあらず、江南は人家到處に之れ有り、空潭の曲に至るまで之れ有り、而かも無媒寄洛橋洛陽の人へ之を贈らんと思へども、其の贈るべき媒介者無きを恨む、本集に贈洛橋とあり贈を以て可とす、上に潭字を用ふ、此に橋と云ふ所以、洛陽に贈るの意味は損せず、

冬日野望　于良史

地際朝陽滿　天邊宿霧收　風兼殘雪起　河帶斷氷流
北闕馳心極　南圖尙旅游　登臨思不已　何處可消憂

地際朝陽滿ち、天邊宿霧收まる、風は殘雪を兼ねて起り、河は斷氷を帶びて流る、北闕心極に馳せ、南圖尙旅游す、登臨すれども思已まず、何れの處にか憂を消すべき、

【略傳】　于良史は至德中に侍御史と爲り、又張徐州建封が從事と爲る、肅宗の朝の人たることは疑ひ無し、傳の詳なるは無し、

【句釋】　冬日野望題は平平たり、而して意は平平たらず、野望に托して感慨を叙す、地際朝陽滿普通に字の使用法としては天を前に用ひ、地を後に用ふ今は平仄法として、地を上に用ひたるものの如し、大地の際限なきまで朝陽の氣が充滿する、朝陽は旭日にも義が通ず、一陽來復の事にも通ず、今此の兩義を合一して見るべし、天邊宿霧收昨夜は四面を籠めたる霧が今朝は全く晴れ收まる、朝陽を以て肅宗の威光に比し、宿霧を以て祿山が賊黨に比したるなりとの古注あり、一時流行の解釋法今は取らず、風兼殘雪起一陽來復するも氣候は尙寒し、殘雪起る所以、河帶斷氷流氷が融解し流れつつある形容を云ふ、殘雪は祿山が殘黨を指し、斷氷も亦其の餘黨を指すと解す、是も古注の說、北闕馳心極漢初に蕭何が高祖の命を以て未央宮を治す、而して東闕と北闕とを分ち、北闕を以て正門とす、卽ち天子出入の門、侍臣出入の門なり、心を此の北闕に馳するは心天子を忘れざるなり、南圖尙旅游『莊子』の逍遙游に北冥に魚あり、其の名を鯤と爲す、鯤の大其の幾千里なるを知らず、化して鳥と爲る、其の名を鵬と爲す、鵬の背其の幾千里なるを知らず、怒つて飛ぶ其の翼は垂天の雲の若し、是の鳥や海運れば運は荒則ち

將に南冥に徙らんとす、南冥は天池なり、齊諧は怪を志せる者なり、諧の言に曰く、鵬の南冥に徙るや、水に擊つこと三千里、扶搖に摶て上るもの九萬里、去るに六月の息を以てするものなり、中略、雲氣を絕ち、青天を負ひ、然して後南を圖る以上莊子要するに丈夫大志を發するを以て圖南と云ふ、旅游するも汗漫の游にあらず、念念國を忘れず、我が志を遂げんと欲するなり、登臨思不已高邱より野を望んで我が種種の思は已まざるなり、何處可消憂憂思は已まず、如何する處に向つてか此の憂思を消滅するを得るや、

早行

劉洵伯

鐘靜人猶寢　天高景自涼　一星深戍火　殘月半橋霜
客老愁城下　蟬寒怨路傍　靑山依舊色　宛是馬卿鄉

鐘靜にして人猶寢ぬ、天高うして景自ら涼し、一星深戍の火、殘月半橋の霜、客老いて城下を愁へ、蟬寒くして路傍に怨む、靑山舊色に依る、宛かも是れ馬卿が鄉、

【句釋】　劉洵伯は成都の人とのみ、傳は未詳、早行古注に劉久しく長安に在つて今成都へ歸ら

んと欲して以て早朝に發するなりと、鐘靜人猶寢曉鐘の響きが靜かに聞ゆる、路傍の人家は人猶未だ起きざるなり、或は解す鐘靜は未だ鐘を打たざるなりと、鐘を打たざる說を可とす、天高景自涼秋天正に高くして秋景正に涼しきなり、一星深戍火星は天上の星か、又戍火一點あるを星と認めしや、下の殘月の語に對すとなれば、曉天の明星と見るが可か、戍は戍卒が篝を焚き警備する其の篝火が僅かに天上の星と共に一點殘るを云ふ、殘月半橋霜板橋には半分ばかり霜が積りたる也と解するは愚解なり、一橋にては一星に妨げあるを以て半と爲したるのみ、其の義は一橋卽ち一箇の橋に殘月が霜を照しありと云ふなり、半庭や半江と字法同じ、一江月を半江月と改め以て佳なりと稱せられたる唐の詩人ありしを以て知るべきなり、客老愁城下城下ニ愁ふと訓したる本あり、ニはヲに改むべし、城下は種種紛雜の事多く、老の身は畢竟此の紛雜なる事を愁ふるなり、城下は卽ち長安城下なり、蟬寒怨路傍蟬は仲夏より晩秋に至るまで出るもの、晩秋初冬には最早や衰ふ、氣候も寒く聲も亦寒し、路傍の樹に鳴くも身將に死せんとするの時、怨まざるを得ず、暖地の無きを怨むと解するは誤る、寒地暖氣を叙したるにはあらず、青山依舊色古も今も無く唯青青たるは山色あるのみ、宛是馬卿鄉蜀の成都は漢の司馬長卿が生地なり、早く羈舍を出で其の行を忙ぎし甲斐あつて前面に青山を認め得たり、サナガラ

是れ司馬長卿が故鄉卽ち蜀の成都たらんとは、非常の喜を此の句に表はすなり、

逢皤公

周賀

帶病稀相見　西城早晚來　山衣風壞帛　香印雨沾灰
坐久鐘聲盡　禪餘岳影回　却思同宿夜　高枕說天台

病を帶びて相見ること稀なり、西城早晚か來らん、山衣風帛を壞り、香印雨灰を沾す、坐久しくして鐘聲盡き、禪餘岳影回る、却つて思ふ同宿の夜、枕を高うして天台を說くことを、

【略傳】周賀は初め佛徒たり、名を淸塞と云ふ、廬嶽に居る、南徐に客たること亦久し、後少室終南に來る、姚合が錢唐太守たりし時、淸塞の詩を讀み其の才に感じ、還俗せしむ、時に夏蔕已に高し、榮望落落、竟に往て名山の諸老に依つて自ら終ふ、

【句釋】皤公は未詳、佛徒は二字名を一字用ふ、例せば晉の惠遠は遠公又遠師、隋の智顗は顗公又顗師、梁の達磨は磨公又磨師、總て下の字を取る、今皤公も此の例を以て知るべし、逢とあるからには舊知己ならん、帶病稀相見帶の字頗る奇なり、是れ平生病多き身なればなり、俗

に云ふ持病の有る人なり、其れが爲め相見ること稀なり、西城早晩來西城　卽ち長安より公は早晩此の地へ來るやと相逢うて第一に問を發するなり、山衣風壞帛幡公の風采を云ふ、幡公の著けたる山衣が風の爲め飄飄と翻るを云ふ、壞は破の意味に見るは惡し、元來僧の衣の色は壞色と稱して、純の白、純の紫、純の黃と反對に、何の色とも區別し難き色に染むるなり、純色を壞したる色なれば壞色衣と稱す、破れたる衣と云ふにはあらず、今壞帛も此の意にて破の意味にはあらざるなり、風の字あるを以て破と見たるは淺見なり、唯山衣卽ち純色ならざる色、俗眼の喜ばざる色「山野の僧の著けたる布衲」と見るは不可なり、香印雨沾灰香爐の中の灰を奇麗にして、而して其の灰中に卍字形の印を押し、其の印の中へ香を入れ、而して火を點す、火は字形なりに燒けて以て長時間を保つ、是を香印と云ふ、軒窗の下に之を置く、其の時雨降りたるが故に灰が沾うて香遂に燒けず、何等の寂寥ぞや、坐久鐘聲盡（是れは深夜を云ふ鐘聲は短きにあらず、而かも對坐久しきを以ての故に盡きるなり、禪餘岳影回（是れは曉天を云ふ對談後卽ち禪に入る既にして岳影が回る、月西に傾くと知るべし、却思同宿夜我が昔日の事を思ひ出すなり、昔し公と共に禪を修習せし時は恰も今夜の如くなりしと昔を思ふを「却思」と云ふ、同宿は天台山に同宿せしなり、高枕說天台天台の敎理を說くにあらずして、天台山の風景を談說せしなり、

暮過山寺

賈島

衆岫聳寒色　精廬向此分　流星透疎木　走月逆行雲
絕頂人來少　高松鶴不羣　一僧年八十　世事未曾聞

【句釋】衆岫聳寒色夕暮に山寺に過ぎる而して眼に入るもの第一に衆岫なり、岫の色悉く寒し、精廬向此分精廬は佛徒が道を修し精進して懈怠せざる意に依て、其の住處、卽ち寺を指す、精舍と同じ、儒佛共用する文字とす、此の山寺に向ふ路が衆岫の間に分るとなり、流星透疎木寺に入らんとする途中の所見、流星は疎木の間を透りて見え、走月逆行雲月の走る方と、雲の行く方と、各の其の方向を異にするを以て逆ふと云ふ、此の二句十字は千古の名句とす、兩句三年に得しものなり、絕頂人來少人の來る少なる處に已れ一人は來るなり、高松鶴不羣鶴の羣すべきと思ふ處に鶴は羣せず、一僧年八十山僧に出會す年已に八十、釋尊は七十九で入滅せり、

此の僧は佛陀に超ゆること一歳なり、世事未曾聞出世の眞僧固より世事を聞くの要無し、要なきを以て之を聞かざるなり、

懷永樂殷侍御

石田虞芮接　種柳白雲陰　穴閉神蹤古　河流禹鑿深
樵人應滿郭　仙鳥幾巢林　此會偏相憶　曾供雪夜吟

馬戴

石田虞芮に接す、柳を種う白雲の陰、穴閉ぢて神蹤古り、河流れて禹鑿深し、樵人應に郭に滿つべし、仙鳥幾か林に巢ふ、此の會偏に相憶ふ、曾て雪夜の吟に供せしことを、

【略傳】馬戴字は虞臣、會昌中の進士、大學博士たり、後朗州龍陽の尉に貶せらる、集一卷あり、

【句釋】永樂は縣名、河中府古の魏國なり、殷は姓、名は堯藩、侍御は官名、永樂縣令と爲り、後侍御を以て江南に官す、『唐人衆妙集』に此の題を「集宿ニ姚侍御宅一懷ニ永樂宰殷侍御一」に作る、長きに失するも此の題にて詩意分明と爲る、石田虞芮接沙石多く畊作に適せざる田を石田と

云ふ、虞芮は地名、古注に云ふ「尙書傳」に虞芮、田を爭うて文王に質さんとす、境に入つて、其の士大夫の相讓ることを見て、乃ち爭ふ所を讓り以て閒田と爲す、虞芮讓る所の田、今の平陸縣の西六十里閒原是なりと、石田と閒田と接するは無用のものと無用のものと接す、畢竟淸廉の士爭はざるなり、種柳白雲陰稻に代ふるに柳を以てす、利を爭ふの因とならざればなり、穴閉神蹤古此の永樂縣には銅穴十二處あり、古神人來り以て銅を發掘すと、今は神人無く、唯其の神蹤の古たるのみ、河流禹鑿深河中府の龍門縣は昔し夏の禹王が鑿せし處、此を鑿して以て黃河に通ぜしめしなり、共に永樂に關係の地なるを以て之を言ふ、樵人應滿郭樵人は賈人と異なり、利を爭ふこと急ならず、郭に滿つと雖も喧譁ならず、仙鳥幾巢林鶴を仙鳥と云ふ、林に巢ふ、人の害心無きを知ればなり、此會偏相憶此の會は即ち姚侍御が宅の會なり、此の會に列なりて乃ち殷侍御を憶ひ出す、眞に是れ友情然るべきなり、曾供雪夜吟昔日晉の王徽之が雪夜に酒を斟んで左太仲の詩を吟じ、以て戴逵を憶ひ、舟に棹して戴を訪ふ事あり、我は王徽之にあらざるも、君は當年の戴逵の淸骨を具す、我豈君を憶ひ詩を吟せざるを得ん、

韋處士山居

許渾

劚藥去還歸　家人半掩扉　山風藤子落　溪雨豆花肥

寺遠僧來少　橋危客過稀　不聞砧杵動　應解製荷衣

藥を劚つて去つて還た歸る、家人半ば扉を掩ふ、山風藤子落ち、溪雨豆花肥たり、寺遠くして僧の來ること少なり、橋危くして客の過ぐること稀なり、砧杵の動くを聞かず、應に荷衣を製することを解すべし、

【句釋】韋處士傳未詳、處士は官途に仕へざる人の稱、劚は「キル」なり、劚藥去還歸藥草を劚つて山中に去り還た歸、家人半掩扉所見の實況ならん、主人家に歸るも、客來らざるとも定め難し、家人は半ば扉を掩ふ所以、山風藤子落、溪雨豆花肥一句は高處の景、一句は低處の景、共に是れ自然、一方は正に謝し、一方は正に盛ん、寺遠僧來少、橋危客過稀禪僧の來る少なるは寺遠ければなり、騷客の過ぎる稀なるは橋危ふければなり、獨木橋は如何に騷客なるも渡るに危險なり、不聞砧杵動此の山居に於て未だ砧の響きを聞かぬ、此の響きを聞かぬは他に之に代るものあればなり、何ぞ應解製荷衣荷葉を以て衣を製するは、隱者の業務とす、自ら製し自ら服す、肯て人を煩はさざるなり、

瀑布寺貞上人院　鄭巢

林疎多暮蟬　師去宿山煙　古壁燈熏畫　秋琴雨慢弦

竹間窺遠鶴　巖上取寒泉　西岳莎房在　歸期更幾年

林疎にして暮蟬多し、師去つて山煙に宿す、古壁燈畫を熏し、秋琴雨弦を慢す、竹間遠鶴を窺ひ、巖上寒泉を取る、西岳に莎房在り、歸期更に幾年ぞ、

【句釋】貞上人二字の名を一字用ふること前に辨せり、林疎多暮蟬林の疎なるは秋なればなり、暮蟬の多きは頑童の之を捕ふること無ければなり、師去宿山煙山中の煙寺に入つて宿するなり、瀑布寺は大寺にて、院は其の支院と知るべし、古壁燈熏畫上人に逢はんと欲するも上人は去つて在らず、是を以て院内を見るに燈光が畫に熏じて古壁を照す、所謂壁畫にて畫幅にはあらず、秋琴雨慢弦床に懸けたる秋琴は雨の爲めに自然と弦を慢めらる、素隱は何人か琴を彈じて靜かに聞くと解したるが、そは誤なるべし、竹間窺遠鶴竹間より窺ひ見るところの物は唯遠鶴あり、上人にはあらず、巖上取寒泉素隱の注に云ふ上人の巖上に行きて寒泉を汲み取らるるかと思うたぞ、是れ誤解なり、上人の事を言ふにあらず、上人を訪ふ者の爲す所なり、巖上より寒泉を

汲み取ることが出來ると云ふに過ぎず、鑿して注するの要なきなり、西岳涉房在上人が院の西岳を見れば、此に一宇の涉艸にて結ぶ房あり、棲身の房として頗る吾意に滿つ、歸期更幾年我も官を罷め、此の涉房に來つて佛陀の禪法を修習せんと欲する念は存するも、幾年後に其の志を遂げるやは明かならずと叙す、歸期とは許渾自身が事を云ふ、巴南道中より此に至る共に十四首、

送龍州樊史君　許棠

曾見邛人說　龍州地未深　碧溪飛白鳥　紅旆映青林
土產唯宜藥　王租只貢金　政成閒宴日　誰伴使君吟

曾て邛人の說くを見る、龍州地未だ深からず、碧溪白鳥飛び、紅旆青林に映ず、土產唯藥に宜しく、王租只金を貢ぐ、政成つて閒宴の日、誰か伴ふ使君の吟、

【句釋】龍州は唐代劍南道の應靈郡、今日四川省嘉定府榮縣の西南一百五十里の地なり、樊使君は傳未詳、曾見邛人說邛人は邛州の人、邛州は龍州の鄰州にて秦漢に臨邛と稱し、梁に邛州

と號し、西魏に蒲原と號し、唐宋元の三朝共に邛州と號す、其の邛州人の說を曾て聞きし事がある、見は聞と同じ、龍州地未深龍州は邛州に比すれば尙邊境ならずと云ふにあり、邛州は打箭爐卽ち今日の西藏に已に近き地、龍州より深きこと知るべし、邊境ならざるゆゑ憂へ玉ふなと云ふに在り、碧溪飛白鳥蘆葉溪の如き、百枝溪の如き名高き溪あり、此等を稱して碧溪と號したるならん、紅旆映青林使君が使君の威嚴を表する紅旆は青林に映じて奇麗なり、繁盛なり、碧と白と紅と青との色を以て對を取る、土產唯宜藥、王租只貢金此の二句は此の龍州の地は非常に富裕なるを言ふ、藥草を多く產す、藥草は價が貴ければ土產として州の詑りとする所、又金は採掘すれば際限なく出づ、米を公租とせずも、金を以て王租に充つ、銅官山なぞの山は卓王孫が錢を鑄し地とし、古石山は石鑛を出し、大蒜子の如しと「史記貨殖傳」にあり、政成閒宴日使君の使君たる職務は良政を執り、州民を善治するに在り、而かも俗吏にあらざれば、餘閒の時は宴を設け騷客を會し、以て詩を賦し文を屬す、誰伴使君吟然るに使君は政治家にして詩人たり、政治の餘暇、詩を賦し之を吟ず、使君に相和して吟ずる者は誰ぞや、暗に龍州は詩人に乏しきを云ふなり、

送人尉黔中

周繇

盤山行幾驛　水路復通巴　峽漲三川雪　園開四季花
公庭飛白鳥　官俸請丹砂　知尉黔人後　高吟採物華

盤山行くこと幾驛ぞ、水路復巴に通ず、峽には三川の雪を漲らし、園には四季の花を開く、公庭白鳥を飛ばし、官俸丹砂を請けん、知んぬ黔人に尉として後、高吟して物華を採らんことを、

【略傳】周繇字は爲憲、池州の人、咸通の進士、明皇夢鍾馗賦を以て名を知らる、後池州至德縣の令と爲る、

【句釋】送人尉黔中友人が黔中の屬官と爲つて行くを送るなり、黔中は唐代江南道に屬す、今日四川省酉陽州彭水縣治なり、盤山は山又山を云ふ、行幾驛水驛と山驛と數限り無きなり、東西南北或は峽中へ赴くにも、湖南の洞庭へ行くにも、湖北の宜昌へ行くにも、貴州の大定へ赴くにも、路は容易ならず、水路復通巴巴は今日の重慶府なり、酉陽州より重慶に到る舟路として支邦里程三百里あるべし、峽漲三川雪、園開四季花是れ黔中の實景なり、峽中より出る三川

の水は雪浪を揚げて舟行は困難ならん、が公園には春夏秋冬花が開きて美麗眼を慰むるに足らん、前句は巨景、後句は細景、公庭飛白鳥白鳥は元來公庭に飛ぶべきものにあらず、其の飛ぶべきものにあらざる鳥が飛ぶ、其の人の慈心微物にまで及ぶを云ふ、白鳥は白鷗なり、官俸請丹砂今日は四川と湖南と省を別にするも古は一國なり、乃ち湖南省の辰州府の辰溪は多く丹砂を出す、醫藥に用ふるもの、尉官たる友人は定めし月俸を割き、此の丹砂を請ふなるべし、請ふに容易なるを言ふ、此の丹砂は仙藥とし、長生藥として服せらるるものなり、知尉黔人後黔人に尉たるは卽ち黔中を治むるなり、治むるが友人の職務とす、高吟採物華公事閒あらば私事に移る、私事も俗事にあらず、黔中の物華を賞して高吟するなり、

道院

王周

白日人稀到　簾垂道院深　雨苔生古壁　雪鶴聚寒林
忘慮憑三樂　消閒信五禽　誰知是官府　煙縷滿爐沈

白日人の到ること稀なり、簾垂れて道院深し、雨苔古壁に生じ、雪鶴寒林に聚まる、慮を忘るるは三樂に憑り、閒を消するは五禽に信す、誰か知ら

ん是れ官府なるを、　煙縷滿爐の沈、

【句釋】王周は傳未詳、道院は官府の治所、『澠水燕談錄』に江陰の軍、北大江を距ぐ、地僻にして過客鮮なし、將の之を迎ふる無し、通州の南江に阻し、東北海に濱す、士大夫至ること罕、二州に仕官する者最も優逸を爲す、故に士大夫江陰を以て兩浙道院と爲し、通州を淮南道院と爲す、役人の休息所と見れば可なり、白日人稀到、簾垂道院深無事清閒、幽趣見るべし、雨苔生古壁雨の爲め苔が青青と古壁に生ずるなり、雪鶴聚寒林鶴は小雀、鶴に似て水を好む、將に陰雨ならんとすれば則ち鳴く、其の巢の傍に池を爲り、水を含んで之に滿つ、魚を取つて中に置き、以て其の雛に食ましむ、此の鳥は仰ぎ鳴けば晴、俯して鳴けば陰と、羽の色雪の如く白きを以て云ふ、諸本多く鶴に作る誤りなり、忘慮憑三樂孟子の三樂と榮啓期の三樂とあり、孟子曰く父母俱に存し、兄弟故なし一樂なり、仰いで天に愧ぢず、俯して人に怍れず二樂なり、天下の英才を得て而して之を敎育す三樂なり、此の三樂說は今の詩意にはあらず、『列子』に說く榮啓期、鹿裘にして帶索、琴を鼓して歌ふ、孔子問うて曰く先生の樂しみは何ぞ、期曰く天萬物を生じ、唯人を貴しと爲す、吾既に人と爲るを得たり、是れ一樂なり、男女の別あり、男は尊く女は卑し、吾男と爲るを得たり、是れ二樂なり、人生襁褓を免れざるものあり、天死を言ふ吾年

九十なり、是れ三樂なり、貧は士の常、死は人の終り、吾何をか憂へんや、今忘慮と云ふは何の念も起らざるを云ふ、『韓詩外傳』に曾子の三樂を說く、親あり畏る可し、君あり事ふ可し、子あり遺す可し、此れ一樂なり、親あり諫む可し、君あり去る可し、子あり怒る可し、此れ二樂なり、君あり論ず可し、友あり助く可し、此れ三樂なり、今の詩は孟子と曾子との意を舍て而して列子の意を取るなり、消閒信五禽『魏志』に華佗曰く吾に一術あり、五禽戲と名く、一に曰く虎、二に曰く鹿、三に曰く燕、四に曰く猿、五に曰く鳥、每に體中佳ならざるあらば、起つて一禽の戲を爲す、亦以て疾を除く可し、消閒の游戲として上乘のものなりと爲す、今日の所謂體操なるものに當る、李文正が後園に五禽を育し、皆客名を以て之を稱す、鶴は仙客、孔雀は南客、鸚鵡は隴客、白鷳は閒客、鷺鷥は雪客、是れは今の詩と關係無し、誰知是官府清閒無事此の如きは誰か是れ官府なりと言ふことを知らんや、煙縷滿爐沈滿爐の沈水香、其の煙、縷の如く揚がり一室に香氣溶溶たり、是れ仙境、是れ人境に似ざるなり、已前共に三首、白鳥、丹砂、雨苔、雪鶴等の字面同じきものなり、

一意

周弼曰く唯格律を守り、聲病を揣摩するは詩家の常なり、若し時として度外に出で、縱橫放肆にして、外整はざるが如くにして、中實に節に應ずる、唯又造次にして能くする所にあらず、

格は法則なり、律は律の格あり、絕は絕の格あり、聲とは平聲、去聲等の四聲、病とは蜂腰病、鶴膝病等の病なり、揣摩すとは卽ち思量するなり、定合するなり、此等の事を離れては別に詩無きが故に此の格律聲病を揣摩するを詩家の常と爲す、而かも其の正法外、時として海に波瀾ある如く、法度を離れて作る、是れを縱橫放肆と云ふ、而かも外形は整正ならざる如くに見ゆるも、中心は節に應じ之を打てば金石の聲を發す、是れ詩家の大切なる所とす、俄かに能くする所にあらざれば、古人の力量ある所を見るべしとなり、一意とは初めの句に寒と言へば、其の寒の意味にて全首を表現するか、暖と言へば、篇末まで暖の意味を布演して、毫髮も他の意味を加へざるを云ふ、余を以て之を言はしめば、古人の詩一意ならざるものなし、竹に梅を接ぐが如く、又紅白等の色を雜然と陳列する如きは斷じて之れあらず、周

弼に向つて論せんと欲する所なれども、暫らく周弼の說は說として之を尊重す、而かも余の說は別に在る有り、周弼に從ふことは能はざるなり、

終南別業　王維

中歲頗好道　晚家南山陲
行到水窮處　坐看雲起時
偶然値林叟　談笑滯還期

【句釋】終南別業終南山に右丞は別業あり、此に於て道を修し、僧と談じ、樵夫と話し、身心を淸淨にして生を終へしなり、南山一名は太乙、「太乙近天都」是れなり、橫に關中の南面に亙り、西秦隴より起り、東藍田山に徹す、周八百里と、中歲頗好道人の年を上中下に分てば、中歲は三十歲後を指すべし、右丞は早く妻を失し、後娶らず、梵行淸淨、釋氏と異ならず、而かも中歲は道を好むの志あるも、之を行なふに至らず、「道は道士の道なり」と解したる人あ

り、大に誤る、但善道と見るべし、儒釋道の三教を共に修習せし人なること明白なり、道士を好んで仙道を喜びし事は右丞の一生を通じて斷じて之れあらず、晩は晩歳四十以後なり、右丞は六十を以て死せしなれば、四十妻を失して後を晩歳と見て可なり、家南山陲曾て宋之問が別業を右丞後に之を購ひ、以て佛を奉じ、僧を招き、詩を賦し、法を談ずる外、事を計らず、清涼寺は右丞歿後、其の別莊を改めしものなりと云ふ、興來每獨往是れ一人悠悠自適したる時の事を叙す、興の生ずる時は他人を要せず、獨自ら往く、勝事空自知山水の勝事は自ら見て、其の勝事たる趣味は自ら知るのみ、空の字右丞の語より出づ實に千斤の量あり、他人の空疎とは大に異なる、勝事なるも空しく自ら知るなり、人に知らせ度き心は十分なれども如何せん他人は自分と道を馳背す、是に於てか不本意ながら空しく自分一人知るのみ、行到水窮處、坐看雲起時水の窮まるは溪の盡る處なり、其の溪の盡きる處に到れば、湧然として雲起る、一窮し、一起る、變化縱横、妙言外に在り、偶然値林叟偶然は「フト」なり期せずして値ふなり、素隱は適然と解す、箇は第二義なり、適然には相違なきも、第一義としては「料ラザリキ」を以てす、料らざりきは「フト」なり、期約なくして林中の叟に値ふ、林中の叟は是れ亦物外の人、世に求め無き人、我と同調の人なり、談笑滯還期雲の起る處を看て悠然と坐して居りたるに何處とも

知れず林叟の來るに會ふ、値ふからには山を談じ水を語り、談笑盡きる時無し、遂に還期を滯礙する所以、意を以て解す可し、口を以て言ふべからず、

晩泊潯陽望廬峯　孟浩然

掛席幾千里　名山都未逢　泊舟潯陽郭　始見香爐峯
嘗讀遠公傳　永懷塵外蹤　東林精舍近　日暮坐聞鐘

【句釋】席を掛く幾千里、名山都て未だ逢はず、舟を潯陽の郭に泊し、始めて見る香爐峯、嘗て遠公の傳を讀んで、永く懷ふ塵外の蹤、東林精舍近し、日暮坐ながら鐘を聞く、

潯陽は今日の江西省九江府德化縣西南二十里の處とす、浩然は湖北の襄陽の人、長安より鄕へ還る途次此に夜泊せるなり、泊する江は大江卽ち楊子江なり、廬峯は九江府の南に當る廬山の一峯なり、『廬山記』に香爐山孤峯秀起し、游氣其の上を籠め、棼氳煙の若しとあり、掛席幾千里席は布帆と見るべし、陝西省の長安より此に降る數千里なるも、名山都未逢黃牛山荆門山等は途次必ず見る、而かも此の如き奇秀なる名山は未だ見ずとなり、泊舟潯陽郭今日舟

を此の九江府城の下に泊して、始見香爐峯前に未逢と云ふ、其れを受けて始見と云ふ、一意の格たること知るべし、始見の二字、無量の喜び言外にあり、或る人「泊舟の十字見る處を云ふ解なし」と云ふ、解の無き處、餘味津津たるが襄陽の長處、他人の及ばざる所、襄陽の妙は文字の末にあらざるなり、嘗讀遠公傳昔し晉の慧遠卽ち遠公の傳を讀む、遠公は道安の高弟にして、持律堅固、淨土の法門に精通し、且餘事詩に工、終身酒を飲まず、病を受け酒を飲まずんば、命旦夕なりと醫師の言に依て、律文を侍者に命じて病中酒を許すや否やの戒律を檢せしむ、檢未だ了らざるに化を他土に移しし高僧なり、襄陽は此の高僧を平生敬慕せしなり、永懷塵外蹤此の高僧は三十年廬山を出でざりし人、東林寺は其の法を說きし寺、塵外蹤は卽ち此の香爐峯下の東林寺を指す、永く懷ふは、永く敬する所以なり、東林精舍近遠公の住せし東林寺は尙ほ儼然、日暮坐聞鐘舟中に坐して以て鐘聲の起るを聞く、是れ東林寺、卽ち自分の敬慕する遠公の住せし寺より出る聲なり、

茶人　陸龜蒙

天賦識靈草　自然鍾野姿　閒來北山下　似與東風期
雨後探芳去　雲間幽路危　唯應報春鳥　得共斯人知

天賦靈草を識る、自然に野姿を鍾む、閒に北山の下に來る、東風と期するに似たり、雨後芳を探つて去る、雲間幽路危し、唯應に報春鳥のみ、斯の人と共に知ることを得べし、

【句釋】茶人は詩人、畫人と言ふが如く、茶を嗜む人を云ふ、陸が自身を主とし、亦他人にも通ず、天賦は俗語の「生レ付キ」と云ふ事なり、天の賦與する事なり、天は自然の意味、『中庸』の注に人物の生ずる、各の其の賦する所の理を得て、以て健順五常の德を爲す、所謂性なり、識靈草先生より習うて覺りしことは忘れることあり、又能く覺る能はず、天賦は忘れず、又能く覺る、此の茶人は乃ち能く靈草卽ち茶の事を識得する、茶は漢代より起るもの、六朝に盛んに以て唐に及ぶもの、自然鍾野姿此の句は平易に解すれば、我は自然卽ち天賦から野人の姿態を備ふとなり、鍾は備と見て可なり、閒來北山下北山下は陸が所有の茶園あるなり、北山は一名を顧渚山と稱す、南劍の蒙頂石花、湖州江蘇省の顧渚紫笋、峽州の碧澗明月、此の三を天下の三名茶と稱す、似與東風期北山下の茶園に來り、新芽を摘む時、必ず東風吹く、是れ我と規約あるものの如きなり、陸が家は吳の松江の甫里に在り、雨後探芳去芳は茶の新芽を云ふ、茶を摘

むには雨後を宜しとす、葉柔なればなり、雲間幽路危北山に來る雲間は路が危きなり、唯應報春鳥顧渚山に鳥あり、報春鳥と名く、其の鳴くや二月にして、其の止むは三月とす、茶を製する者は此の鳥聲を聞いて以て時を知るなり、得共斯人知斯人は斯の茶人卽ち自身を指す、自身より外多くの人は此の茶に對する觀念の薄きを云ふ、

尋陸羽不遇　釋皎然

移家雖帶郭　野徑入桑麻　近種籬邊菊　秋來未著花
扣門無犬吠　欲去問西家　報道山中出　歸來每日斜

家を移して郭を帶ぶと雖も、野徑桑麻に入る、近ごろ種う籬邊の菊、秋來未だ花を著けず、門を扣けども犬の吠ゆる無し、去らんと欲して西家に問ふ、報じて道ふ山中より出でて、歸り來ること每に日斜、

【略傳】皎然名は晝、姓は謝氏、長城の人、靈運が十世の孫なり、杼山に居す、文章僑麗、顏眞卿、韋應物、竝に之を重んず、之と酬唱す、貞元中敕して其の文集を寫さしめ、祕閣に入る、詩七卷あり、後世貫休と齊己と皎然と合して唐の三高僧と云ふ、

【句釋】●陸羽字は鴻漸、茶を嗜んで妙理に造る、茶經三卷を著はす、天下仰いで以て茶神と爲す、『梁谿漫志』に曰く人は偏に好む所あるべからず、往往嗜好する所の爲め、其の他の長を揜はる、陸鴻漸の如き、本唐の文人達士、其の著書、君臣契三卷、源解三十卷、江表四姓譜十卷南北人物志十卷、吳興歷官記三卷、潮州刺史記一卷、占夢三卷、茶經三卷、然れども世傳ふる所のもの特に茶經のみ、他は傳はらず、蓋し茶經の揜ふ所なり、韋縣に瓷偶人あり陸鴻漸と號す、十茶器を買うて一鴻漸を得、市人茗を沽る、利あらざるときは之に灌注す、鴻漸茶を嗜んで終に困辱に遭ふ、嗜好の弊、此に至る、獨笑ふ可らずや、後世の學者之を惜む此の如し、皎然は蓋し詩友なり、今訪問して遇はざる事を叙す、陸羽の傳に智積禪師なる高僧あり、一日途上に羣雁の小兒を覆ふを見る、之を得て之を育す、且筮するに、鴻陸に漸む、其の羽用つて儀と爲すべしと、乃ち陸を氏、羽を名、鴻漸を字とすと、而かも此の人僧たるを嫌うて暇を禪師に乞ひ、去つて苕溪に家を移したるなり、移家雖帶郭郭は町の事、市中に家を移すと雖も、野徑入桑麻羽を尋ねんと欲する者は是非此の野徑を過ぎて桑麻の中を行かずんば其の家に到る能はず、便利にして且閒靜に屬する地なるべし、近種籬邊菊、秋來未著花人無きが故に强て庭園を見る、然るに近來種ゑたる菊は、秋期なるも未だ花を著けず、扣門無犬吠、欲去問西家犬は

相伴うて去る故に吠ゆる無し、西鄰の家人に向つて、羽が行處は如何と問ふ、報道山中出西鄰の家人が我が爲めに報じて道ふ、羽は日日山中に入つて、歸來毎日斜家に歸り來るは毎日日斜に及ぶと、出の字一本去に作る、山中に去るが、山中より出るより勝る、已前四首、

起句

周弼曰く發首の兩句平穩なる者は多し、奇健なる者は余が見る所唯兩篇のみ、然れども聲太だ重くして、後聯稍し難し、後の兩篇の發句も亦佳なり、聲稍輕し、終篇均停なり、然れども奇健なること、前の兩篇に及ばざること遠し、故に此に著はして法と無し、識者をして自ら擇ばしむ、

發首の兩句とは一二の句を云ふ、平穩とは事實を事實の儘に叙して別に他奇なきを云ふ、奇健とは想と字と意表外に出で、事實以外に景を描くを云ふ、古詩としては「大江流二日夜一」の類律としては「酒渇愛二江清一」の類、而かも聲調重くして、五六の二句と斤量が稱はず、周賀と栖蟾とは暢當と司空曙の二人に及ばざること遠し、唯周と蟾とは起句已に佳にして、終篇卽ち全首の結構も整正すと爲す、周弼の起句奇健なるもの稀なりと爲すは、初盛唐の人に就て言ふにはあらざるべし、若し初盛の人に於て奇健なるもの無しと斷ずとせば、そは非常に誤りなり、老杜にせよ王右丞にせよ、起句奇健なるもの非常に多し、此に一一擧示するの遑なきを以て出さざるが、其の集を閲する者は必ず余が言の妄ならざるを知るべし、他は深く議す

べきもの無し、

軍中醉飲寄沈八劉叟　　暢當

酒渴愛江清　餘酣漱晚汀　軟莎欹坐穩　冷石醉眠醒
野膳隨行帳　華音發從伶　數杯君不見　都已遣沈冥

酒渴江の清きを愛す、餘酣晚汀に漱ぐ、軟莎欹坐穩に、冷石醉眠醒む、野膳行帳に隨ひ、華音從伶を發す、數杯君見えず、都已に沈冥を遣る、

【略傳】暢當は河東の人、貞元の初大常博士と爲る、後果州刺史と爲つて卒す、

【句釋】軍中醉歌寄沈八劉叟暢當が果州の刺史たりしとき、軍中に於て醉歌し、沈八と劉叟との二人に寄せたるもの、沈劉叟に尊稱の八字を加へたるなりとの說あるも、余は沈と劉との二人と思ふなり、酒渴愛江清、餘酣漱晚汀酒を多量に飲み、爲めに咽喉乾く、依つて江水の清流を愛す、愛すは卽ち飲むなり、餘酣とは俗語の酒に中るなり、依つて晚汀に臨んで口を漱ぐ、軟莎欹坐穩柔軟なる莎草の上に欹坐卽ち膝を揚げて坐す、醉後の常態として正坐は能はざるなり、冷石醉眠醒冷やかなる石上に一睡したれば醉も漸く醒む、野膳隨行帳麤食を指して野膳と

云ふ、天幕を指して行帳と云ふ、天幕中に於て游宴するなり、華音發從伶華夏の音樂を從者の伶人が奏す、伶人は樂を奏し、庖人は膳を調す、數杯君不見君とは沈八と劉叟なり、都已遣沈冥都已は二字にて「スデニ」なり、沈冥とは前後の事なんにも分別せざるを云ふ、醉ひ倒れるなり、第四句に於て已に醒めたりと言ひ、此に至りて沈冥せりと言ふ、意味一貫せざるに似たるも、前後轉換の法なりと解する人あり、是れ或は然らんか、

題江陵臨沙驛樓　　司空曙

江天清更愁　風柳入江樓　雁識楚山晚　蟬知秦樹秋
凄涼多獨醉　零落半同游　豈復平生意　蒼然蘭杜洲

江天清くして更に愁ふ、風柳江樓に入る、雁は楚山の晚を識り、蟬は秦樹の秋を知る、凄涼多くは獨醉、零落半は同游、豈復平生の意ならんや、蒼然たり蘭杜の洲、

【句釋】江陵東漢に縣荊州南郡、唐に山南道、今日湖北の荊州府江陵縣治なり、江右に遷謫せられたる時、江陵を過ぎ此の驛樓に題せしなり、江天清更愁楊子江上の天、清朗なる愛すべき

なるに愁と云ふは、遷客なればなり、風柳入江樓汇上の柳枝は風の爲め吹かれて以て江樓中に入る、雁識楚山晩、蟬知秦樹秋雁や蟬の類其の生得として、時節を能く知る、江陵は古の楚なり、亦秦の南郡なり、凄涼多獨醉客中の身友無し、酒を飲み獨醉ふ、而かも凄涼たるを免れず、零落半同游同游は知己なり、知己半は零落せるなり、零落の語の中に死もあり貧もあり、獨醉して凄涼、同游は零落、今倒語法を用ひて作るなり、豈復平生意、蒼然蘭杜洲豈は否定の辭、平生は未だ必ず愁を以て本領と爲さず、今日相愁ふるは平生の意にあらざるなり、況んや蒼蒼然たる蘭杜洲に對す、楚の屈原が落魄して此に彷徨せし事を思ひ出すなり、已前二首、

酒渴愛二江清一、餘酣漱二晩汀一、江天清更愁、風柳入二江樓一、此の句を奇健と稱するも中唐以後の句として奇健なり、老杜の國破山河在、城春草木深、」剩水滄江破、殘山碣石開、」孤月當レ樓滿、寒江動二夜扉一、」水色含二羣動一、朝光切二太虛一、」四更山吐レ月、殘夜水明レ樓」江漢思レ歸客、乾坤一腐儒」昔聞洞庭水、今上岳陽樓、」何ぞ曾て奇ならざらん、健ならざらん、盛唐大家の詩を選ばざるが故に周弼の說は兒童の爲めに示すものと知る可し、

送耿山人游二湖南一　周賀

南行隨二越僧一　舊業一池菱　兩鬢已垂レ雪　五湖歸掛レ罾

夜濤鳴二柵鎖一　寒葦露二船燈一　此去更無事　却來猶未レ能

南行越僧に隨ふ、舊業一池の菱、兩鬢已に雪を垂る、五湖歸つて罾を掛く、夜濤柵鎖を鳴らし、寒葦船燈を露す、此を去つて更に無事ならば、却來すること猶ほ未だ能はず、

【句釋】耿山人は傳未詳、湖南は長沙府を以て其の中心地と爲す、長沙に游ぶ人ならん、南行隨越僧湖南は楚地、越は今の江蘇浙江の地方なり、山人が湖南へ游ぶに越國の僧が案内するものと見ゆ、舊業一池菱舊の別業卽ち別莊が今は荒涼と化して、只一池に菱あるのみならん、兩鬢已垂雪頭髮の二方に鬢を結ぶは男子の普通なり、其の兩鬢も已に垂垂として雪の如く白し、五湖歸掛罾越の范蠡は宰相の印綬を解き、五湖に歸りて商賈と爲りし事あり、今山人も此の五湖に游んで罾を掛くるの意思あり、今日は游ぶなれど他時は必ず歸りて漁人とならんとなり、罾は「アミ」なり、夜濤鳴柵鎖柵鎖は魚を捕ふる爲め湖中に立てし「ヤナ」と云ふもの、此ヤナに夜の波濤が是れに當り音を爲す、寒葦露船燈寒葦の間より夜中は船燈の光が漏れて見ゆ、此去更無事此の長安城を去つて、湖南に行けば今も無事なるが、更に安閒無事、所謂賊亂の爲め

危害せらるる愁無きなり、祿山や史思明の賊徒が長安の近方を荒しし時なればなり、却來は自分の本住地へ歸り來る意味の語、猶未能無事の地を喜んで歸り來るの意思は生ぜざるべしと想像して云ふ、

宿巴江

釋栖蟾

江聲五千里　瀉碧急於絃　不覺日又夜　爭教人少年
一汀巫峽月　兩岸子規天　山影似相伴　濃遮到客船

【句釋】栖蟾は大順中の人、屏風巖に居すとのみ傳未詳、『全唐詩』に詩十二首あり、巴江は蜀中、江聲五千里巴江は四川省重慶府巴縣の東北を流る、一名內江、東南に流れて漢中より始寧城下を經て涪陵に入り、曲折する三回巴字を爲す、故に曰ふ、五千里は巴江の長大なるを云ふ、流は降つて楊子江に入る、此の間五千里ある べし、瀉碧急於絃四川の地たる最も高し、此を出る

水なれば其の勢の迅きこと絃よりも急なる道理なり、不覺日又夜水流袞袞として日夜息まず、爭教人少年爭は「ドウシテ」と云ふ意味、奔流日夜息まず、乃ち人をして光陰の速かなるを嘆せしむ、人は嘆息し憂愁する遂に白頭なり易し、長く少年たるを免さず、孔夫子の嘆を寓す、一汀巫峽月巫峽、巴峽、明月峽皆蜀中の風景絶佳の地とす、巫峽は夔州に屬して三峽の一、西陵峽、歸峽、巫峽となり、巫山の東、『水經注』に巫峽は山に因て名と爲す、三峽より七百里中兩岸連山、停午夜分に非ざるより、曦月を見ず、晴初霜旦に至る毎に、林寒く澗肅、常に高猿の長嘯するあり、此に於て一汀に月影を印するを見る、兩岸子規天猿を言はずして子規を言ふ、不如歸去と喚び、旅人に切なればなり、山影似相伴山影が江中に映じて我と日日離れず、濃遮は樹陰が濃かに遮るなり、到客船本集に客を曉に作る、客でも曉でも妨げず、句として佳惡なし、樹影が我が宿泊する船に到るとなり、已前二首、隱公曰く按ずるに伯弓此を分つて其の說を著けず、惟ふに此の卷只四首分けて二と爲す者は、以前の兩首起句太だ重きを一例と爲す、後の兩首は起句稍輕く、終篇均停なることを一例と爲す、具なること卷首評する所の如し、其の意最も明白と爲す、是を以て之を觀れば、他は類に觸れて知るべし、江聲五千里、瀉碧急於絃、南行隨越僧、舊業一池菱、是れ稍や輕しと爲すものの如し、南行の十字は輕きに似たるも

江聲の十字何ぞ輕きことあらん、江天清更愁、風柳入二江樓一、是れ何の重きことかあらん、南行の十字を輕しとせば、江天の十字も輕しと爲すべし、江天の十字重しとせば、南行の十字も亦重しとせざるを得ず、輕重の分ち、讀者の自覺に在り、孰れを重しとし、孰れを輕しと定む、余は此の詩に於て判斷する能はず、伯弱の見は創見たるに相違なきも、全然服從する能はざるなり、

結句

周弼曰く結句は意を以て盡くせり、而して寬緩に能く拘攣の外に躍出する、前輩謂ふ奔馬を截るが如しと、余が得る所は獨此の四首足れり、四十字を見るに、字字放過すべからず、意を以て盡くすとは、全篇に對する肝要なる處なるを以て、意を盡さずんば佛を造りて魂を入れざるが如きなり、而かも其の體度は拘攣卽ち法度の外に躍出して、縱橫の氣無かるべからず、縱橫の氣之を奔馬を截るか如しと云ふ、而して其の作法を兒輩に示すは、此に選べる四首にして足る、是を以て輕輕に看過すること莫かれと訓戒するなり、四十字とは遍禮南朝寺、焚レ香古像前、秋日平原路、蟲鳴桑葉飛、坐喜無二雲物一、分明見二北辰一、道人星月下、相次禮二茅君一の四十字なり、此の論は別に批難すべき點を認めず、

送二陳法師赴一上元一　皇甫冉

延陵初罷レ講　建業去隨レ緣　翻譯推二多學一　擅場最少年
浣レ衣逢二野水一　乞レ食向二人煙一　遍禮二南朝寺一　焚レ香古像前

延陵初めて講を罷む、建業に去つて緣に隨ふ、翻譯多學を推す、擅場最も少年、衣を浣つて野水に逢ひ、食を乞うて人煙に向ふ、遍く南朝の寺を禮して、香を焚く古像の前、

【句釋】陳法師は傳未詳、上元は唐代縣江南道昇州、今日の江蘇省江寧府上元縣治なり、延陵初罷講延陵は唐代縣江南道潤州、今日の江蘇省鎭江府丹陽縣南三十五里の地、此の延陵に在つて經を講せしを罷めて、建業去隨緣建業は建康なり、金陵なり、上元縣是れなり、此の上元に向つて去るは卽ち隨緣なり、隨緣の文字、元來佛語にて詩語にあらず、故に釋門に關する詩の外は用ひず、六朝の天子此に都し、所謂南朝四百八十寺にて、佛敎繁昌の地とす、延陵と建業とは日本里程とすれば二三十里を隔たるのみ、翻譯推多學梵語を譯して漢語と爲す、博覽强記の學者にあらざるよりは、難事業とす、法師乃ち多學と推さる、依て謂ふ陳法師は玄奘三藏ならんかと、奘公の俗氏は陳氏なればなり、翻譯の事を叙するより見れば玄奘或は當らん、擅場最少年擅場は多人數の中で第一の事譯師中に在つて最も少年にして而かも譯主と推さるる名僧なり、玄奘を言はずして果して誰なる、浣衣逢野水、乞食向人煙此の二句は延陵より上元に赴く途上の事、野水に衣を洗ひ、人家に食を乞ふ、佛道を修する人の本業とす、淸淨の活命なり、遍禮南朝寺上元には佛寺多し、一一之を禮すべし、焚香古像前古佛像の前に向つて焚香誦經するなり、

送從弟歸河朔　李嘉祐

故鄉何可到　令弟獨能歸
空城流水在　荒澤舊林稀
秋日平原路　蟲鳴桑葉飛
故鄉何か到るべき、令弟獨能く歸る、諸將旌節を旌す、何人か布衣を重んず、空城流水在り、荒澤舊林稀なり、秋日平原の路、蟲鳴いて桑葉飛ぶ、

【句釋】從弟は『爾雅』の釋親に兄弟の子、從父昆弟と謂ふ、「イトコ」是れなり、河朔は河北、今日の直隷山東の二省は唐代の河北道なり、故鄉何可到長安より河朔に到る數百里を隔つ、到著の日を定むべからず、令弟自身の從弟を稱するに令の字を以てす、弟と雖も卑しめざるの意なり、獨能歸遠方を獨能く歸る、賞する意と羨む意とを含む、諸將旌節是れは他人の事を出して以て從弟と反對なることを云ふ、諸將が他國へ往く時は旌節を旌はして以て威勢を示す、